

摩耶さまが行く！

皇南輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DMM GAMES 『艦隊これくしょん』の登場人物（艦娘）の物語を描いた“2次元小説”です。

ゲーム世界の艦娘が現代日本に現れた、という現代パロディですので、ゲームに忠実な物語をお求めの方は読まれないことをオススメします。

（*、—、）

目次

摩耶さまが行く

| | | |
|-----|---------------|----|
| 第1話 | 嫌いな艦娘 | 1 |
| 第2話 | 摩耶さま | 5 |
| 第3話 | 解体された艦娘 | 9 |
| 第4話 | 女らしくない艦娘 | 13 |
| 第5話 | 消えた摩耶さま | 17 |
| 第6話 | 随伴艦、摩耶さま | 21 |
| 第7話 | エアガンで武装する摩耶さま | 25 |
| 第8話 | 摩耶さまと一緒に抜錨す! | 25 |

| | | |
|---------|-------------|----|
| 第9話 | 摩耶さま、シヨツピング | 29 |
| モールへ行く! | | 33 |

| | | |
|------|--------------|----|
| 第10話 | 妹にされた摩耶さま | 37 |
| 第11話 | 摩耶さま、客になる | 42 |
| 第12話 | 摩耶さま、取り囲まれる | 46 |
| 第13話 | 摩耶さま、胸ぐらをつか | 51 |
| 第14話 | デートに誘われた摩耶さま | 56 |

| | | | | | |
|--|-------|-------------|----|------|-------------|
| | 第15話 | 摩耶さまが令和の日本に | | へ行く! | |
| | 現れた理由 | | 61 | 第22話 | ダム湖の幽霊 |
| | 第16話 | 摩耶さまの胸元から出て | | 第23話 | 摩耶さまからのキス |
| | きたもの | | 66 | 99 | |
| | 第17話 | コスプレイヤー摩耶さま | | 第24話 | 摩耶さまの女心? |
| | | | 71 | 103 | |
| | 第18話 | ハイヒールの摩耶さま | | 第25話 | ダム湖に消えた摩耶さま |
| | 77 | | | | 108 |
| | 第19話 | 摩耶さまは人間? | | 第26話 | 摩耶さまの姉妹艦 |
| | 82 | | | 114 | |
| | 第20話 | 夜に武装する摩耶さま | | 第27話 | 人を殺めた艦娘 |
| | 87 | | | | 119 |
| | 第21話 | 摩耶さま、心霊スポット | | 第28話 | 軽装重巡艦娘・鳥海 |
| | | | | 124 | |

| | | | |
|-----|-----------|--------------|-----|
| | 第29話 | 鳥海の眼鏡が光るとき | 130 |
| | 第30話 | 摩耶さま、警察に捕まる | 135 |
| | 第31話 | 摩耶と鳥海の怪しい会話 | 140 |
| | 第32話 | 笑う摩耶と泣く鳥海 | 146 |
| | 第33話 | 提督の決意！ | 150 |
| | 第34話 | 作戦会議からの深夜の偵察 | 155 |
| 160 | 第35話 | 駆逐イ級への尋問 | 155 |
| | 第36話 | 湖畔の森での砲撃戦 | 166 |
| | 第37話 | 摩耶さまの実戦的要望 | 171 |
| | 第38話 | 『艦これ』からの手紙 | 176 |
| | 第39話 | 艦首島の廃工場群 | 183 |
| | 第40話 | 謎の老婆・李紅陽 | 188 |
| | 第41話 | 鎮守府 | 195 |
| | 【第2章】第42話 | 新しい鎮守府は | 201 |
| | 資源不足？ | | 201 |

第43話

陽炎のお願い

—

摩耶さまが行く

第1話 嫌いな艦娘

令和の日本。今日は8月の、ある日曜日。

都内のワンルームのアパートで一人暮らしをしている近衛碧輝（このえあおき）、22歳。そんな碧輝が暮らすアパートから早朝の蒼空に向けて叫び声があがった。

「うわあああー！ 金剛ちゃんー！」

寝癖はそのままに白いルームウェア姿でノート型パソコンを見つめていた碧輝は、両手で寝癖がついた髪をくしゃくしゃにしながら焦茶色の冷んやりとしたフローリングに仰向けに倒れ込んだ。

碧輝が見つめていたパソコンの画面には『艦娘轟沈』という暗くて沈痛な文字が表示されている。

碧輝はポカンと口を開けたまま、小さな部屋の白い天井を生氣がなくなつたような目で見つめた。

「俺の金剛ちゃんが轟沈した」

碧輝が忙しい仕事の合間に1年かけて育成してきた艦娘の金剛が、艦娘たちの敵

である深海棲艦の空母艦載機によって撃沈させられてしまったのだった。

「せっかく、ケツコンカツコカリまでしたのに。」

碧輝の頭のなかで、世界一可愛い嫁艦の「バーニングラブ!」という叫び声がリピートしている。金剛を失って心の中にポツカリと黒くて重い穴が開いた碧輝の両目に、うつすらと涙が浮かんだ。

「金剛。俺の嫁艦。俺のカノジョ。」

どれくらい冷んやりとしたフロアリングの上で横たわっていただろう。真夏の明るい日差しが差し込む冷房が効いた部屋で、碧輝は力無く上半身だけを起こした。すぐに、震える右手でマウスを掴むと轟沈画面をクリックした。すると、金剛を失って5人だけの艦隊となった艦娘たちが目に入ってきた。碧輝は深くため息をついた。

「どうしてこんなことになってしまったんだ!」　いつもなら赤城や加賀の零戦が制

空権を握って、いや、待てよ。今回、対空カットインが発動しなかったよな」

碧輝はパソコンの画面を食い入るように見つめた。その視線の先には艦娘のひとりである摩耶がいた。正確には『摩耶改二』だ。

「お、お前が対空カットインしていれば、俺の金剛ちゃんが沈むことはなかったんだ!」

碧輝はパソコン画面に向かって唾を吐くような勢いで不満をぶつけた。パソコン画面の中の摩耶は、当然、何も反応しない。

碧輝は、虚しい気持ちで、再び深いため息をついた。

愛する艦娘、金剛を失った碧輝は茫然自失となりながら、戦闘で中破や大破した艦娘たちを入渠させた。その中には中破した摩耶も含まれていた。

そのときだった。

「こき使いやがって、クソが！」

パソコンのスピーカーから摩耶の罵声が飛んだ。摩耶の入渠時にそんなセリフが吐かれることは十分知っていた。しかし、愛する金剛を失ったばかりの碧輝にとって、いつもなら聞き流している摩耶の罵声は彼の怒りの炎に油を注いってしまった。

「なんだと?」

金剛を失い沈痛していた碧輝は、完全に頭に血が上った。それからの数秒間、碧輝は自分が何をしていたのか記憶がなかった。気がつくやうに、摩耶が碧輝の艦娘リストから消えていた。

碧輝は怒りの衝動に駆られて練度80の摩耶改二を解体してしまっていたのだった。

「あ、ついムカついて摩耶を.....まあ、いいや。あんな口が悪くて役に立たない摩耶なんて、嫌いな艦娘だからな」

碧輝はノート型パソコンの画面をパタンと勢いよく閉じた。そして、深くため息

をついた。

「なんかもう、やる気が失せたな」

金剛を失った碧輝は、シャワーを浴びて重く沈痛な気分を洗い流そうと立ち上がった。

(つづく)

第2話 摩耶さま

シャワーで爽快な気分になった碧輝は、ユニットバスのドアを押し開けた。白いバスタオルで濡れた髪を拭きながら、室内のベッドに身体を向けたときだった。

碧輝は、ノート型パソコンが置いてある小さなテーブルの前に立つ、ひとりの女性と目があつた。その瞬間、碧輝の思考は停止して頭の中が真っ白になった。

一人暮らしの俺の部屋に女の子がいる。

碧輝は、正面で突っ立って自分を見つめている女性を思考が停止したまま見つけた。そのとき、碧輝を見つめる女性の視線が下に向けられた。その動きにつられて碧輝も自分の視線を自分の下半身に落とした。次の瞬間、碧輝は慌てながら白いバスタオルで自分の股間を隠した。

「う、うわあ！　だ、誰だよ、お前！　ここは俺の部屋だぞー！」

碧輝は股間に白いバスタオルを押しつけながら叫んだ。そのとき、ようやく女性の全身姿が碧輝の視界にしっかりと入ってきた。

女性はノースリーブの胸元だけを隠したような変わった制服のようなものを着て、少し動いただけでパンティが見えてしまいそうなミニスカートをはいている。茶色

かかった栗色の髪はショートボブで、頭の左右からは金属の尖った棒のようなものが2本ずつ飛び出している。さらに、彼女の両腕には2連装砲の形をした金属が装着されている。

そんな女性の全身姿を把握した碧輝は、この女性を初めて見る気がしなかった。

「よっ！ お前が提督か？」

突然、女性が日本語で話し始めた。その表情は明らかに不機嫌そうだった。

いきなり提督呼ばわりされた碧輝は、相変わらず思考が停止したまま、ただ首を傾げた。

「お前が提督かって、この摩耶さまが聞いてんだよ。答えろよ」

「摩耶さま？」

碧輝は呆気に取られながらも聞き返した。

「おう、あたしの名前は摩耶っていうんだ。で、お前は提督だろ？」

自らを摩耶と名乗った女性は、碧輝を威圧するような険しい目で見つめた。

「お、俺は提督なんかじゃない。というか、お前、どこから入ってきたんだよ！ 勝

手に他人の部屋に入るなんて不法侵入だぞ！」

「ふほーしんにゆー？ なんだそれ」

そのとき、碧輝は、目の前にいる女性が、ゲーム『艦隊これくしょん』に登場す

る艦娘『摩耶』にそっくりであることに気がついた。

「不法侵入の意味も分かんないのか？　しかも、お前。なんで、摩耶のコスプレして

他人の部屋にいるんだよ」

摩耶と名乗る女性の全身姿を怪訝そうに見渡す碧輝ではあったけれど、目の前にいる摩耶姿のコスプレイヤーは、なかなか良くできている、と感心さえした。

「こすぶれって何だよ。難しい言葉ばかり使って不愉快な奴だな」

「不愉快は、こつちのセリフだよ！　いきなり他人の部屋にコスプレ姿で入り込ん

で来てさ！　撮影するなら、どこかの公園に行けよ！」

「あー、もうわけがわかんないや！　いっそのこと、ぶっころしてやろうか？」

摩耶と名乗る女性は、叫びながら右腕に装着している小型の2連装砲を碧輝の眼前に向けた。突然、銃砲のような金属を向けられて驚いた碧輝ではあったけれど、すぐに自分に向けられている金属製の銃砲を興味深そうにジロジロと観察を始めた。

「お前さ、摩耶のコスプレにしては本当に良くできていますよな。この20・3センチ連装砲なんか、まるで本物みたいじゃないか！」

「あつたり前だろ！　本物に決まってるじゃないか！」

摩耶と名乗る女性がそう答えた次の瞬間、碧輝の目の前で20・3センチ連装砲が轟音と同時に火を吹いた。

第3話

解体された艦娘

ズドン！

突然の轟音と衝撃の反動で、碧輝は仰向けにひっくり返った。フローリングの上で大の字になって倒れる碧輝。先ほどまで手にしていた白いバスタオルは、その意図通りに碧輝の股間を隠し続けている。

突然の轟音に驚いて仰向けに倒れてしまった碧輝は、呆然と白い天井を見つめた。微かに白煙が視界に漂い、硝煙の香りが鼻を撫でた。鼓膜がキーンと鳴っている。碧輝は瞬きを数回繰り返した。

「な？」

本物だろ！

自らを摩耶だと名乗る女性が、フローリングの碧輝を見下ろしながら得意げに言った。その表情には微かな笑みが浮かんでいる。

一方の碧輝は、何が起きたのか分からない様子でしばらく天井を見つめていたが、やがて我に返ると、股間のバスタオルを両手で掴んだ。そして、そのままゆっくりと立ち上がった。

「どうだ、思い知ったか？」

両目を見開いたまま立ち上がった碧輝を見据えた摩耶は、右腕に装着された20.3センチ連装砲を掲げて見せた。碧輝は無言のまま摩耶の連装砲に視線を向けると、すぐに何かに気づいたかのように左後方を振り返った。

「あー！ やつてくれたな！」

碧輝は驚きの声をあげた。碧輝が振り返った視線の先には、2つのボール大の穴がぽつかりとあいた蜘蛛の巣のような窓ガラスがあつた。

「お前、何してくれるんだよ！ 窓ガラスが割れてるじゃねーか！」

碧輝は白いバスタオルで股間を隠しながら叫んだ。そんな碧輝の反応を見て取った摩耶は、おかしそうに高らかな笑い声をあげた。

「あつはつは！ こりや、愉快だなー」

「愉快じゃねーだろ！ この部屋は賃貸なんだぞ！ 窓ガラスを割ったら弁償

しなきゃいけないじゃないか！」

「ちんたい？ ま、そんなことより、これであたしが艦娘だつてことがよく分かつた
だろ？」

摩耶は両手を腰にあてながら、自分より10センチほど背が高い碧輝を見あげた。碧輝は怒りを抑えるかのように息を深く吸い込んだ。

「艦娘」

碧輝は忌々しそうな視線を摩耶に送りながら呟いた。

「そうさ、あたしたち艦娘はな、深海棲艦と戦う戦士なんだぜ。どうだ、分かってくれたか？」

屈託の無い笑顔を自分に向けてくる摩耶を見て、碧輝の怒りは、いくらか和らいだ。碧輝は、まだうつすらと白煙を吐き出している連装砲の砲口を見つめた。

よく分からないけど、どうやら目の前にいる摩耶はコスプレイヤーじゃなく本物らしい。

碧輝は怪訝そうな表情で摩耶の顔を見つめた。

「わ、分かった。お前が艦娘の摩耶だとしよう。その摩耶が、こちらの世界に何をしに来たんだ？」

すると、摩耶の表情から笑みが消えた。

「そうだそうだ、思い出した。提督、お前さ、この摩耶さまを解体しただろ。今までさんざんこき使っておいて用無しになったら解体だなんて、まったく酷い話だよなー！」

摩耶が碧輝を睨みつけながら顔を近づけた。事実を指摘された碧輝は動揺して摩耶から視線を逸らした。

「だからな、この摩耶さまを使い捨てにするような提督をぶっころしてやる！
と
思ったら、いつのまにか、こんな湿気た部屋にたどり着いたってわけさ」

摩耶からの返答を耳にした碧輝は、彼女を不思議そうに見つめた。

「確かにゲームで摩耶を解体した。でも、解体したら、ふつう消えるだろ？
のに、どうして俺の目の前に現れるんだ？」

それな

碧輝の言葉に対して、摩耶は親指を自分の顎に当てながら考え始めた。

「それが不思議なんだよなー。ま、でも、退屈な世界から抜け出せたわけだし、これで、
いっつか！」

摩耶はそう答えると、再び碧輝に屈託の無い笑顔を向けたのだった。

(つづく)

第4話 女らしくない艦娘

碧輝は、いま目の前にいる艦娘を見つめながら、彼女がなぜゲームの世界から現れたのかを考え始めた。

どうやら、摩耶は、ゲームの中で俺に解体されたことを根に持っているらしい。だけど、それにしては本気で怒っているようには見えない。むしろ、喜んでいるようにも見える。じゃあ、ゲームの世界から現れた目的は、いったい何なんだ？

摩耶は好奇心旺盛なのか、碧輝が暮らすワンルールの室内を見渡している。碧輝は、そんな摩耶を見つめながらため息をついた。

よりよって、どうして摩耶なんだろう。金剛ちゃんなら良かったのに。
「なあ、提督。ここはお前の部屋か？」 部屋にしては「ずいぶん狭いよなあ」。

摩耶が嘲り笑いながら言った。碧輝は摩耶の言葉を無視した。ゲームの中で摩耶という艦娘を、金剛ほどではないけれど、頻繁に使ってきた碧輝は摩耶の言葉遣いが良くないことを十分に知っていた。

「これが風呂か！ 狭いなあ！ これじゃあ、まるで棺桶じゃねーか！」

摩耶がユニットバスの中を覗き込みながらケラケラと笑った。碧輝は、やれや

れ、と言わんばかりに深いため息をついた。

「なあ、摩耶。そろそろゲームの世界に戻ってくれないか？」

碧輝は、わざと不機嫌な表情を摩耶に向けた。

「それは無理だなー。戻り方も分からないしさ」

「じゃあ、これからどうするんだよ？」

「こつちの世界にも深海棲艦がいるんだろ？ だったらさー、提督。一緒にあいつ

らを始末しようぜ！」

「深海棲艦なんて、こつちの世界にいるわけないだろ」

「え、いないのか。そんなはずないんだけどなー」

「いないものはいないんだよ。俺が暮らす日本は平和な時代なんだよ」

碧輝は、摩耶と交わす非現実的な会話に疲労感を覚えた。もしこれが、金剛や能代だったらまだ良かったかもしれない。しかし、いま目の前にいるのは、決して女らしくとは言えない摩耶なのだ。

「じゃあさ、提督が暮らす街を案内してくれよ」

摩耶は期待を込めた目で碧輝を見つめた。摩耶と目が合った碧輝はすぐに目を逸らした。

「無理。俺、今日はバイトがあるんだ」

「ばいと？　　出撃するのか？」

「出撃じゃない！　　アルバイト！　　要するに、仕事だよ」

「そうか、仕事か。じゃあ、この摩耶さまが、提督の護衛をしてやるよ！」

「誰も襲つてこないから護衛なんていらナイよ」

「つまんねーの」

摩耶は不服そうに天井を見上げた。

「ところで、摩耶。今から服を着るから、向こうを見ていてくれないか？」

「あ？　　男なら堂々と服を着ればいいじゃないか。この摩耶さまが見てあげるか

ら？」

摩耶はニヤニヤしながら答えた。

「お前つて、ホント、女らしさの欠片もないんだな」

「なんか言つたか？」

「なんでもない。とにかく、ちよつとの間だけ、あっち向いていてくれよ」

「ああ、分かつたよ」

摩耶が玄関に顔を向けたのを確認した碧輝は、急いでクローゼットから衣服を取り出すと身につけ始めた。そのときだった。ガタンと玄関のドアが閉まる音が聞こえた。碧輝は反射的に玄関に顔を向けた。いつのまにか、室内から摩耶の姿が消えてい

た。

「あいつ、外に出たのか。これで、うるさい奴がいなくなったな」

碧輝は摩耶が去っていったことに安堵した。しかし、数秒後、衣服を身につけている碧輝の動きが止まった。

「待てよ？　あいつ、両腕に実弾入りの連装砲を装着していたよな。もし、街中で連

装砲をぶつ放したら。」

碧輝は慌てて衣服を身につけ終えると、玄関ドアを勢いよく押し開けてアパートの通路に飛び出した。5階通路から眼下の駐車場を見渡したけれど、摩耶の姿はどこにもない。

「摩耶が連装砲をぶつ放す前に見つけないと！」

碧輝は5階通路を階段に向かって走り始めた。

(つづく)

第5話 消えた摩耶さま

「摩耶が、この世界の人間と接触する前に見つけ出して連れ帰らないと……」

碧輝が服を着替えている間に部屋から出て行ってしまった摩耶。『艦隊これくしょん』というゲームの世界から突然あらわれた摩耶は、実弾発射可能な連装砲を装着したまま、令和の日本という世界に飛び出してしまったのだ。早く見つけ出さないと、とても面倒なことになりかねない！

碧輝はマンションの5階通路をエレベーターに向かって走った。エレベーターのドアに到着するなり、すぐにエレベーターの白いドアで閉ざされたカゴが5階で止まっていることを確認した。

摩耶はエレベーターを使っていない。だとすると、階段を使ったか？

碧輝はエレベーターから離れると上下に延びる階段までやってきた。しかし、人気（ひとけ）がない。碧輝は階段の上下ふたつの方向に首を伸ばすようにしながら人の気配を探ってみた。しかし、足音さえ聞こえなかった。

「摩耶の奴、いったいどこへ消えたんだ！」

碧輝は、そう呟いてみたものの、冷静に考えてみれば慌てることでもない、と思

に至った。

考えてみれば、勝手にゲームの世界から現れて勝手に飛び出して行った摩耶を心配する必要なんてないじゃないか。もともと俺とは何の関係もないのだから。それに、もしかしたら、ゲームの世界にまた戻っていったのかもしれないし。

碧輝は、摩耶を探すのをやめた。むしろ、これで良かったのだ。そもそも、ゲームの世界から艦娘が現れるわけがない。もしかしたら、俺は夢を見ていたのかもしれない。

碧輝は、自分にそう言い聞かせるようにしながら5階通路を自分の部屋に向かつて戻り始めた。やがて、自分の部屋に戻るとすぐにドアを閉めて鍵をかけた。そして、すぐに狭いワンルームに視線を注ぐ。誰もいない。

「そうだよな。艦娘がいるわけがないよな。俺は寝ぼけていたんだ」

碧輝が安堵した瞬間、いつもの平凡な日常が戻ってきた。摩耶は、いない。そう思いながら靴を脱いだときだった。玄関に、明らかに自分のものではない何か落ちてくることに気がついた。緑色の丸いものだ。赤いリボンのようなものが付いている。碧輝は、それを拾いあげた。それは手のひらサイズの小さな帽子だった。

「これ、どこかで見たことがある。」

碧輝は、すぐにそれが何か分かった。同時に、戻ってきたはずの日常が瞬く間

に遠のいていくのを感じた。

碧輝が拾いあげたものは、摩耶が身につけていた帽子だった。碧輝は重くなつた気持ちを吐き出すかのようにため息をついた。次の瞬間、碧輝は胸騒ぎがした。

ドンドン！

誰かがドアを外から叩く音が、碧輝を驚かせた。反射的にドアに顔を向けた碧輝は、不安そうにドアを凝視した。

「提督——！ 開けてくれよ——！」

それは摩耶の声だった。摩耶の声を耳にした碧輝は、摩耶が現れたのは夢じゃなかったのだ、と異常な現実を突きつけられた気持ちになつた。

「おーい、提督——！ いるんだろう？ 開けてくれよ——！」

ドアの外から摩耶の声がドアを叩く音に混じつて聞こえてくる。碧輝は思わず息を止めた。物音を立てずに居留守を使うことにした。

「提督——！ ドアを開けてくれないならさー、摩耶さまの連装砲で吹き飛ばすぞ——！」

その摩耶の言葉を耳にした碧輝は、すぐにドアに手を伸ばしてロックを解除した。摩耶は、つい先程、室内で連装砲を発射して窓ガラスを割っている。さらに、ドアまで破壊されたらマンシヨンの管理会社への弁明がややこしくなる。

た。
碧輝はドアを開けた。すると、そこには明るい笑顔をたたえた摩耶が立っ

「よっ！ 提督！ 戻ってきたぜ！」

碧輝は目の前が真っ暗になっていくのを感じた。

(つづく)

第6話 随伴艦、摩耶さま

摩耶が部屋に戻ってきた。碧輝は、面倒なことが続きそうだとため息をついた。

「提督、どうしたんだ？　ため息なんかついてさー。あたしが急に消えたから心配したかー？」

摩耶は、うつむいている碧輝を見ながら愉快そうに笑った。摩耶の笑い声に反応した碧輝が顔を上げた。

「心配なんかしてねーよ！　てか、いきなり外に飛び出して、こっちの世界の人間に

見られたらどうするんだよ？」

「見られるくらいならいいんじゃないか？　減るもんでもないしさー！」

事の重要性が分かかっていないのか、笑顔のまま答える摩耶。そんな摩耶に、碧輝は一瞬言葉を失った。

「なんだ、提督。もしかして、嫉妬してるのか？」

「嫉妬？」

「そうさ。提督は、あたしが、こっちの世界の男たちに見られたくないんだろ？」

摩耶がニヤニヤしながら碧輝の鼻先まで顔を近づけた。碧輝は驚いて目を丸く

した。碧輝は摩耶から顔をそむけると、そのまま彼女に背を向けた。

「摩耶、ここはお前がいるべき世界じゃないんだ。今すぐ帰りなよ」

碧輝は摩耶に背中を向けたまま自分が望むことを伝えた。すると、碧輝と摩耶だけしかいない狭いワンルームに沈黙が訪れた。摩耶の反応が気になった碧輝は、振り向いて摩耶を見つめた。摩耶は玄関に落ちていた自分の帽子を栗色の頭にのせていた。そんな摩耶に、碧輝は呆れて言葉を失った。摩耶は、左手で小さな丸い帽子を押さえながら碧輝を見つめた。

「なあ、提督。さっきも言ったけどさ、帰るにも帰り道が分からないんだよ。それにさ
」

「それに？」

「ああ、なんでもない。とりあえず、この摩耶さまが提督の護衛をしてやるからさ。安心しなよ」

摩耶の言葉を耳にした碧輝は彼女に少しばかりの疑念を抱いた。

摩耶の奴、何か隠してるな。だけど、摩耶自身が帰り方を知らないのならどうしようもない。摩耶がゲームの世界に戻る方法を見つけるまで部屋にかくまうしかないか。

バイトの時間が迫っている碧輝は、とりあえず摩耶を部屋に置いておくことに決

めた。

「仕方ない。ゲームの世界に戻る方法が分かるまで部屋にいればいいよ」

碧輝は低い声で呟くように摩耶に伝えた。さらに言葉が続ける。

「ただし！ 絶対に部屋から出るなよ！ これだけは守ってもらおう！」

「はあ？ こんな狭い部屋に摩耶さまを閉じ込めようつてのかわ？」

摩耶は本当に分かりやすい。すぐに摩耶の表情が険しくなった。

「仕方ないだろ。摩耶は、こっちの世界の人間じゃないんだぜ？ そんな連装砲を

身につけた女の子が街を歩いていたら目立つどころか、すぐに警察に捕まるよ」

「なんだ、そんなことか。大丈夫だぜ、提督。この摩耶さまの連装砲があれば警察が束になってかかってきても吹き飛ばしてやるからさー！」

摩耶は、連装砲を得意げに掲げながらケラケラと笑った。そんな摩耶を見つめながら碧輝は呆れてため息をついた。

「とにかく、俺は今からバイトに行かないといけないんだ。せめて、バイトに行っている間だけでも留守番していてくれよ」

摩耶は黙りこんだ。無言のまま碧輝の顔をじつと見つめている。

「なんだよ、急に黙り込んで。言いたいことがあるなら。」

「なあ、提督。やっぱり、提督とはいえ、留守番の命令には従えないな。ここは、やつ

ぱり、摩耶さまが提督の随伴艦として一緒に出撃するぜ」

摩耶が碧輝の言葉を遮って真顔で答えた。摩耶の意図がさっぱり分からない碧輝は首を傾げた。同時に、もうどうでもよくなってきた。

「分かったよ。勝手に随伴艦してればいいさ。だけど、バイトの邪魔だけはするなよ」

「おう、任せとけ！ 逆に提督の任務を邪魔する奴らは、この摩耶さまがぶっころしてやるぜ！」

碧輝は、これはひと波乱ありそうだとため息をつきながら摩耶を見つめた。摩耶は屈託のない笑顔で碧輝にウインクして見せた。

碧輝はバイトに出る準備を始めた。

(つづく)

第7話 エアガンで武装する摩耶さま

碧輝は丁寧に折りたたんである上下のカラフルな制服を、手元に用意した黒いリュックに押し込んだ。その様子を黙って見つめていた摩耶が口を開いた。

「派手な服を持っていくんだな」

碧輝は、摩耶の好奇心に満ちた言葉に反応することなく、左手首に腕時計をはめた。すぐに、腕時計のデジタル数字を確認した。

「今から出れば、バイトに間に合うな。」

碧輝は、そう呟くと、摩耶が装着している連装砲に視線を向けた。

「摩耶、せめて連装砲くらい外して、ここに置いておきなよ」

「はあ？　連装砲を外して3連装機銃だけで戦えつて言うのか？」

「いやいや、連装砲だけじゃなく機銃も外せよ」

碧輝の言葉に、摩耶は呆れたような表情で碧輝を見つめた。

「なあ、提督。いくら摩耶さまが強いと言っても、素手じゃあ、ちよつと厳しいな」

碧輝は、やれやれ、といった感じで天井を見上げたあと、再び摩耶に顔を向けた。

「あのな、摩耶。これから俺が話すことをよく理解するんだぞ」

摩耶は碧輝を見つめながら少し首を傾げた。

「こつちの日本には、深海棲艦は存在しない。そして、摩耶。お前も本当なら存在していないんだ」

碧輝は摩耶の目を見据えながら、言い聞かせるようにゆつくりと話した。摩耶は黙ったまま碧輝をしばらく見つめていたが、彼の目から視線を逸らした。

「分かったか？　摩耶」

碧輝は摩耶を見据えたまま念を押した。摩耶は碧輝と目を合わさないようにしながら、窓ガラスに映る景色を見つめている。

摩耶の奴、いったい何を考えてるんだ？

碧輝は、本当に面倒な問題を背負い込んだ、と思いつながらため息をついた。すると、摩耶が碧輝に顔を向けた。

「分かったよ。連装砲も機銃も外すよ。その代わり」

「その代わり？」

「何でもいいから武器を貸してくれよ」

「はあ？」

碧輝は呆れて声をあげた。そんな碧輝を摩耶は真顔のまま見つめている。

「提督も武器のひとつくらい持つてんだろー？」

「持つてるわけないだろ！」

「持つてない、だ？ それじゃあ、敵とどうやって戦うんだ？」

「摩耶の世界と違って、こつちには敵なんていないんだよ」

「でもさ、もし深海棲艦が」

摩耶は、そこまで話すと言葉を切った。碧輝は訝しげな表情で摩耶を見つめた。

「深海棲艦が、どうしたんだ？」

碧輝の視線を真正面から受けた摩耶は、目を逸らした。

「な、何でもないさ」

明らかに摩耶は動揺している。碧輝は摩耶の心を見透かそうとするように無言のまま彼女を見つめ続けた。

「とにかく、だ！ 何でもいいから武器になるようなものを貸してくれよ！」

突然、摩耶が大きな声をあげた。碧輝は、摩耶を不思議そうに見つめたあと、頭を左右に振った。

「分かったよ。ちよつと待つてろよ」

碧輝は、仕方ない、と言わんばかりの表情をしながらベッドに体を向けた。そして、ベッドの脇から何かを取り出すと、無言のまま摩耶にそれを手渡した。

「おーっ！ やっぱり提督も武器を持つてるじゃないかよー！ この拳銃なら無いよりマシだなー」

黒光りする拳銃を手に喜びの声をあげる摩耶。そんな摩耶を見ながら、碧輝は二ヤリとした。

「摩耶、その拳銃は本物じゃない。玩具だよ」

摩耶の表情から笑みが消えた。

「冗談言うなよ。どう見ても拳銃だろ、これー！」

「それはエアガンと言って、ガスの圧力でプラスチックの弾を発射するんだ」

「えあがん？ 聞いたことがない武器だな。だけどさー、提督。武器なら敵を倒せるんだろ？」

摩耶からの問いかけに碧輝は可笑しくなつて笑い声をあげた。

「そんな威力はないよ。ちよつと痛いくらいだな」

摩耶は碧輝の説明を耳にしながら、右手で持っている黒光りするエアガンを不思議そうに見つめたのだった。

(つづく)

第8話 摩耶さまと一緒に抜錨す！

碧輝は、バイトへ行く準備を終えた。摩耶も、自分の身体から連装砲や機銃を取り外すと、無造作に碧輝のベッドに置いた。

「なあ、提督ー！　あたしの電探も外した方がいいかー？」

摩耶からの問いかけを受けた碧輝は、彼女の頭に装着されているアンテナのようになかチューシャを見つめた。

「電探は必要ないよ」

碧輝は素つ気なく答えると、摩耶の頭から視線を外した。すぐに、摩耶は力チューシャを外した。

「よーし、準備できたぜ、提督ー！」

摩耶が明るい声をあげた。碧輝は、ふと思うことがあつて摩耶に顔を向けた。

「摩耶、その提督って呼び方はやめてくれないか？」

「えー？　だって、お前は提督だろー？」

訝しそうに碧輝を見つめる摩耶。碧輝は口元を少し歪めながら天井を見上げた。

「確かにゲームの中では提督だけどき。こっちの世界では提督じゃないんだよ」

「じゃあ、なんて呼べばいいんだよ?」

「俺の名前は近衛碧輝だから、近衛さんか、碧輝さんか、呼び方は任せるよ」

「このえあおき? なんか、めんどくせーなー!」

「人の名前を面倒くさそうに言うなよ!」

「オーケー、分かったぜー。じゃあ、碧輝って呼ぶな」

「思いつき呼び捨てじゃないかよ」

「碧輝だって、あたしのこと、摩耶って呼び捨てにしてるじゃねーかよ!」

摩耶が言っていることは間違いない。碧輝は、こちらをじつと見つめてくる摩耶の顔を見つめた。しかし、すぐに顔を逸らした。

「はいはい。どう呼ぶかは摩耶に任せるよ」

碧輝は、クルリと摩耶に背を向けると、制服が入って膨らんでいるリュックを肩に担いだ。

「それじゃあ、行こうか」

「おう! 行くぜ! 抜錨だ!」

碧輝の背後で威勢の良い声をあげる摩耶。摩耶の言葉を耳にしながら、よく聞いたセリフだな、と碧輝は思った。

マンションの駐車場までやって来た碧輝と摩耶。碧輝は黒いプリウスのドアロックを解除すると、助手席に乗るように、と摩耶を促した。しかし、摩耶は黒いプリウスを見つめたまま動かない。

「摩耶、早く助手席に乗りなよ」

「なんか、おかしな形をした潜水艦だなー」

「これのどこが潜水艦なんだよ。クルマだよ、クルマー」

「そんなの分かってるよ。ちよつと言ってみただけさ」

摩耶は、そう答えると悪戯っぽい笑みを碧輝に向けた。やれやれ、と碧輝は思いながら黙り込んだ。

摩耶が助手席側に移動したのを確認した碧輝は、ドアを開けて運転席に座り込んだ。その後、摩耶も助手席に座った。シートベルトを装着した碧輝は、助手席に顔を向けた。そのとき、真っ先に摩耶のミニスカートから伸びる健康的な両脚が目に入った。碧輝は思わず、ドキツとしてすぐに視線を摩耶の脚から外した。

「どうしたんだ？ 碧輝」

摩耶が不思議そうな表情を浮かべながら碧輝の横顔を見つめた。

「な、なんでもない。摩耶、シートベルトを忘れずにな」

「しーとべると? ああ、この座席についているベルトのことか。これを腰に巻け

ばいいのか?」

「違うよ。これをこうして、ここに。」

碧輝は、助手席のシートベルトを掴むと摩耶の身体に装着させようとした。そのとき、摩耶が着ているノースリーブの制服から見える彼女の胸の谷間に視線が釘付けになってしまった。

摩耶の胸つて近くで見ると大きいんだな。

「おい、碧輝。どこ見てんだ?」

摩耶が目を細めながら碧輝の顔を見つめた。碧輝は慌てながら摩耶へのシートベルト装着作業を終わらせた。

「よ、よし、抜錨だ!」

碧輝は、そう言いながらエンジンスタートボタンを人差し指で押した。

真正面を見てクルマを発進させる碧輝。そんな碧輝の横顔を見つめながら、摩耶は微かな笑みを浮かべたのだった。

(つづく)

第9話 摩耶さま、ショッピングモールへ行く!

愛車である黒いプリウスでバイトに向かう碧輝。助手席には摩耶が座っている。ゲームの世界から現れた摩耶は、こちらの世界がよほど珍しいらしく、常に前後左右に顔を向けては嬉しそうにはしゃいでいる。

まるで子どもだな。

碧輝は助手席の摩耶を一瞥しながら思った。

それにしても、助手席に女の子を乗せるなんて1年ぶりだな。ゲームの世界から現れた摩耶が本当の人間だ、という確証はないけど。

碧輝が運転するクルマはバイパスに入ると、片道2車線の車道を加速していく。

「あははー!　もつと走れー!　どんどん抜かせー!」

あいかわらず車窓から外を眺めながら独りはしゃぐ摩耶。そのとき、碧輝たちが乗るクルマは、赤信号で停止した。

「碧輝、どうして止まるんだよ?」

信号というものや交通ルールを知らないのか、摩耶が訊ねてきた。

「赤信号だから」

碧輝は赤信号を見つめながら素っ気なく答えた。その直後、一抹の不安を覚えた碧輝は摩耶に顔を向けた。

「摩耶、ゲームの世界では、どんな生活をしていたんだ?」

摩耶は運転席の碧輝をじっと見つめると、首を傾げた。

「あたしたち艦娘には、生活なんてないよ」

摩耶はサラリと答えた。

「生活がないって、どういうこと?」

「あたしたちの世界は舞台みたいなものなんだ。出番がなくなれば、記憶をリセットされて舞台裏に引っ込むだけさ」

摩耶の返答に碧輝は驚きを隠さなかった。

「それがゲームの世界なのか!」

そのとき、碧輝の脳裏に、轟沈させてしまった愛しの金剛、が現れた。

「じゃあさ、轟沈した艦娘は、どうなっちゃうんだ?」

碧輝からの質問を耳にした摩耶は、無言のまま碧輝の顔に自分の顔を近づけると、じっと見つめた。その無言の圧力に碧輝は動揺した。

「金剛のことだろ?」

碧輝は無言のまま頷いた。

「大丈夫だよ、轟沈した金剛は死んじやあいない。セツトされて、後ろへ引つ込むだけさ。」

摩耶は、そこまで説明すると、険しい表情で碧輝の鼻を右手で強くつまんだ。

「解体された艦娘も同じさー！」

摩耶は語気を強めて言い放つと、両腕を組んでフロントガラスからの景色を見つめた。目の前の信号は青になり、前方で停止していたクルマが発進して離れていく。

「解体したはずの摩耶はどうして。」

碧輝がそこまで話したとき、後方からクラクションが聞こえた。信号が青に変わったことに気づいた碧輝は、アクセルを踏んだ。

クルマがバイパスを走る車列の流れに乗ると、碧輝は摩耶を一瞥した。摩耶は黙り込んで不機嫌そうに真正面を見つめている。

摩耶の奴、俺が摩耶を解体したことをまだ根に持っているんだな。でも、どうして俺が解体した摩耶は、記憶をリセットされずにゲームの世界から出てきたんだ？

碧輝は運転しながら同じ疑問を何度も考えた。しかし、いつも通り『艦これ』で遊んでいた碧輝には、摩耶がゲームの世界から現れた原因を見つけることはできなかった。

やがて、2人が乗る黒いプリウスは、商業施設の広々とした駐車場に入った。

「うへえー！ 広い場所だな、ここー！ もしかしてあの建物は造船所かー？」

もう機嫌が直ったのか、摩耶が好奇心で目を輝かせながら明るい声をあげた。

「違う。ここは百貨店と言えれば分かりやすいかな。要するに、買い物したり食事するところだよ」

碧輝はエンジンスタートボタンを押してエンジンを停止させながら答えた。

「そっかあ！ 楽しそうじゃん！ 早く行こうぜ！」

嬉しそうな声をあげてクルマを降りようとする摩耶だったが、シートベルトのせいで身動きができなかった。

「おい、碧輝。これ、外してくれよ」

やれやれ、と思いつつながら碧輝は助手席のシートベルトから摩耶を解放した。今度は、摩耶の胸元を見ないよう心がけた。

その後、2人は商業施設の建物に向かって歩き始めたのだった。

(つづく)

第10話

妹にされた摩耶さま

「すつげえ、人だなー！」

シヨツピングモール入口の自動ドアから入るなり、摩耶は驚きの声をあげた。

今日は土曜日。都会で暮らす碧輝から見ても、今日の来店客は多いと感じる。ただ、碧輝から見たら、それはとくに珍しいことではない。

エントランスホールからはブティックやファッションショーシヨツプなど、幾つもの専門店が見える。広々とした通路には多くの人が行き交い、土曜日のシヨツピングモールらしく、家族連れやカップルたちが楽しそうにウインドシヨツピングをしている。そんな光景は摩耶にとって初めてなのだろう、彼女は目を輝かせるようにしながら店内を見渡している。

「摩耶、行くぞー！」

碧輝は、そう言いながら摩耶の右腕を掴んだ。突然、右腕を掴まれた摩耶は、驚いて碧輝を見つめた。

「な、何だよー！」

「摩耶、今日は買い物をしに来たんじゃない。俺を護衛するなら、ちゃんとついて来なよ」

碧輝の言葉に、摩耶は納得したように何度か小さく頷いた。

「お、おう、分かってるぜ。だけどき、その手、ウザいんだけど」

摩耶は碧輝に掴まれている自分の右腕に視線を落とした。

「もしはぐれたら、摩耶を探し出すのが大変になる！ バイト先まで我慢しなよ」

「しよーがねーなー！ ところで、碧輝の仕事は何なんだ？」

「一緒に行けば分かる！ 時間がないから急ぐぞ！」

碧輝は、そう答えると、摩耶の腕を引っ張りながら人々の流れに合わせて移動を始めた。

エントランスから1分ほど歩くと、フードコートが見えてきた。フードコートの一角にハンバーガーショップがある。碧輝は立ち止まると、ハンバーガーショップを指差した。

「あのハンバーガーショップが、俺のバイト先だ」

「はんばーがー？ あのパン屋みたいなやつか！」

摩耶は、意外だ、と言わんばかりの表情で、ハンバーガーショップと碧輝の顔を交互に見つめた。

「お前、提督だろ？」

なんで、提督がパン屋で仕事するんだよ？

もしかして、

補給艦の艦長なのか？」

碧輝は、摩耶からの、あまりにも時代錯誤的な質問に答えるのが面倒くさくなつて、何も答えなかった。

碧輝は無言で摩耶の腕を引つ張りながら、ハンバーガーショップのすぐ近くにあるバックヤードの出入口ドアをくぐり抜けた。バックヤードの通路に入ると、さらに、すぐ右側にあるドアを開いた。

「お疲れ様です」

碧輝はバックヤード側からハンバーガーショップのスタッフルームに入った。

スタッフルームにはデスクやテーブルがあり、テーブル周辺には数脚のイスが並んでいる。

デスクには、赤と黄色のカラフルな制服を着た女性が背中を丸めるようにしながらノートに何やら記入していた。

「店長、おはようございます！」

碧輝がデスクの女性に声をかけると、店長と呼ばれたボブヘアの女性が振り返った。

「おはよう、近衛君。あれ？」

その人は誰？」

ハンバーガーショップの女性店長である湯本香織里は、碧輝を一瞥したあと、その隣で黙ったまま突っ立っている摩耶を見つめた。

「えっと、詳しいことは後から話しますが、俺の妹です」

碧輝が女性店長・湯本にそう答えると、摩耶が「は？」と驚きの声をあげながら碧輝を見つめた。

「近衛君、妹さんがいたんだね。でも、どうして妹さんをここに連れてきたの？」

「今日だけ、俺のバイト中、妹をスタッフルームに置いてほしいんです」

「うーん、まあ、別にかまわないけど。」

湯本は、そう答えながら摩耶を見つめた。

「でも、今日の近衛君の勤務は夕方5時までの6時間ですよ。6時間もスタッフルームで待つより、フードコートにいる方が退屈しないんじゃない？」

「えっと、それは。」

「いいぜ！　碧輝の仕事が終わるまで、店のテーブル席で待つてるよ！」

碧輝が、店長からの提案を受け入れるか迷っていると、摩耶が横やりを入れた。

「わ、分かりました。摩耶を、妹をフードコートのテーブル席に座らせておきます」

何だか嫌な予感がした碧輝だったけれど、店長の提案に従うことに決めたのだつた。

(〽 〽 〽)

第11話 摩耶さま、客になる

スタツフルームの更衣室のカーテンが、シャツと音をたてて勢いよく開いた。そこには、赤と黄色のカラフルな制服に身をまとった碧輝が立っていた。

「提督！ 何だよ、その格好！ まるで道化師じゃねーか！ 笑えるぜー！」

更衣室で着替えを終えた碧輝の姿を目にした摩耶が、店内に響き渡るような高らかな声で笑った。ハンバーガーショップの店員に変身した碧輝は、更衣室の前で笑い声をあげている摩耶に素早く近づいた。

「摩耶、ここで、提督、だなんて言うな！」

碧輝は、摩耶の耳元で語気を強めながら囁いた。その直後、デスクに座ってこちらを不思議そうに見つめている湯本店長と目が合った。

「え、なに？ 近衛君は、提督って呼ばれているの？」

「あ、いえ、何でもありません」

湯本店長からの質問を、碧輝は作り笑いを浮かべながら適当な返事で流した。

「それじゃあ、妹をフードコートに座らせてから、レジに入りますので……」

碧輝は、そう言うのと摩耶の右腕を引っ張りながらスタッフルームを離れた。

「はーい！　釣り銭の間違いだけは気をつけてね！」

湯本店長は碧輝の背中に声をかけたが、摩耶のことで精一杯な彼の耳には届いていなかった。

「摩耶、ここにずっと座ってるんだぞ。誰にも話しかけてもいけないからな」

フードコートの一部にあるハンバーガーショップ『バーガーシップ』。店内は接客カウンターの、厨房、スタッフルームに分かれており、テーブル席はフードコート共用となっている。

接客カウンターの正面にあるテーブル席に摩耶を座らせた碧輝は、何度も彼女に「絶対に動くな」と念を押した。

「はいはい、分かってるよ」

ちゃんと分かっているのか、不安になった碧輝だけど、そろそろレジ担当を交代する時間だ。碧輝は、接客カウンター内へ戻った。

「近衛さん、カノジョさん可愛いですね！」

接客カウンターでレジを担当していたバイト仲間の女性が笑顔で声をかけてきた。

「カノジョじゃないよ。ただの妹だよ」

「へえー、妹なんだ！　でも、全然似てないね！」

「由良子ちゃん、もう時間だよ。お疲れ様！」

碧輝は、強引に話を切り上げてレジ担当を交代した。

「じゃあ、近衛君、お先ー！」

バイト仲間である大学生の春日由良子は、明るい笑顔で碧輝に手を振りながらスタツフルームへと去っていった。その直後、碧輝は真正面のテーブル席に座っている摩耶に視線を向けた。すぐに、摩耶と目が合った。気のせいか、摩耶に睨まれているような気がした。

今日は土曜日で忙しいっていうのに、摩耶がいたら気になって集中できないよ

数分後、家族連れが列をなして『バーガーシツプ』の接客カウンターへやって来た。碧輝は慣れた感じで客からの注文をレジに打ち込み、スムーズに金銭の受け渡しを行い、ハンバーガーの手渡しを明るい笑顔でこなしていった。

「次のお客さま、どうぞー」

碧輝は、ハンバーガーが入った紙袋を手にした客を見送ったあと、列の最前列で待っていた女性に顔を向けた。次の瞬間、碧輝の表情が固まった。

「よっ！　　碧輝！」

列の最前列で待っていたのは、微笑みをたたえた摩耶だった。

「なんで、摩耶が並んでるんだよ！」

碧輝は、摩耶に少しばかり顔を近づけながら小声で訊ねた。

「お腹が空いちまってなー。ここ、パン屋だろ？　　何か食べさせてくれよ」

摩耶は露出したお腹を両手でさすりながら答えた。碧輝は、摩耶がお金を持っているはずがない、と思うと同時に、お腹が空くということとは身体は人間と同じか、と納得した。

「分かったよ。俺がおごってやるから、好きなハンバーガーを選びなよ」

碧輝はそう言うと、カウンターに張りついていてるメニューを指差した。

「へえー！　　どれも美味しそうじゃん！　　どれでもいいのか？」

「好きなもの選べよ。後ろでお客さんが待ってるから早くしなよ」

碧輝は、笑顔でメニューに見入っている摩耶に小声で伝えたのだった。

(つづく)

第12話 摩耶さま、取り囲まれる！

摩耶が接客カウンターのメニューに張りつくようにしてハンバーガーを選んでみると、店の奥から男性社員・青山が出てきた。

「近衛君、店長が呼んでるよ。レジを代わるからスタッフルームへ行ってきて」

「え、今ですか？」

「なんか、話があるみたいだから急いで」

突然の青山からの指示に、碧輝は、機嫌よさそうにメニューに見入ってブツブツ言っている摩耶を一瞥したあと、青山の耳元に顔を近づけた。

「いまカウンターにいる女の子、俺の妹なんです。お金は俺が払うから、何でも好きなものを選ばせてあげてください」

「うん、分かったよ」

青山は碧輝に笑顔で答えた。それを確認した碧輝は、摩耶に顔を近づけた。

「摩耶、食べたいものが決まったら、ここにいるお兄さんに注文するんだぞ。俺は、ちよっと離れるから」

「オツケー、行つてらー」

摩耶はメニューに顔を向けたまま、明るい声で答えた。碧輝は不安そうな表情を青山に向けて頷くと、スタッフルームへ向かった。

「店長、お呼びですかー？」

碧輝はスタッフルームに入るなり、デスクで事務作業をしている湯本店長に声をかけた。

「あ、ごめんね、近衛君。もうランチタイムのラッシュは落ち着いたよね？」

「ええ、まあ」

「じゃあ、そこへ座つて」

碧輝は、湯本店長が差し出した椅子に座った。

「突然だけど、今から仕事に関する面談を行うわね！」

「え！」

碧輝は、こんなときに限つて、と思ひながら湯本店長を苦々しい表情で見つめた。

「近衛君、顔色が悪いわよ。大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です。」

こうして、湯本店長による碧輝の職場面談が始まったのだった。

職場面談は、15分ほどで終了した。

面談を終えた碧輝は、急いで接客カウンターへ向かった。

何か、嫌な予感がする。

碧輝の悪い予感的中していた。

フードコートの摩耶が座っているテーブル席に、人だかりができていた。碧輝は、レジにいる青山に顔を向けた。青山は、碧輝と目が合うと苦笑いした。それを見た碧輝は、人だかりができている摩耶が座るテーブル席に向かって駆け寄った。

「あー！ 摩耶！」

碧輝は、驚いて言葉を失った。

摩耶は両手にハンバーガーを持って、左右交互に食らいついている。そして、テーブルには数十個というハンバーガーの山ができており、さらにフライドポテトが散乱している。そんな摩耶を、フードコートの客たちが好奇の目で見ながら取り囲んでいた。中には、摩耶をスマホで撮影している者もいる。

碧輝は急いで摩耶に近づくと、彼女の左手を掴んだ。

「摩耶、ちよつとこっちに来るんだ」

「あ、碧輝。ハンバーガーって美味しいなー！」

摩耶さまは、このハンバーガーを気に

「入ったぜー！」

上機嫌に答える摩耶。そんな摩耶を、碧輝はテーブル席から引き離れた。

「お、おい。碧輝、何すんだよ。あたしは食事中だぞ。」

そんな摩耶の言葉を無視して、碧輝は彼女を引つ張つて歩き続けた。フードコートに客たちが、何事か、と2人を凝視している。

摩耶の両手には食べかけのハンバーガーが握られていたが、あまりにも碧輝が強く腕を引つ張るので、ハンバーガーの中身が抜け落ちてしまっていた。

碧輝は、摩耶を、従業員用通路であるバックヤードに連れ込んだ。これで碧輝は摩耶と2人だけになった。

「摩耶、どういうつもりだよー！」

「何が？」

「どうしてテーブルの上にハンバーガーの山ができてるんだよー！」

「ああ、あれか。全部、この摩耶さまが頂くのさー！」

摩耶は笑顔で答えた。碧輝は、そんなことを知りたいんじゃない、と言わんばかりにため息をついた。

「あのさ、摩耶。いくらなんでもハンバーガーを買いすぎだろ！」

あれだけのハン

バーガーを女の子が食べていたら周りに目立つじゃないか！」

「そんなこと言っただけでさー、好きなだけハンバーガーを選べ、と言っただのは碧輝だろ？」

「確かにそうだけど、限度つてもものがあるだろ！ いい加減にしろー！」

碧輝は語気を強めて言った。すると、摩耶の表情が瞬く間に険しくなった。摩耶は碧輝を睨みつけた。

摩耶が怒っている！

摩耶の顔が怒りで紅潮している。初めて摩耶の怒りに触れた碧輝は、驚きと恐怖で全身を硬直させたのだった。

(つづく)

第13話 摩耶さま、胸ぐらをつかむ

怒りで顔を紅潮させた摩耶は、背伸びをするように碧輝の鼻先に顔を近づけた。

「なあ、提督。お前、ゲームの世界とやらであたしにしたことを忘れていないよな？」

「あ、ああ」

碧輝は、初めて見る摩耶の怒りの迫力に思わず後ずさりした。さらに、摩耶は詰め寄ってくる。

「敵である深海棲艦、装甲空母姫との激戦で金剛は沈んで、他の艦娘たちもみんな大破して疲れきっていたのは覚えてるよな？」

摩耶の言葉に、碧輝は後ろめたさを感じながら唾を呑み込んだ。さらに、摩耶の言葉は続く。

「そのあと、お前は、あたしに何をした？　　ああ？」

摩耶は怒鳴っていた。摩耶の怒鳴り声がバックヤードの通路に響き渡る。碧輝は、シヨップینگモールの従業員に摩耶の怒鳴り声が聞こえていないか気になった。

「おい、てめえ！　　人の話を聞いてんのか！」

摩耶は、自分より背が高い碧輝の胸ぐらを掴んだ。碧輝は動揺して目をパチパチとさせながら摩耶の紅潮した顔に視線を向けた。しかし、摩耶と目が合うとすぐに逸らした。

「あのとき、そうだ、あのとき、金剛が沈んで撤退したあと摩耶を入渠させて、気がついたら、摩耶を。」

「そうよ、あたしを解体したんだよな。入渠させてすぐ高速修復剤を使ってくれたと思つて喜んでいたら、飯も食わせることなく解体したんだぜ？」

摩耶は、そこまで話すと怒りが収まってきたのか、いくらか冷静さを取り戻した。摩耶の不満を耳にした碧輝は、感情的になつて摩耶を解体したことに対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。碧輝は、摩耶を見つめた。

「摩耶、ごめん。」

摩耶は、碧輝が反省している様子を見ると、深呼吸してからバックヤードの天井を見つめた。

「あたしは、カスガダマ島への出撃以来、なーんにも食べてないんだよ。だからお腹が空いちやつてさー」

摩耶は、碧輝に不満をぶつけてスッキリしたのか、いつもの明るい口調に戻っていた。

「そ、そうだったのか。」

碧輝は、バックヤードの通路を見渡している摩耶を見つめた。

俺、摩耶のことより、自分のことしか考えていなかったな。いきなりゲームの世界から現れたから動揺していたけど、摩耶は、俺たちと同じ人の心を持つてるんだな。

碧輝は、自分の不甲斐なさを感じてうつむいた。そんな碧輝を、摩耶は不思議そうに見つめた。

「碧輝、どうしたんだ？ お腹でも痛いのか？」

「違うよ」

「急に黙りこくって、うつむいちやうから心配するじゃねーか」

碧輝は、摩耶に顔を向けると、微かな笑みを浮かべて見せた。

「摩耶って、怒ると怖いんだな」

「そっかー？ 長門の怒りのほうが怖いけどな」

「そのあたりは知らないけど」

その言葉に、摩耶は屈託の無い笑顔を見せた。

摩耶は笑うとすぐ可愛いんだけどな、と碧輝は思いながら摩耶に笑顔を見せた。

「ところで摩耶、ハンバーガーをいくつ買ったんだ？」

「いくつだろ？」 数えていねーけど、30個くらいじゃねーか？」

「さ、30個！」

ハンバーガーの数に驚いた碧輝は、頭の中で30個分のハンバーガー代金を計算した。計算を終えた碧輝は、目を閉じながら顔を天井に向けた。

「あたしら重巡洋艦は、戦艦や空母ほどじゃないけど、けっこう食べるんだぜ！」
「そうだな」

碧輝は天井に顔を向けたまま、棒読みのセリフのように答えた。

「最低でも1万5千円の出費だ。今日と明日のバイト代が全部、摩耶のハンバーガー代で消えるってことか。」

ガクリと肩を落とす碧輝を、摩耶は不思議そうに見つめた。

「なあ、碧輝。何をそんなに落ち込んでるんだ？」

「摩耶、ハンバーガー代はタダじゃないんだ。30個もハンバーガーを食べれば、俺にとっては痛い出費なんだよ」

「そうなのか？ あの兄さん、ハンバーガー代をいつもの半分以下の値段にしてあげる、て言ってたぜ」

「青山が？」

「名前は知らないけど、あたしにハンバーガーを渡した兄さんだな」

「社割でも3割引きなのに、半分以下の値段ってどういうことだ？」

「さあな。あ、でも、あの兄さんが出した条件をあたしが呑んだからじゃねーか？」

「摩耶、どんな条件を呑んだんだ？」

青山が出した条件の内容が気になった碧輝は、摩耶の顔をじつと見つめながら尋ねた。摩耶は、碧輝の顔を見ながら、意味ありげな笑みを浮かべたのだった。

(つづく)

第14話 デートに誘われた摩耶さま

「条件が気になるか？」

摩耶は笑みを浮かべながら横目で碧輝を見つめた。摩耶が浮かべた笑みに彼女らしい悪戯っぽさを感じた碧輝は、何も答えず摩耶を見つめた。

女癖が悪い青山のことだ。きつと摩耶をデートに誘ったに違いない。こんな性質が激しい摩耶とデートしてもつまんだろうに。

碧輝は、条件を気にしている、と摩耶に思われなくなかった。だけど、少し気になる。

「どんな条件なんだ？」

「この摩耶さまとデートしてくれってさ！」

「やっぱりな」

「なあ、碧輝。それなんだけどさ、デートって何だ？」

「はあ？」

碧輝は驚き呆れた。

「摩耶、デートの意味が分からないで約束したのか？」

「そんなの分かるわけないだろ。だけど、あたしが思うには、演習って意味だろ？
演習なら、この摩耶さまの強さを分からせる良い機会じゃねーか！」

摩耶の思い違いを知った碧輝は、笑い声をあげた。

「なんだよ、デートって演習じゃないのか？」

得意顔だった摩耶の表情から、笑顔が消えた。

「違うよ。デートの意味は、そうだな、例えると、男と女が2人だけで遊びに行ったり食事をするんだよ」

「なんだと！　デートって演習じゃないのか！　なんで、この摩耶さまがあん

な弱つちい男とそんなことしなきゃいけないんだ！」

碧輝は、悔しがる摩耶に顔を近づけた。

「摩耶は弱つちい男とデートする条件で、ハンバーガーを食べたんだぜ」
「うえっ！」

摩耶は左手で掴んでいた中身の無いハンバーガーを床に落とした。

「碧輝、何とかしてくれよ。あたし、あんな好みでもない男とデートなんてしたくない」
摩耶は碧輝に懇願した。碧輝は、わざとそっぽをむいた。

「無理だな。いや、むしろそうしてくれないと、俺が支払うハンバーガー代が高くなる。

摩耶、すまないけど、ここは青山とデートしてやってくれ」

碧輝の言葉に、摩耶は困惑した表情を浮かべた。

「なあ、碧輝。碧輝は、この摩耶さまが、青山という男とデートしても平気なのか？」

摩耶には珍しく、女々しい声で碧輝に尋ねた。そんな摩耶の異変に気づいた碧輝は、摩耶を見つめた。摩耶は、哀願するかのような目で碧輝を見つめている。そんな、初めて見る摩耶の表情に、碧輝は彼女から「可憐さ」を感じた。

「なあ、碧輝。平気なのか？」

「仕方ないじゃないか、約束しちゃったんだからさ」

碧輝の返答を耳にした摩耶の表情がまた変わった。今度は険しい。

「ホント、お前は冷たい男だな！ 失望したぜ！」

摩耶は、そんな言葉を吐き捨てると、フードコートへのドアに向かって歩き始めた。すぐに、碧輝は摩耶の背中を追った。

「おい、摩耶、どこへ行くんだよ！」

「決まってるだろ、ハンバーガー代を払ってくる！」

碧輝は摩耶の背中を追いながらバックヤードからフードコートに出た。

「ハンバーガー代を払うって、お金を持ってないんだろ？」

「そんなの持っていないさ」

摩耶は、そこまで答えると、背後にいる碧輝に振り返った。そして、摩耶は碧輝をじっと見据えた。

「碧輝、頼みがある！」

「なんだよ」

「あたしにお金を貸してほしい」

「お金なんか、どうするんだよ？」

「あたしが食べたハンバーガー代を払う！」

ゲームの世界から現れた摩耶にお金を貸したところで返ってくる保証はない。

碧輝は、沈黙した。

「なあ、頼むよ。これから、碧輝の随伴艦として護衛するからさー」

「意味が分かんないよ。俺の随伴艦なんてする必要ないってさつきも言ったじゃないか
！」

「この、ボンクラ提督っ！」

突然、摩耶が怒りを爆発させて怒鳴った。摩耶の怒鳴り声が土曜日のフードコートに雷鳴のように響き渡る。次の瞬間、多くの客がいるフードコートが静まり返った。大勢の視線が摩耶と碧輝に注がれる。慌てた碧輝は、摩耶の腕を取ると、再び誰もいないバックヤードに連れ込んだ。

「フードコートで、いきなり大声を出すなよ！ 注目を浴びたじやないか！」

碧輝は、バックヤードのドアを閉めるなり摩耶に顔を向けて、強くたしなめた。

「お前が分からず屋のボンクラだからだろ！」

「ボンクラだと？ 摩耶こそ、随伴艦とか、護衛とか、意味が分かんないことばかり

言うなよ！」

碧輝は語気を強めて言い放った。その直後、摩耶は碧輝が驚愕する一言を発したのだった。

(つづく)

第15話

摩耶さまが令和の日本に現れた理由

摩耶は碧輝の目を突き刺すかのように睨みつけた。そして、握りしめた右の拳を震わせながら胸元まで上げた。それを見た碧輝は、摩耶に殴られる、と思い、覚悟した。しかし、摩耶は衝撃の事実を口にする。

「深海棲艦が、こっちの世界に入り込んでるんだ！
いいか、提督！
そいつらが、お前の命を狙ってるかもしれないんだ！」

摩耶の口調は強かったが、落ち着いていた。摩耶は、話し終えたあと、うつむいて黙り込んだ。

碧輝も黙り込んだ。どう答えたら良いのか分からなかったからだ。摩耶がゲームの世界からこちらの世界に現れている以上、彼女が言うように、深海棲艦がこちらの世界に入り込んでいても不思議ではなかった。

「摩耶、それは本当なのか？」

「ああ。あたしを追いかけてきたからな」

「でも、どうして？」
摩耶は、俺がゲームの中で解体したから、こっちの世界に現れ

たはず。だけど、深海棲艦は解体してないぞ。というか、それは不可能だ」

「違うんだ。あたしが、穴を開けちまったんだ」

「穴？」

摩耶は、まだうつむいている。摩耶の胸元で握られた拳が微かに震えていた。

「摩耶、どういうことか、詳しく話してほしい」

「怒らないか？」

摩耶は罪悪感を抱いているのか、うつむいたまま碧輝に尋ねた。

「怒らない。俺は、ただ、真実を知りたいんだ」

「分かった。話す。」

摩耶は、顔を上げた。しかし、その目は伏し目がちだった。

「あたし、解体されたあと『舞台』の出口に向かってトンネルを歩いたんだ。そのとき、提督に解体されて頭にきていたからさ、やみくもにトンネルの中で砲撃したんだ。そうしたら、突然、周りが闇に包まれて。」

「それで？」

「そうしたら、はるか先に出口のような光が見えたんだ。とりあえず、行ってみようと思つて歩いていたら、後ろから何かが迫ってくることに気づいたんだ」

「それが深海棲艦だったのか？」

「ああ、そうだ。あいつら、あたしを後ろから砲撃してきたんだ。しかも、たくさんの艦載機も襲ってきた。さすがのあたしも逃げるしかなくてさ、出口まで逃げたんだ」

「その出口の先が、俺の部屋だったってわけか！」

「そう、気づいたら、狭っ苦しい碧輝の部屋にいたんだ」

「狭っ苦しい、は余計だな」

摩耶は、ようやく碧輝の顔に視線を戻した。

「碧輝、あたしを追ってきた深海棲艦たちも、きつとこつちの世界にいるはずだ。もし、あたしや碧輝を見つけたら襲ってくるはず！」

「摩耶、それは確かなのか？」

碧輝は、摩耶に問いただした。摩耶は、ノースリーブから伸びる白い上腕部の後ろ側を碧輝に見せた。

「この弾痕は、トンネルの中で深海棲艦の艦載機にやられたやつだ」

碧輝は、摩耶の上腕部に残る弾痕を、じっと見つめた。

「火傷してる。大丈夫か？」

「このくらい平気さ。だけど、普通、あたしたち艦娘は“舞台”で受けた傷は“舞台”から降りると全て消えちゃうんだ。だけど、この火傷は消えない。本物の傷なんだ」

碧輝にとって、摩耶の話は、にわかに信じ難いものだった。しかし、こうしてゲ-

ム世界の摩耶がこの世界に現れている以上、信じざるを得ない。

それに、摩耶は、この世界に現れてまもなく、突然のように部屋の外へ飛び出していた。すぐに部屋へ戻ってきたけれど、もしかしたら、あのとき摩耶は、深海棲艦が近くにいるか様子を見に行っていたのかもしれない。

「なあ、碧輝。あたしの話を信じてくれるか？」

「信じられない話だけど、摩耶がこうしてここにいる以上、信じるしかないじゃないか」
「だからさ。」

摩耶は何かを言いかけて、突然、クルリと碧輝に背中を向けた。

「あたしのせいで深海棲艦をこっちの世界に侵入させてしまった以上、提督に随伴して護衛しよう、と決めたんだ！」

碧輝は、摩耶の背中を見つめた。よく見ると、摩耶の露出した腰や太ももの後ろにも小さな弾痕が見えた。摩耶が何度も、随伴や護衛という言葉を口にしていたのはそんな理由があったのか、と碧輝は納得した。

「摩耶、お前の話を信じるよ」

「本当か？」

摩耶が明るい声をあげながら振り返って碧輝を見つめた。

「そんな理由ってことで、碧輝、あたしにお金を貸してくれよ」

摩耶は、そう言うと、照れた笑みを浮かべたのだった。

(つづく)

第16話 摩耶さまの胸元から出てきたもの

碧輝は照れた笑みをこちらに向けている摩耶を見つめながら考えた。

摩耶が、こちらの世界に現れてしまった本当の原因は俺にある。ゲームの中で感情的になって摩耶を解体してしまっただからだ。対空カッツインを発動しなかった摩耶に八つ当たりをしてしまったからだ。大切な『金剛』を失ったとはいえ、俺がもつと冷静であれば、こんな事態にはならなかったんだ。

微かな罪悪感と責任を感じた碧輝は、摩耶にお金を貸すことに決めた。

「分かった。貸すよ。とりあえず、摩耶のハンバーガー代は俺が立て替えておく」

碧輝は、摩耶にそう伝えたものの、彼女からの返済は期待しなかった。ゲームの世界から現れた摩耶が仕事に就けるはずがないからだ。ハンバーガー代は、摩耶に対する迷惑料だ、と自分に言い聞かせた。

「サンキュー、提督！」

摩耶が満面の笑顔を見せた。

「ただし！ 青山への約束撤回は、ちゃんと自分でするんだぞ」

「ああ、分かっているって！」

そのとき、バックヤード内のハンバーガーショップに通じる従業員用ドアが開いた。驚いた摩耶は、身構えた。

「ちよつと、近衛君。こんなところで何をしてるの？」

ドアから現れたのは、湯本店長だった。摩耶は何事もなかったかのように両腕を頭の後ろに組んで天井を見上げた。

「あ、湯本店長。ちよつと休憩してました。今からレジに戻ります」

碧輝が作り笑いをしながら答えると、湯本店長は碧輝と摩耶の顔を交互に見つめた。

「じゃあ、よろしくね！」

湯本店長はドアから顔を引っ込めるとすぐにドアを閉めた。碧輝はドアが閉まったのを確認すると、摩耶に顔を向けた。

「じゃあ、俺は仕事に戻るから、摩耶は青山と話をつけておくんだぞ」

「任せとけっ！」

摩耶は明るい声で答えた。

碧輝は接客カウンターのレジに戻るなり、社員の青山に睨まれた。

「近衛君、どこへ行ってたんだよ！」

「青山さん、摩耶が話があるそうですよ」

青山に聞いたただされた碧輝は、ニヤリとした笑みを浮かべながら答えた。すると、すぐに青山の顔がほころんだ。

「え、摩耶ちゃんか？」

「ええ。バックヤードで待ってます」

青山は満面の笑みで碧輝の肩を軽く叩くと、小躍りしながら店内の奥へと消えていった。青山の後ろ姿を見送った碧輝は、レジ業務を再開した。

摩耶は5分もしないうちに、ハンバーガーが山盛りになったテーブル席に戻ってきた。

摩耶はテーブル席に腰を下ろすと、接客カウンターにいる碧輝に顔を向けた。摩耶は碧輝と目が合うと、明るい笑顔でガッツポーズをした。そんな摩耶の態度から、青山との約束は取り消された、と感じ取った。

夕方、碧輝はハンバーガーショップのバイトを終えた。スタッフルームで私服に着替えて、バックヤードに出ると摩耶が待っていた。

「碧輝、お疲れ！」

摩耶は、碧輝を見るなり明るく声をかけた。碧輝は笑顔で応じたが、すぐに真顔に戻った。

「摩耶、山盛りのハンバーガーを食べ終わってから、今までどこへ行ってたんだ？」

「うん、ちよつとな！　それよりさ、あたしが食べたハンバーガー代、いくらになつたんだ？」

碧輝は何も答えず、ただ、レシートだけを摩耶に渡した。レシートを受け取った摩耶は、そこに印字されている数字を見つめた。

「いちまんごせんえん？」

「そう、15000円。俺の2日分のバイト代だよ」

碧輝は、ため息をついた。すると、摩耶は制服の胸元に自分の手を突っ込むとゴソゴソと動かした。何をしているんだろう、と碧輝が摩耶の胸の谷間を見つめていると、彼女は驚くものを取り出した。

「ま、摩耶！　それ、どうしたんだよ！」

「どうだ、碧輝。これで足りるか？」

驚いて目を丸くしている碧輝の眼前には、摩耶が驚掴みにしている何枚もの1万円札があった。

「摩耶、まさか盗んだんじゃないだろうな？」

「この摩耶さまが盗みなどするものか！」

「じゃあ、どうやってそのお金を手に入れたんだよ！」

「あたしも仕事をしたのさ！」

摩耶は得意げな顔で答えたのだった。

(つづく)

第17話 コスプレイヤー摩耶さま

「摩耶が仕事だった？」

碧輝は、得意げな笑みを浮かべている摩耶に尋ねた。摩耶は、胸元から取り出した数枚の1万円札を驚掴みにしたまま碧輝に手渡した。碧輝は、それを無言で受け取る。と、1万円札を数えた。

「うわ！ 3万円もあるじゃないかよ！」

碧輝は驚いて目を見開いた。そんな様子を見た摩耶は、可笑しそうに笑った。

「じゃあ、碧輝に3万円渡しておくからな」

「多すぎるよ。ハンバーガー代は15000円だよ」

「あたしが割った窓ガラスの修理費だよ」

「あ！ 思い出した」

碧輝は、摩耶がワンルールの室内で連装砲を発射して窓ガラスを割ったことを思い出した。

「窓ガラスの弁償 15000円で足りるかな」

碧輝は唸りながら考え込んだ。

「心配するなつて！ 足りなければ、あたしがまた稼いでやるからさー！」

「ところで、摩耶。いったいどうやって、短時間で3万円も稼いだんだ？」

「知りたいかー？」

摩耶はニヤリと笑いながら碧輝に顔を近づけた。

「そりや、気になるさ。2時間くらいで3万円も稼げる仕事があるなら、俺だつてやつてみたいからな」

「まー、碧輝には無理だな」

「摩耶、もつたいぶつてないで教えろよ」

「ふつふーん！ 仕方ない、教えてやるよ」

摩耶は両手を腰にあてると、得意げな顔をした。

「ハンバーガーを食べ終わったあと、近くを散歩していたらな、男に声をかけられたんだ」

「ナンパされたのか！」

「なんぱ？ 難破などしてないぜ。それでさ、そうしたらいきなり『摩耶に似てますね』と言われてさ『写真を撮らせてください』て言われたんだ。そこでこの摩耶さまは思いついたわけよ」

摩耶は、今度は両腕を胸の前で組んで、したり顔で天井を見上げた。

「そっか！ 撮影料を取ったんだな」

「そうよ！ それでお金をもらいながら写真を撮らせていたら、また別の男がやってきて稼ぎが増えちまつたってわけさ」

碧輝は摩耶の説明を聞いて、当然だろな、と納得して頷いた。

おそらく、男たちは『艦これ』を知っているカメラ小僧だろう。だから、摩耶のコスプレした女の子を見つけて撮影したんだろうけど、まさか本物の摩耶を撮影していたなんて夢にも思わないだろうな。

碧輝は、摩耶の肩に優しく手を置いた。

「よくやった、摩耶。だけど、そのノースリーブの制服じゃあ、深海棲艦に見つけられやすくなる」

「そうだな。何とかならないか？」

「よし、行くぞ！」

碧輝は、摩耶の腕を引っ張ってバックヤードからフードコートに抜けるドアを指して歩いた。

「お、おい！ 碧輝！ どこへ連れて行くんだよ」

碧輝は微かな笑みを浮かべながら、フードコートから専門店街の方へと摩耶を引っ張っていった。

やがて、碧輝と摩耶は専門店街に並ぶ店のひとつにたどり着いた。そこは、アパレルシヨップだった。

「なんだ、服屋じゃねえか」

摩耶がポカんと口を開けて、夏物の衣料品が並ぶアパレルシヨップを見つめている。

「摩耶、好きな服を買いなよ。だけど、安いやつな」

「そうか、この摩耶さまに変装させる気だな。よし、任せておけ！」

摩耶は乗り気だった。さっそくアパレルシヨップで服を選び始めた。そんな摩耶を、碧輝は微笑みながら眺めていたことを彼自身は気づいていなかった。

摩耶が好きな服を選ぶのに3分もかからなかった。摩耶は、薄手の蒼い長袖の服とベージュのシヨートパンツ、蒼いリボンが巻かれた麦わら帽子を両手で抱えていた。

「選ぶのが早いな」

碧輝は、女の子の買い物は時間がかかるもの、と思っていたが、それを覆されたので不意をつかれた思いだった。

「あたし、こんな性格だろ？」

服を選ぶときは艦娘の中でも一番早いんだぜ！」

「そうだな」

碧輝は、摩耶が抱えている衣料品の値札をチェックしながら答えた。

「よし、じゃあ、これを買ってくるからさ、摩耶は隣のシューズショップで好きな靴を選んできなよ」

「しゅーずしよつぷ？」

「靴屋のことだよ。そんな艀装品みたいな靴をはいいたら、深海棲艦にバレやすくなるんじゃないね？」

摩耶は両手に抱えていた衣料品を碧輝に渡すと、視線を足元に落とした。

「そうかなー？　　これ、海に出ると速くなるから良いんだぜ」

「こつちの世界で深海棲艦と戦うとしたら陸上になる。そんな艀装品だと戦いづらいだろう？」

「まー、そうだなー。じゃあ、靴屋へ行ってくる！」

摩耶は納得してなさそうだったが、アパレルショップを後にした。

碧輝はアパレルショップで会計を済ませると、隣のシューズショップへ向かった。シューズショップの前では、摩耶が選んだ靴を両手でぶら下げながら碧輝を待っていた。

摩耶が手にしている靴を見た碧輝は、呆れてため息をついたのだった。

第18話 ハイヒールの摩耶さま

シューズショップの店先で、摩耶が碧輝を見つめながら待っていた。摩耶は両手に左右の靴をぶら下げている。それを見た碧輝は、それを履くのかよ、と呆れて、ため息をついた。

「碧輝、あたし、この靴が気に入ったぜ」

摩耶は満面の笑みを浮かべながら、碧輝の顔に靴を近づけた。碧輝は顔を天井に向けた。

「碧輝、どうしたんだ？」

碧輝は、摩耶の右手から赤い靴を取り上げた。

「なあ、摩耶。いつ深海棲艦に襲われるか分からないというのに、ハイヒールはないだろ？　しかも、これ、10センチのヒールじゃないか」

「はいひーる、というのか。でも、あたしは、これがいいんだ！」

摩耶は、碧輝の手から赤いハイヒールを取り戻した。すでに摩耶の表情からは、先ほどの笑みが消えている。

「せめて、パンプスにしておきなよ。ほら、すぐそこに並んでる靴」

摩耶は、碧輝が指さす方向に顔を向けた。

「えー！　　こんな低い靴は嫌だよ！　　あたしはハイヒールがいいんだ！」

パンプスを見た摩耶は、すぐに拒絶して声をあげた。

「どうしてそこまでハイヒールにこだわるんだ？」

碧輝が尋ねると、摩耶は恥ずかしそうにうつむいた。

「そんなの、あたしの勝手だろ」

摩耶は、うつむきながら小さな声で答えた。

「あの一、お客さま。そちらの商品は、どうなさいますでしょうか？」

碧輝と摩耶のやりとりを見ていたシューズショップの女性店員が声をかけてき

た。その声に、摩耶が素早く反応した。

「このハイヒール、買うぜー」

摩耶は女性店員にハイヒールを手渡した。女性店員は笑顔で「ありがとうございます

ます」と礼を言うと、ハイヒールを手に店内のレジへと向かった。

「あ、摩耶。もう、しょうがないな」

碧輝は、ニヤリと笑みを浮かべている摩耶を横目で見ながらシューズショップの

レジへと向かった。

シヨツピンググモールの専門店街で摩耶の服装品を揃え終えた2人は、駐車場へ向かった。摩耶は、よほど赤いハイヒールが気に入ったのか、すでに、履いている。

「おうおう、どうだ、碧輝！　このハイヒールのおかげで摩耶さまの背が高くなったぜ！」

摩耶は上機嫌で碧輝に話しかけた。一方の碧輝は、黙り込んでいた。

このあとマンションに帰って、やっぱり摩耶を泊めることになるのか。摩耶だけホテルに泊めても、あんな性格だから、必ず面倒なことが起こるだろうし、お金もかかる。それより、摩耶は俺の部屋に泊まることをどう思うんだろ？

碧輝は歩きながらそこまで考えると、ふんふん、と上機嫌で鼻歌を歌っている摩耶に顔を向けた。

「なあ、摩耶」

「なんだ？」

「今夜泊まるどころ、どうする？」

「どうしよつか？」

摩耶は、碧輝を見つめながらニヤリとした。ハイヒールを履いてる摩耶が、碧輝の顔に近くなっている。碧輝は、摩耶の顔から視線を外した。

そこは、お前から「泊めてほしい」と言うべきだろ。恋人でもないお前に「泊まっ

ていくか？」だなんて言えないじゃないか！

ホント、空気を読めない女だな。

碧輝は歩きながら、ため息をついた。

「なあ、碧輝」

碧輝は、摩耶に顔を向けた。

「摩耶さまが、碧輝の部屋に泊まってあげてもいいんだぜ？」

摩耶の言葉に、碧輝は一瞬だけ彼女を睨みつけた。

まったく、なんでまた上から目線で言ってくるんだ、この女は！

でも、これが摩耶の性格なんだ。ここは、聞き流してやろう。

「摩耶がそうしたければ、俺はかまわない」

碧輝は、わざとぶつきらぼうに答えると、ジーンズのポケットからクルマのキーを引っ張り出した。

「じゃあ、決まりだな！」

摩耶は明るい声をあげた。

碧輝と摩耶は、クルマに乗り込んだ。碧輝の愛車である黒いプリウスだ。しかし、碧輝はクルマを発進させなかった。碧輝は真顔で、助手席の摩耶に顔を向けた。

第19話 摩耶さまは人間？

碧輝には気になることがあった。摩耶の身体に關することだった。

「なあ、碧輝。どうしたんだ？ さつきからずっと、あたしの顔を見てさ」

助手席の摩耶が運転席の碧輝に尋ねた。

「摩耶、ずっと気になってることがあるんだ」

「なんだよ？」

碧輝は自分の気持ちを落ち着かせようと深く息を吸い込んだ。

「摩耶は、人間なのか？」

「なんだ、そんなことか。どうして、そんなことを聞くんだ？」

「ゲームの世界は2次元の世界だろ？ そんな世界から飛び出してきた摩耶につい

て気になるのは当然じゃないか」

「にじげん？　なんだ、それ？」

碧輝は、摩耶に難しい言葉を使ってしまったことを後悔した。面倒くさくなるだ

けだからだ。

「要するに、もし摩耶がケガをしたら、こっちの世界でも治療できるのかを知りたいん

だ」

「ははーん、そっかー。碧輝は、この摩耶さまのこと心配してくれるんだー」

摩耶は笑みを浮かべながら碧輝の目を見た。摩耶と目が合った碧輝は、すぐに目を逸らした。そのときだった。突然、摩耶が碧輝の左手首を掴んだ。そして、掴んだ碧輝の手を引つ張つて自分の左胸に押し当てた。驚いた碧輝は、目を丸くした。

「ま、摩耶！　いきなり何をするんだ。」

「どうだ、碧輝。あたしの胸の鼓動は感じるか？」

「え？」

碧輝は、摩耶によつて押し当てられている自分の左手に意識を集中させた。摩耶の柔らかい胸の感触の中から彼女の心臓の鼓動が伝わってくる。摩耶の胸から感じる鼓動は、まさに人間のそれだった。

「感じる。」

碧輝は目を見開きながら呟いた。

「どうだ、これで分かっただろ？」

「あ、ああ。分かった」

碧輝は動揺しながら答えると、摩耶の胸から左手を素早く引き離した。

「さ、行こうぜ！」

摩耶は明るい声をあげながら、運転席に座る碧輝の左肩を軽く叩いた。碧輝は、クルマを発進させた。

碧輝が運転する黒いプリウスは、自宅マンションの駐車場に入った。碧輝と摩耶は黒いプリウスから降りた。

すでに日が沈んで周辺は暗くなっているが、点々と規則正しく並んだ街灯が、広い駐車場のアスファルトを点々と照らしている。

碧輝は、ワンルールの賃貸マンションに住んでいる。2人は5階までエレベーターで昇ると、白い照明に照らされた通路を歩いた。通路を歩く摩耶は絶えず周辺に視線を送っている。碧輝は、摩耶が深海棲艦を警戒している、とすぐに分かった。

ゲーム世界から飛び出してきたのは、摩耶だけであってほしい。深海棲艦が、こちらの世界に飛び出したことは嘘であってほしい。

碧輝は、そう願った。なぜなら、深海棲艦が現れたら、それこそ生活が脅かされるからだ。

「なあ、碧輝」

碧輝の隣りを歩きながら周囲を警戒している摩耶が沈黙を破った。

「何だよっ？」

「思ったんだけどさー。もし、いま深海棲艦が現れたら、武器なしにどうやって戦えばいいんだ？」

碧輝は隣の摩耶に顔を向けた。摩耶が手にしているものといえば、彼女の服装品が入った紙袋だけだ。連装砲も機銃も装備していない。

突然、碧輝は歩幅を大きくして足早で歩き始めた。それに気づいた摩耶も、遅れないように早足になった。コツコツという摩耶のハイヒールの足音がマンションに響きわたる。数秒後、2人は通路を走っていた。摩耶のハイヒールの音が速いテンポで、いつそう響き渡った。

ガチャガチャ、バタン！　　ガチャリ。

碧輝は素早く部屋のドアに鍵を差し込んで開けると、摩耶と一緒に室内に入り、すぐにドアを閉めて施錠した。すぐに人感センサーが反応して、玄関の天井から淡い暖色系の光が碧輝と摩耶を照らしている。そんな中、碧輝と摩耶は見つめ合った。次の瞬間、碧輝と摩耶は大笑いした。

「碧輝が急に走り始めたから、あたしも一緒に走ってしまったじゃねーかよー！」
「摩耶が思い出したかのように、武器がない、なんて言うからだよ！」

しばらく碧輝と摩耶は笑っていたが、やがてまた静かになった。2人の間に再び沈黙が訪れる。どこからか、隣人の話し声が微かに聞こえてくる。

碧輝は、摩耶を見つめている自分の鼓動が速くなっていることに気がついた。摩耶が碧輝からのまっすぐな視線に気づく。すると、すぐに摩耶は視線を落としながら顔を背けた。

「な、なんだよ。じつと、あたしを見つめてんじゃねーよ。」

摩耶は動揺しながら言った。碧輝は目を覚ましたように瞬きをしたあと、摩耶から視線を外したのだった。

(つづく)

第20話 夜に武装する摩耶さま

碧輝の部屋はワンルーム。風呂、洗面台、トイレが一緒になった3点式ユニットバスが付いている。当然、2人で過ごすとなると、狭い。しかも、碧輝と摩耶は、男と女。さらに、2人は恋人同士ではなく、まだ出会って1日もたっていない。

「こんな狭い部屋で碧輝と一緒に夜明けを待つのかー?」

摩耶がベッドに腰を下ろしながら、フローリングであぐらをかいている碧輝に尋ねた。碧輝は、バイト先のハンバーガーショップで買ったハンバーガーにかぶりつきながら、横目で摩耶を見つめた。

「ま、仕方ないかー! あたしが勝手に碧輝の部屋に来ちゃったんだからなー」

碧輝は、ハンバーガーを頬張りながら、何度も頷いた。

「でもさー、ベッドは1つしかないぜ? ここで抱き合つて寝るかー?」

摩耶がニヤリとしながらそう言った直後、碧輝が口の中の食べ物を吹き出した。

「うわ! 汚ねえなー! 食べたものを吹き出すなよー!」

摩耶が悪戯っぽく笑いながら碧輝の肩を軽く叩いた。碧輝はローテーブルに吹き出された食べかすをティッシュでかき集めると、摩耶を横目で睨んだ。

「冗談に決まってるだろ！　あたしは、どこかの提督に解体された艦娘だけ？」

「そんな艦娘と一緒にベッドで寝たくはないだろ？」

摩耶は笑みを浮かべながら碧輝に向かつて尋ねた。碧輝は、何も答えることなく、食べかけのハンバーガーに視線を戻した。そんな碧輝を見ていた摩耶の顔から笑みが消えた。摩耶は、ベッドから腰を浮かせて立ち上がった。

碧輝は、あいかわらず黙々とハンバーガーを食べている。摩耶は、碧輝の背中を一瞥すると、部屋の隅へ移動した。そこには、摩耶が取り外した連装砲や機銃などの艀装品がまとめて置いてあった。

摩耶は何も言わずにアンテナ型のカチューシャを頭に着用した。そのあと、連装砲や機銃などを腕に装着していく。摩耶が艀装品を装着していくことに気づいた碧輝は、首を傾げた。

「摩耶、どうして武装し始めたんだ？」

「あ？　ちよつと、外で射撃練習でもしてくる」

摩耶は低い声で答えた。碧輝は慌てて立ち上がった。

「やめろよ。こんな街中で連装砲なんか発射したら、すぐに警察を呼ばれるじゃないか！」

「じゃあ、どこか人気（ひとけ）が無いところまでクルマで連れて行ってくれよ」

「えー？　今からか？　俺、明日は朝からバイトなんだよ」

「ふーん。じゃあ、あたし、ひとりで行ってくる」

摩耶は、そう答えると玄関に向かった。

夜の街で摩耶をひとりで歩かせたら、絶対に面倒なことが起こる！

そう感じた碧輝は、慌てて玄関に向かった。

「待てよ、摩耶。分かったよ、連れていくよ！」

「碧輝は、明日はバイトなんだろ？　無理しなくていいぜ」

摩耶は玄関に座り込んで艀装品のブーツを履きながら言った。

摩耶をひとりで夜の街を歩かせる方が心配で眠れなくなるよ。

碧輝は、そう思いながら、ため息をついた。

こうして再びフル装備の艦娘となった摩耶と、エアガンであるベレッタを「装備

」した碧輝は、マンシヨンの駐車場へ向かった。

途中、マンシヨンの住人男性とすれ違った。当然のようにノースリーブでミニス

カ姿の摩耶を興味深そうに見つめた。それに気づいた碧輝は「これ、コスプレなんです」

と苦笑いでごまかした。

やがて、碧輝と摩耶は黒いプリウスに乗り込んだ。

「摩耶、どうして買ってあげた服を着ないんだよ？」

碧輝は、助手席の摩耶に尋ねた。

「あとから着るよ。それより、碧輝。ここから海は近いのか？」

「海？　　クルマで1時間の距離かな」

「そっかー。まあ、いいや」

摩耶は、それだけ答えると黙り込んでしまった。

摩耶は、何を考えているんだろ？

碧輝は、摩耶の横顔を見つめた。車外から差し込む街灯の白い光が摩耶の顔を淡く照らしている。碧輝は、摩耶の横顔を見つめたまま、一瞬、時の流れを忘れた。そのとき、突然、摩耶が碧輝に顔を向けた。

「碧輝、クルマを発進させないのか？」

「あ、ああ。今から出すよ」

驚いた碧輝は、慌ててエンジンスタートボタンを押した。そんな碧輝を見ながら、摩耶は首を傾げたのだった。

(つづく)

第21話 摩耶さま、心霊スポットへ行く！

夜のバイパス。土曜日の夜だけあつて交通量が多い。碧輝が運転する黒いプリウスは、週末の夜で賑わう街から離れて、静かな山間部へと向かった。

碧輝が運転している間、助手席の摩耶は両腕に装着した連装砲や機銃を調整していた。それがひと段落すると、今度は、流れていく夜の景色を見つめていた。その間、ずっと車内は静かだった。

やがて、黒いプリウスは山の麓に近づいた。峠へと続く国道の交通量が極端に少なくなった。

「なあ、碧輝。民家がなくなっちゃったけど、どこへ向かつてるんだ？」

景色が闇に包まれたことに不安を感じたのか、摩耶が口を開いた。

「この先にダム湖があるんだ。そこなら、滅多に人は来ない。心霊スポットだからな」

碧輝は、カーブが続く山道を慎重に運転しながら答えた。

「しんれいすぼつと？」

「幽霊が出る噂がある場所って意味だよ」

「ふーん、幽霊かー。まあ、いいや」

「摩耶は、幽霊は怖くないのか？」

「全然怖くない。碧輝は怖いのか？」

碧輝は答えなかった。なぜなら、突然、ブレーキを踏んでクルマを急停止させたからだだった。

「な、なんだよ！ いきなり停めるなよ！」

驚いた摩耶が叫んだ。摩耶の声が届いていないのか、碧輝は、ヘッドライトに照らされた前方の路面を呆然と見つめていた。

「碧輝、どうしたんだ？」

「いま、人影が横切ったんだ。しかも、凄い速さで」

「あはは！ 幽霊でも出たんじゃないのか？」

摩耶が愉快そうに笑い声をあげた。摩耶の言葉に、碧輝は鳥肌が立った。

「変なこと言うなよ」

碧輝は声を震わせながら呟くと、再びクルマを発進させた。

こんなところ、ひとりじゃ、絶対に来られないよな。

碧輝が運転する黒いプリウスは、一筋のヘッドライトを頼りに山の奥へと進んでいく。

やがて、ダム湖の駐車場に到着した。10台分の駐車スペースがある駐車場に

は、碧輝の黒いプリウスしかない。駐車場には白い光を放つ街灯と公衆トイレ、自販機があるくらいで、ほとんどが闇に包まれている。

ダム施設には、誰もいない。心霊スポットであるダム湖には、碧輝と摩耶の2人しかいなかった。

「おー！　　星が綺麗じゃねーかー！」

摩耶が空を見上げながら明るい声をあげた。碧輝は、摩耶が明るい性格で良かった、と安堵した。

「摩耶、ここなら思う存分、砲撃できるよ」

「そうだなー。よし、ちよつと連装砲で直接照準射撃したいから、そうだな、碧輝のクルマを標的にしていいか？」

「ふざけんな！」

碧輝が怒鳴ると、摩耶は笑い声をあげた。2人の声が静かな山奥に響く。

「あはは！　　冗談だよ。よーし、湖面でも走るかなー」

摩耶はダム湖の湖面へと続く下り階段に向かった。駐車場にひとり残された碧輝は、周りの闇を見渡したあと、慌てて摩耶を追った。

「おーい、摩耶！　　その服装みたいなブーツで湖面を移動できるのか？」

「当たり前だろ？　　あたし、艦娘だぜ？」

摩耶は後ろを振り返らずに答えた。やがて、摩耶は湖面へと続く階段を下りていく。しかし、階段は途中から遊歩道となってダム湖に沿ってその奥へと延び始めた。摩耶は、遊歩道の柵をまたぐように乗り越えようと、法面を歩いて湖面へと下っていった。

碧輝は階段を下って遊歩道にたどり着くと、急斜面を下っていく摩耶の背中を見つめた。

「本当に、あんな船首みたいなブーツで水面に浮くのか？」

碧輝は、ひとり眩きながら、摩耶の動きを見守った。

摩耶は、碧輝の心配をよそに、当たり前のように湖面に立った。

「よーしー！ 行つくぞー！」

摩耶は威勢よく叫ぶと、湖面を颯爽と走り始めた。やがて、摩耶は闇夜の中に消えていった。湖岸にひとり残されてしまった碧輝は、ここが心霊スポットであることを思い出すと、恐怖で身を縮ませたのだった。

(つづく)

第22話　ダム湖の幽霊

心霊スポットである山奥のダム湖。ダム湖沿いに延びる遊歩道は暗闇に包まれている。

いま、碧輝が立っている場所は、道路の街灯の光がかりうじて届いてにすぎず、数歩先は完全な闇だった。

ダム湖には果てしない闇が広がっており、対岸は全く見えない。そんなダム湖の闇からは砲撃音や銃撃音、水しぶきの音が断続的に聞こえてくる。それは、摩耶がダム湖で射撃練習をしている音だった。

ダム湖の畔で摩耶の帰りを待つ碧輝は、恐怖で全身を硬直させていた。

摩耶、早く戻ってこいよ。こんな場所、ひとりで居たくないよ。

闇の中からガサツと草の音が聞こえると、驚いた碧輝は身を縮めながら音がする方向へ顔を向けた。そこに何もいないと分かった。碧輝は、安堵のため息をついた。

ドーン、バシャーン！　ダダダダダ

摩耶が放つ砲撃や銃撃は、まだ止まない。碧輝が、クルマに戻って車内でラジオでも聞こう、と決めたときだった。

突然、背後の階段から圧迫感と共に何やら重い気配を感じた。それは、明らかに今まで感じたことがないような重圧感だった。

碧輝は、ゆっくりと後ろを振り返った。次の瞬間、碧輝は恐怖の悲鳴をあげながら尻もちをついて倒れた。碧輝の正面には、赤黒い炎に包まれたような、むき出しになった巨大な歯と幾つもの突起物をもつ「幽霊」が立ちはだかっていた。

「うわあ！　　出たー！」

碧輝は、心臓を鷲掴みにされたような恐怖感に襲われてパニックになった。巨大な歯と突起物の「幽霊」が碧輝に近づいてくる。碧輝の目は恐怖で見開き、全身が硬直して声さえ出せないようになった。

「オマエ八、ダレダ？」

「幽霊」の巨大な歯がゆっくりと動いた。カタコトの日本語を話している。そのとき、碧輝は、いま目の前にいるのは幽霊じゃない、と直感した。

「オマエ八、ダレダ？　　コタエロ」

碧輝は「幽霊」の巨大な歯の上にある幾つもの突起物を見つめた。

これは、大砲？　　そうだ、コイツ、見たことあるぞ！

いま目の前にいる得体の知れない存在が幽霊ではない、と直感した碧輝は、ゆっくりと腰に右手を伸ばした。ジーンズの腰には、エアガンである拳銃・ベレッタを挟ん

でいたからだった。

「オマエハ、カラムスノナカマカ？」

得体の知れない存在が「艦娘」という言葉を発したとき、碧輝は確信した。

コイツは、深海棲艦だ！

そう確信した瞬間、碧輝が感じていた恐怖は、瞬く間に、闘争心に昇華された。

「うあーっ！」

碧輝は腰から引き抜いたベレッタを深海棲艦に向けると、雄叫びをあげながらトリガーを引いた。

ベレッタから発射されたプラスチックのBB弾が深海棲艦の巨大な歯に当たった。深海棲艦が一瞬怯んだ隙に碧輝は立ち上がると、さらにベレッタからBB弾を発射した。プラスチック弾だから威力は、ほとんど無い。しかし、深海棲艦を怯ませるには十分だった。

碧輝は、階段で立ちほだかる深海棲艦に体当たりを食らわせると、そのままコンクリートの階段を駆け上った。階段を駆け上がりながら、何か武器になるような棒がないか探したが、見つからない。次の瞬間、背後からドーンという砲撃音が聞こえた。同時に、ヒュンツと空気を切る音がして碧輝の耳元を何かが高速で飛んでいった。

砲撃してきた！　このままでは、殺される！

碧輝の脳裏に、死の恐怖、が覆い被さってきた。再び碧輝の心を恐怖が包み込んだとき、動揺した碧輝は足がもつれて転倒した。転倒した碧輝は、すぐに後ろを振り返る。すると、深海棲艦がゆっくりと階段を移動して碧輝に近づいてきた。深海棲艦の持つ全ての大砲が、碧輝に照準を定めている。

「オマエ、カンムスジヤナイ。オマエ、テイトクダナ？」

深海棲艦が低い声を発しながら近づいてくる。街灯の光に照らされた深海棲艦の姿を見た碧輝は、その正体に気がついた。

コイツは、軽巡ホ級！

碧輝が階段で横たわりながらベレッタを軽巡ホ級に向けたときだった。突然、砲撃音が聞こえて目の前が真っ暗になった。

(つづく)

第23話 摩耶さまからのキス

ズドン！ という炸裂音と爆風によつて、碧輝は目の前が真っ暗になった。闇の中で地響きのような悲鳴が聞こえてくる。再び砲撃音が聞こえると同時に、また地響きのような悲鳴が、今度は短く発せられた。その後、碧輝は自分のすぐ近くに何がドサリと倒れる振動を微かに感じた。

「碧輝――！ 大丈夫か？」

コンクリートの階段を駆け上がってくる鈍い足音と一緒に摩耶の叫び声が聞こえてきた。摩耶が近づいてくることを察した碧輝は、閉じていた目をゆつくりと開いた。すると、そこには碧輝の顔を覗き込む摩耶の顔があった。

「碧輝、立てるか？」

摩耶が碧輝の右腕を引っ張った。碧輝は、摩耶に支えられながら、よろよろと立ち上がった。そのとき、すぐ傍に、軽巡ホ級が倒れていることに気づいた。軽巡ホ級の大きな歯や幾つもの砲身は破壊されて、見るも無惨な姿になっていた。

「碧輝、ケガはないか？」

摩耶が心配そうな表情で碧輝を見つめている。碧輝は「大丈夫だ」と微笑んで見

せた。

「やっぱり、深海棲艦も、こっちの世界に来ていた」

摩耶は、軽巡ホ級の死体を見下ろしながら呟いた。碧輝は、無言のまま、軽巡ホ級の死体を見つめている。

「コイツは軽巡ホ級。この世界へ抜けるトンネルで、あたしを艦載機で襲ってきた深海棲艦じゃないな」

「摩耶」

「ん？」

碧輝は、摩耶を見つめた。

「ありがとう、助かったよ」

「なあに、いいってことよー」

摩耶は笑顔でウインクして見せた。碧輝は、階段で息絶えた軽巡ホ級を見下ろした。そのときだった。軽巡ホ級の全身が透け始めた。その数秒後、軽巡ホ級は音もなく消滅した。

「消えた」

碧輝は呟くと、安堵のため息をついた。

「さつき、クルマの前を横切ったのは軽巡ホ級じゃねーのか？」

摩耶は、アンテナ型のカチューシャの位置を整えながら碧輝に尋ねた。

「いや、あれは軽巡じゃなかった。もっとしっかり人の形をしていたような気がする」
「じゃあ、まだ近くに深海棲艦がいるかもしれないな」

摩耶の言葉に、碧輝はエアガンのベレッタを手にしながら周辺を警戒した。

「そういえば、さっきの軽巡が俺に話しかけてきたんだ」

「そうなのか。何を言われたんだ？」

「お前は艦娘の仲間か？」　　と言っていた気がする

「あいつら、やつぱり、あたしを追いかけてこっちの世界に入ってきたんだな」

「いったいどれだけの深海棲艦が、こっちの世界に流れ込んできたんだ？」

「わからないな。うん、分から」

突然、摩耶が言葉を切って、碧輝の背後に目をやった。次の瞬間、いきなり摩耶は碧輝に正面から抱きついた。突然、摩耶に抱きつかれた碧輝は驚いて目を丸くした。

「碧輝、そのまま動くな」

摩耶が碧輝の耳元で囁いた。摩耶の胸が碧輝の胸板に密着している。碧輝は、何
が起きているのか分からなかった。

摩耶は碧輝を正面から見つめた。2人の鼻先が触れ合うほど近い。混乱した碧輝は、目を見開きながら摩耶を見つめた。そのときだった。摩耶は目を閉じると、碧輝

の唇に自分のそれを重ねた。碧輝は目を見開いていたが、まもなく目を閉じて、摩耶からのキスを受け入れた。

摩耶は、俺のこと、好きだったのか？

摩耶とキスをしている碧輝の心に、甘みのある温かな心地良さが広がっていく。碧輝も摩耶を抱き締めた。優しく、それでいて力強く、碧輝は摩耶を自分に引き寄せるように抱き締めた。それに気づいたのか、摩耶は右目だけを開いて、碧輝の肩越しに彼の背後を睨みつけながらゆっくりと右腕を上げていく。

突然、碧輝の背後で砲撃音が轟いた。ズドーン、ズドーンと、摩耶が碧輝の後方に向かって速射を始めたのだ。

摩耶の速射音が碧輝の鼓膜を震わせる。何が起きたのか分からない碧輝は、ただ目を見開いて、摩耶の砲撃が止むのを待つしかなかった。

(つづく)

第24話 摩耶さまの女心？

摩耶が碧輝に抱きついたまま彼の背後に向けて連装砲で速射している。摩耶が速射を始めて数秒後、碧輝は背後から低い唸り声を聞いた。

「よっしやあー！ 撃破だぜー！ 背後から奇襲を仕掛けようなんて、この摩耶さ

まは見逃さないぜー！」

摩耶は嬉しそうにそう叫ぶと、碧輝の身体から離れ、砲撃の標的になっていた場所へ向かって駆け出した。

「背後からの奇襲？」

碧輝は後ろを振り返った。街灯に照らされたアスファルトに何やら黒い物体が倒れている。碧輝も摩耶を追うように、黒い物体のもとへ向かった。

摩耶は、倒れている黒い物体に近づくと、それに向けて連装砲の砲口を近づけた。

「お前、軽巡ツ級だな。答える。お前たちは、いったいどれだけの数が、こつちの世界に入ってきたんだ？」

摩耶は怒りを抑えたような低い声で、大破している軽巡ツ級に訊ねた。

「ワレ、カムムス、ハツケン・セリ」

息も絶え絶えの軽巡ツ級は、地面に顔を伏せながら呟いた。

「あ、ばっか野郎！」

摩耶の怒鳴り声と砲撃音が同時に、暗闇のダム湖に響いた。至近距離で摩耶の連装砲の直撃を受けた軽巡ツ級は、絶命した。

「ま、摩耶。いくら深海棲艦とはいえ、無抵抗の軽巡を至近距離で砲撃するなんて、残酷じゃないか？」

「いま、コイツが無線通信を使って、あたしの事を仲間に伝えたんだ。だからすぐに、とどめを刺したのさ」

碧輝は摩耶の肩に軽く手を乗せると、軽巡ツ級の無惨な骸を見下ろした。やがて、軽巡ツ級も、先ほどの軽巡ホ級のように消えていった。

「どれくらいの数か、深海棲艦が、こっちの世界に入ってきているんだ？　ちくしよ
う！　　いったいどうすりゃいいんだ！　　こんなときに鳥海さえいてくれたら
」

摩耶は右手で拳をつくりながら悔しがった。そんな摩耶の姿を、碧輝は笑みを浮かべながら見つめていた。

「なあ、摩耶。さっき、いきなり俺にキスしたのは」

「あ？　　ああ、あれか？　　軽巡ツ級が碧輝の背後を狙っていたから、あたしがわ

ざと碧輝にキスをして軽巡ツ級を油断させたのさ！ まんまと引つかかった軽巡ツ級が油断したところを、あたしが速射で大破させたつてことよ！」

摩耶は得意げな顔で答えた。一方、碧輝の顔からは、笑みが消え失せていた。

「じゃあ、摩耶は軽巡ツ級を油断させるためだけに、俺にキスをしたのか？」

「あ、あつたり前じゃねーか！ どうして、それ以外の理由で碧輝にキスなんか

摩耶は碧輝に背を向けながら答えた。

俺、何を期待していたんだろ。馬鹿馬鹿しい！

碧輝は、摩耶に好かれている、と勘違いした自分に腹が立った。

「摩耶、帰るぞ」

碧輝は摩耶の反応を待つことなく駐車場へ向かった。

「え？ もう帰るのか？」

摩耶は碧輝の背中に向かって尋ねた。しかし、碧輝は何も答えることなく駐車場へ向かつて歩き続けている。

碧輝は、自分のクルマ、黒いプリウスに戻ると、すぐに運転席に座った。

俺は、本当は金剛ちゃんが好きだったんだ！ 摩耶みたいな男勝りな女なん

て好みじゃない！ 好みなんかじゃないんだ！

碧輝は、こちらに向かって歩いてくる摩耶を見ながら、自分に言い聞かせた。

摩耶がドアを開けて助手席に座った。摩耶は助手席に座るなり、運転席の碧輝を見つめた。碧輝は、わざと摩耶を見ないようにしていた。

「なあ、碧輝。あたしがキスしたこと、怒ってるのか?」

「別に」

碧輝は、わざと冷たい口調で返した。

「なんだよ、その態度。怒ってるじゃないか!」

「別に怒っていいよ。さっきのキスは、深海棲艦を倒すための作戦だったんだろ?」

摩耶は何も答えなかった。さらに、碧輝が言葉が続ける。

「摩耶は敵に勝つためなら、どんな男とでもキスができるもんな」

次の瞬間、突然、碧輝は左頬に衝撃を受けた。驚いた碧輝は、助手席の摩耶を見つめた。摩耶は、右手で拳をつくりながら、碧輝を睨んでいた。

「な、なんだと? お前なんか女に女の気持ちが分かってたまるかよ!」

摩耶は、目を丸くしている碧輝に怒鳴りつけると、助手席から車外へ飛び出した。そして、暗闇のどこかへと消えてしまった。

碧輝は、摩耶に殴られた左頬をさすりながら、摩耶が消えた方向を見つめ続けたのだった。

)))))

第25話 ダム湖に消えた摩耶さま

摩耶がダム湖の闇へと消え去ったあと、碧輝は、しばらく車内で呆然としていた。摩耶に殴られた左頬には鈍い痛みが残っている。

女の気持ち。確かに、摩耶、そんなことを言ったよな。

碧輝は、摩耶に左頬を殴られた場面を頭の中で何度も繰り返して、彼女の言葉を思い返した。

「俺、摩耶を傷つけちゃったのかな。」

碧輝は罪悪感を覚えて、深いため息をついた。

「とにかく、摩耶を探さない！」

碧輝はヘッドライトをハイビームにすると、クルマを発進させた。

碧輝が運転する黒いプリウスは、街灯さえ無いダム湖沿いの山道をゆつくりと進んだ。ヘッドライトに照らされた白いガードレール、枝が好き勝手に伸びた不気味な樹木、墨のような湖面。そんな心霊スポットの景色を見ていた碧輝は、幽霊が出やしないか、と恐怖心でいっぱいになった。

「まったく、こんな心霊スポットで、俺さまをひとりにするなんて。」

おどおどと運転しながら呟いた碧輝は、ふと思うことがあつて言葉を切つた。
 「俺さまっ！」

碧輝は、再び、そう呟くと苦笑いを浮かべた。

自分を「さま」付けするなんて。摩耶の口癖がうつちやつたのかな。

そのとき、碧輝は摩耶とのキスの場面を思い出した。摩耶の唇の温かき、柔らかい感触が脳裏に心地よく甦る。その瞬間、心霊スポットでの恐怖心を忘れていた。

「摩耶」

碧輝は、摩耶のことが心配になつて彼女の名前を呟いた。

もしかしたら、このダム湖には、他にも深海棲艦がいるかもしれない。もし、摩耶が深海棲艦に襲われていたら。

碧輝はアクセルを強く踏んで加速した。ダム湖を囲むように延びる山道を鮮やかなハンドルさばきで走り抜けていく。

5分ほどクルマを走らせると、ダム湖をひと回りしたらしい。自販機がある駐車場に戻つてきた。しかし、駐車場の様子がおかしい。自販機から白い煙が上がり、そのすぐ傍には黒い影が見える。

碧輝は、駐車場にクルマを停車させると、恐る恐る自販機の傍で突つ立っている黒い影を見つめた。碧輝は、不安と恐怖で生唾を呑み込んだ。そのとき、黒い影がこち

らに向かつて動き始めた。

「うわあー！」

碧輝は、あまりの恐怖心から叫び声をあげると、クルマをバックで発進させた。黒い影がさらに近づいてくる。駐車場のガードレールに衝突寸前までクルマをバックさせると、次は前進させようと、正面のフロントガラスに顔を向けた。

そのときだった。黒い影が、碧輝が乗る黒いプリウスの正面に立ちはだかった。

「おい！　碧輝！　あたしだよー！」

それは、摩耶だった。黒い影の正体が摩耶だと気づいた碧輝は、安堵のため息をついた。運転席側に近づいてくる摩耶を見ながら、碧輝は運転席の窓ガラスを開けた。

「なんだ、摩耶かよ。驚かすなよ。」

碧輝は、そう言いながら、摩耶が何かを抱えていることに気がついた。

「ほらよ」

突然、摩耶は自分が抱えているものの一つを碧輝に手渡した。それは、よく冷えた缶コーヒーだった。碧輝は、手にしている缶コーヒーを見つめた。そして、摩耶が大量に抱えているものに視線を移す。碧輝は驚くと、彼女の顔を見つめた。

「摩耶、そんなにたくさん缶コーヒー、どうしたんだよ？」

「ああ、これな。あそこに飲み物が入った箱があっただけだよ、どうやって開けりゃい

いか分かんなくて、軽く砲撃してやったんだ。そうしたら、たくさんの飲み物を隠してやがったのさ！」

摩耶は意気揚々と答えた。碧輝が、摩耶が指差す方向を見ると、大破した自販機が微かな煙をあげている。そして、その周辺には大量の缶が散乱していた。

「あーあ、やつちやつた。」

呆れた碧輝ではあつたけれど、摩耶らしい、と思い、微笑んだ。碧輝は笑みを浮かべながら摩耶を見つめた。

「摩耶、乗れよ。帰るぞ」

「お、おう。そうだな、帰るかー」

摩耶は碧輝の顔色を窺いながらも、明るい笑顔で応じた。

摩耶は大量の缶コーヒートを抱えたまま、助手席に座り込んだ。

「なんでまた、ブラックコーヒーばかりなんだよ？」

運転席の碧輝は呆れながら助手席の摩耶に尋ねた。

「ああ？　だつてさ、碧輝の部屋に珈琲の缶ばかり置いてあつたじゃねーかよ。好きなんだから、珈琲」

「ああ？　だつてさ、

摩耶の返答を耳にした碧輝は、思わず彼女の顔を見つめた。摩耶は満面の笑みで

碧輝を見つめている。

摩耶、俺がコーヒー好きだと知って、こんなにたくさん取ってきたのか。

碧輝は、摩耶の気持ちを知って嬉しくなった。

「なあ、碧輝。さっきは、いきなりキスして悪かったな。もう、あたしからはキスしないからさ、だから、勘弁してくれな」

摩耶は、碧輝を伏し目がちに見ながら謝った。そんな摩耶からの謝罪を受けた碧輝は、複雑な気持ちになった。

もう、キスしてくれないのか。

「碧輝、どうかしたのか？ ボーツとしちまつてさ」

摩耶の言葉に、碧輝は我に返った。

「あ、いや、なんでもない。じゃあ、帰るか」

碧輝は、クルマを発進させた。その直後、2人が乗る黒いプリウスは、大破している自販機の近くを通り過ぎた。

「摩耶、もう2度と自販機を壊すなよ。これは犯罪だからな」

碧輝は、壊れた自販機を横目で見ながら、摩耶をたしなめた。

「やっぱり、そうなんだなー！ ああ、次は気をつけるぜ！」

助手席で明るく答える摩耶。そんな摩耶を横目で見ながら微笑む碧輝。2人が乗る黒いプリウスは、ダム湖を離れて、眼下に見える夜景へと下っていくのだった。

))))))

第26話 摩耶さまの姉妹艦

碧輝が摩耶と一緒にワンルームマンションに帰宅すると、深夜11時をまわっていた。

ダム湖からの帰り道、車内は静かだった。なぜなら、助手席の摩耶は、ずっと車を警戒していたからだだった。

帰宅すると、摩耶は射撃練習や帰り道での警戒で疲れたのか、すぐに碧輝のベッドへ仰向けに倒れ込んだ。

ノースリーブの制服のまま、しかも、アンテナ型のカチューシャを外すことなくベッドで眠ってしまった摩耶。スリットが入った白いミニスカートから伸びる白くて長い美脚が目に入った碧輝は、思わず生唾を呑み込んだ。碧輝は、摩耶が眠っているベッドに手を伸ばした。碧輝の右手が摩耶の美しい脚に伸びていく。

「俺のベッドを占領しやがって。」

碧輝はベッドに置かれていた毛布を手にとると、摩耶の脚や腹部が隠れるように毛布をかけてあげた。

碧輝は、摩耶の寝顔をじっと見つめた。碧輝の視点は次第に摩耶の唇に移って

く。

「お前なんか女のお持ちが分かってたまるかよ！」

ダム湖での摩耶の言葉が、碧輝の脳裏を駆け抜けた。

摩耶が俺にキスをしたのは、深海棲艦を油断させるため。だけじゃなかったのか

？

碧輝は摩耶を見つめながら考えた。しかし、すぐに頭を振って考えるのをやめ

た。

「女の子のお持ちなんて、考えてわかるもんじゃやない。とくに好きな人のお持ちなんて

。」

つい考えていたことを口にしてしまった碧輝だったが、自分が出した言葉に驚い

てしまった。

俺は、摩耶のことが好きなのか？

「ちようかーい、どこにいるんだよー」

碧輝が自分の本心を探っていると、突然、摩耶が言葉を発した。しかし、摩耶は

眠っている。どうやら寝言のようだ。

「ちようかい？

ああ、重巡『鳥海』のことか。」

碧輝は呟いた。そのとき、碧輝の頭に閃くものがあった。

碧輝はローテーブルに向かって座ると、ノートパソコンを開いた。そして、ゲーム『艦隊これくしょん』にログインした。画面には、大勢の艦娘の名前が並んでいる。碧輝は、艦娘たちの名前をスクロールさせていくと、『鳥海改二』のところで止めた。

「鳥海。摩耶の姉妹艦だ」

碧輝は、鳥海改二の画像をじっと見つめた。

「試しにやってみるか？　でも練度が66だし、改装設計図まで使って改二に改造

した艦娘だからな。」

碧輝はパソコンの画面を見つめながら眉をひそめた。その後、碧輝は、しばらく唸っていたが、決意したように大きく頷いた。

碧輝は『艦隊これくしょん』のゲーム画面の中で、鳥海改二を解体した。鳥海改二は、碧輝の艦娘リストから消え去った。その直後、碧輝は、室内で何か異変が起こるかと思いい、自分の部屋を見渡した。しかし、何も変化は無かった。

碧輝は立ち上がるとトイレへ行った。トイレから戻ってみると、部屋にはベッドで寝息をたてている摩耶しかいない。碧輝は、うつむきながら、ため息をついた。

「やっぱり無理か。摩耶のように、鳥海を解体したら俺の部屋に現れると思っただけだな」

碧輝は、再び、ノートパソコンの前に座った。

「せっかく改二まで育てた鳥海を無駄になくしてしまつた」

碧輝は、残念な思いで大きなため息をついた。

「そろそろ寝るか。明日は朝からバイトだからな」

碧輝は、ベッドで眠っている摩耶を見つめた。

摩耶の寝顔、可愛いな。こんな可愛い顔してるのに、なんで男みたいな性格してるんだろ？

それさえなきや、金剛ちゃん以上なのに。

碧輝は、そう思いながら天井の照明を消した。薄暗い部屋の中、フロアリングの上に横たわつた碧輝は、ため息をつきながら目を閉じた。

1時間が過ぎた頃、薄暗い部屋の中で碧輝は上半身を起こした。

「摩耶がくれたブラックコーヒーを飲んだせいで眠れないじゃねーかよ」

碧輝は小さく呟いた。隣のベッドからは、摩耶の寝息が聞こえてくる。

「でも、頑張つて眠らないと！ 日曜日のオープンからレジやらなきやいけないからな」

碧輝は小さく呟くと、再び、フロアリングの上で横たわつて目を閉じた。しかし、眠ろう、とすればするほど眠れない。しかも、摩耶とのキスシーンが碧輝の脳裏に何度もちらついてくる。

さらに、1時間が過ぎて、ようやく碧輝も寝息をたて始めた。そのときだった。突然、碧輝はお腹を踏まれて飛び起きた。暗闇の中で何かが動いている。碧輝は、すぐに立ち上がると、天井の照明を灯した。すると、玄関で、摩耶が屈んでブーツを履いている後ろ姿が目に入った。

「摩耶、こんな時間に何をしてるんだよ？」

碧輝が摩耶の背後から声をかけた。すると、摩耶が振り返って碧輝を険しい表情で見つめた。

「鳥海が、あたしに助けを求めてるんだ！」

摩耶は語気を強めて答えると、勢いよく立ち上がったのだった。

(つづく)

第27話 人を殺めた艦娘

「鳥海だつて？ どうして、鳥海が助けを求めてる、つて分かるんだ？」

心当たりがある碧輝は、微かな期待を抱きながら摩耶に尋ねた。

「そんなこと、どうでもいい！」

摩耶はイライラした様子で言い放つと、玄関のドアを勢いよく開けて通路に飛び出していった。

「摩耶！ 待てよ！」

碧輝は靴を履いて摩耶を追いかけようとしたが、エアガンを取りに戻ってから、通路に飛び出した。そのときには、摩耶の姿はすでになかった。

碧輝は早歩きでエレベーターへ向かった。エレベーターのカゴは1階に向けて降下中だった。

「明日の朝はバイトへ行かなきゃいけないのに、まったく、摩耶ときたら……」

その後、ようやくエレベーターで1階まで降りた碧輝だったが、エントランスや駐車場に摩耶の姿はなかった。

「摩耶、どこへ行っちゃったんだ」

碧輝は、深夜の人気（ひとけ）が無い駐車場で、ひとり途方に暮れた。

「鳥海が、あたしに助けを求めているんだ！」

先ほどの玄関で、アンテナ型のカチューシャを装着した摩耶が叫んだ言葉を思い返した。そのとき、碧輝の脳裏に閃くものがあった。

「そうか！　　そういうことか！」

碧輝は駆け出した。愛車である黒いプリウスまでやって来ると、素早くドアを開けて運転席に座り込んだ。

「鳥海が、こっちの世界に現れていたんだ！」

碧輝はクルマを発進させながら嬉しげに声をあげた。しかし、すぐに碧輝の笑みが消えた。

でも、どうして鳥海が摩耶に助けを求めているんだ？

まさか、深海棲艦に

襲われたのか？

碧輝は、鳥海の身を案じて不安になった。自然とアクセルを踏み込む力が強くなる。

いま碧輝がクルマを走らせている一帯は、マンションやアパートが立ち並ぶ住宅街だった。治安は、悪くはない。

もし本当に鳥海が、こちらの世界に現れているのなら、戸惑っているに違いない。

「いったい、鳥海は、どこにいるんだ。」

碧輝は、人影を見つけると、減速しながらヘッドライトの灯りで艦娘でないかを確認した。しかし、こんな深夜に歩いている人といえば、飲み屋帰りのサラリーマンか、深夜のウォーキングをしている人くらいだった。

「鳥海のこと心配だけど、摩耶のことも、もっと心配だ。」
運転しながら碧輝は呟いた。

15分ほど、近所をくまなく探したけれど、鳥海や摩耶を見つけることができなかった。碧輝は、クルマを路肩に停車させると、大きなあくびをした。

「眠くなってきた。コーヒーでも買ってこよう」

碧輝は、近所のコンビニへ向かった。

コンビニで冷たい缶コーヒーを買った碧輝は、駐車場で満月を見上げた。そして、前髪をかきあげると、疲労のため息をついた。

「いったん帰るか。もしかしたら、摩耶が鳥海を見つけて連れ帰っているかもしれない」

すぐに黒いプリウスに乗り込むと、ゆっくり発進させる。カーナビの時間を見ると、午前2時を過ぎていた。

「もう、こんな時間かよ」

碧輝は、運転しながらあくびをした。

数分、クルマを走らせると、十字路のあたりでヘッドライトに照らされた何かの視界に入ってきた。

碧輝は、すぐに減速すると、その何かを注意深く見つめた。

それは人だった。中年らしき男が路上に倒れていた。

碧輝は、クルマのハザードランプを点滅させながら路肩に停車させると、倒れている中年の男に駆け寄った。中年の男は半袖、短パン姿だ。

「大丈夫ですか？」

碧輝が身を屈めて中年の男の身体を揺さぶる。反応は無い。すると、しくしくと、女の子がすすり泣く声が聞こえてきた。碧輝が泣き声をする方に顔を向けると、数メートル先の闇の中で、うずくまる人影が見えた。すぐに立ち上がって、女の子らしき人影に近づいた。

「どうかしたんですか？」

碧輝が、女の子らしき人影に声をかけると、人影がこちらに顔を向けた。それは、碧輝より幾らか年下の、20歳くらいの女の子だった。しかも、ノースリーブの服にミニスカ姿だ。長い髪には、摩耶と同じアンテナ型のカチューシャを装着している。

「あー！ 君は、もしかして、鳥海か？」

碧輝が驚いて声をあげると、その女の子も驚いてすすり泣くのをやめた。

「え？　　どうして、私の名前をご存知なんですか？」

鳥海が鼻をすすりながら小さな声で答えると、碧輝は満面の笑みを浮かべた。

「摩耶と一緒に君のことを探していたんだ」

「え！　　摩耶と？」

鳥海は立ち上がると、手の甲で涙を拭ってから銀色のフレームが付いた眼鏡をか
けた。そして、辺りを見渡した。

「摩耶は、どこにいるんですか？」

「分からない。鳥海を探しに行ったきり、どこへ行ったのか分からないんだ。それより、
どうしてこんなところで泣いていたの？」

碧輝は、倒れている中年の男を一瞥しながら鳥海に尋ねた。

「私、人を殺めてしまったんです」

鳥海は、そう答えると、眼鏡を外して指先で涙を拭ったのだった。

(つづく)

第28話 軽装重巡艦娘・鳥海

鳥海からの思わぬ言葉に、碧輝は「え！」と声を出して驚いた。

「まさか、そこで倒れている人を鳥海が殺してしまったの？」

「はい」

鳥海は、うつむいて鼻をすすりながら小さく答えた。碧輝は、路上で倒れている中年の男を、信じられない、という思いで見つめた。

鳥海の性格は、ゲームの中のセリフを聞く限り、礼儀正しくて、おとなしい、真面目なキャラのはず！ そんな鳥海が、殺人だなんてありえない！

碧輝は鳥海に顔を戻した。

「鳥海、何があつたのか説明してくれるかい？」

「はい」

鳥海は小さな声で返事をする、殺人に至った経緯を説明した。

鳥海は「解体」されたあと「舞台」から降りてトンネルを歩いていたら、いつの間にか、知らない街に入り込んでしまった、という。それで深夜の街を歩いていたら、おじさんに声をかけられ、胸を触られたので、思わず連装砲で殴ってしまった。そ

うしたら、おじさんは動かなくなった、ということだった。

鳥海からの説明を聞き終えた碧輝は、路上に倒れている中年の男を呆れながら見つめた。

「何だよ。コイツ、痴漢かよ」

碧輝は、中年の男に近づくと、再び屈んで身体を揺さぶった。

「おい、おっさん、起きろよ!」

碧輝が中年の男の左手首から脈を取ると、ピクンピクンと問題なく動いている。

「おっさん、生きてるんだろ? 起きないと警察を呼ぶぞ?」

碧輝が中年の男の耳元で声を張ると、突然、目を見開いて頭を上げた。

「おっさん、そこにいる女の子に痴漢したそうだな。早くここを立ち去らないと警察を呼ぶよ!」

碧輝がニヤリとした笑みを浮かべた。すると、中年の男の顔が引きつった。

「死んだフリして、女の子が近づいたら抱きつくつもりだったんだろ!」

碧輝が問い詰めると、中年の男の顔がさらに強ばった。

「ゆ、許してくれ。でも、あの子に殴られて気を失っていたのは本当なんだ」

中年の男が早口で答えると、碧輝は自分のスマホをポケットから取り出した。

「今夜起きたことは忘れるんだ。もし、今夜のことを誰かに話したら、警察に被害届を出

すからな」

「分かった。言う通りにする！」

ところで君は、あの子とどういう関係なんだ？」

「俺か？ あの子の、カレシだ」

碧輝は嘘をついた。とにかく、ゲーム世界から現れた鳥海に殴られた中年の男には、早くこの場から去ってもらいたかった。

中年の男は、ゆっくりと立ち上がった。中年の男の頭や顔に傷がないことが分かったので、碧輝は安心した。

鳥海に殴られて本当に死なれては、非常にややこしいことになるからだった。中年の男は、碧輝と鳥海に深々と頭を下げると、逃げるように去っていった。

「あの方、死なれてはいなかったのですね。安心いたしました」

鳥海が碧輝に近づきながら礼を述べた。そのとき、ヘッドライトに照らされた鳥海の全身をはつきりと見ることができた。

鳥海は、摩耶と同じようなセーラー服を模したノースリーブのジャケットに身を包み、スリットが入った白いミニスカートを履いている。摩耶と同じアンテナ型のカチューシャを装着し、首からはペンダントをぶら下げている。よく見ると、そのペンダントの先には、22号対水上電探のような、小さな双眼鏡に似たものが付いていた。

碧輝は、そんな鳥海の武装に違和感を覚えた。

2連装砲などを幾つか装備した『鳥海改二』の状態で「解体」したわりには、かなり軽武装だ。2連装砲が1基しか装備されていないし、対空機銃や高角砲が見当たらない。

碧輝が鳥海の艤装品を観察していると、彼女は照れたような笑みを浮かべた。

「そんなに見つめられると、私、恥ずかしいです」

鳥海の声に気がついた碧輝は我に返った。

「あ、ごめん。鳥海、ひとつ聞いていい？」

「はい、何でもしよう」

「解体されるまで装備していた武器は、どうしたの？」

「艦娘が解体されるときは武装解除されるよう司令官さんがお決めになっていますが、この2連装砲だけ特別に頂いてまいりました」

碧輝は鳥海の返答を耳にしながら、さすが摩耶の話し方と違って品がある、と感じた。

「そっか、分かったよ。突然、解体しちゃって、ごめんね」

碧輝が申し訳なさそうに謝ると、鳥海は何かに気づいたように驚いた表情を見せた。

「は！　もしかして、あなたが司令官さんでございますか？」

「そ、そうです。近衛碧輝と言います」

碧輝は照れ笑いを浮かべながら、鳥海に敬礼して見せた。すると、鳥海の様子がぱっと明るくなった。

「あなたが司令官さんなんですね！」

「お会いできて光栄でございます！」

「こちらこそ、会えて嬉しいよ」

碧輝は笑顔で鳥海に挨拶をしたものの、内心では焦っていた。夜が明けたらパイトに行かなければいけない。それまでに、摩耶を見つけ出して連れて帰らないといけない。

「鳥海、さつそくだけど、摩耶を探さないといけないんだ。今からクルマに乗ってもらってもいい？」

「はい、かしこまりました！」

碧輝と鳥海は路肩に停車中の黒いプリウスに向かった。碧輝が運転席に座ると、鳥海は物珍しそうに黒いプリウスを見ながら、ゆつくりと助手席に座った。

碧輝は、鳥海が助手席に座ると、彼女にシートベルトを着けてあげた。そのとき、ちらりと鳥海の胸を見た。

姉妹だけあって、2人とも胸が大きいな。

碧輝が素直にそう思ったとき、鳥海からの視線を感じて彼女の顔に視線を移し

た。すると、鳥海が恥ずかしそうな笑みを浮かべながら、碧輝の顔を熱い眼差しで見つめていたのだった。

(つづく)

第29話 鳥海 of 眼鏡が光るとき

運転席の碧輝は、助手席に座る鳥海と目が合った。鳥海 of 黒目が眼鏡を通して大きく見える。鳥海は、はにかみながらも碧輝をじつと見つめている。

「ちよ、鳥海。俺の顔に何か付いてるのかな？」

鳥海に熱い眼差しを注がれた碧輝は、どうしたら良いか分からず、動揺しながら目を伏せた。

「司令官さん」

「はい」

「さつき、男の人に、私との関係を尋ねられたとき」

「うん」

「私のごとを、カノジヨ、と言っていましたよね？」

「そう。だったかな？」

「はい。私、ちゃんと聞いていました」

「そうなんだ」

「その、カノジヨって、どういう意味なんですか？」

「あ、あれは、咄嗟に言った言葉だから気にしないで」

まずいことになった、と碧輝は思った。

こちらの世界では『カノジヨ』は『恋人』の代名詞のような言葉だ。このまま正直に答えたら、鳥海に誤解を与えかねない。

碧輝は、嘘をつくことにした。

「カノジヨ、というのは、女友達っていう意味だよ」

碧輝は、そう答えながら作り笑いを浮かべた。そのときだった。鳥海の眼鏡が一瞬、キラリと光った。

「それは違いますね。今の司令官さんの態度から分析すると、ウソをついていると、お見受けいたしました」

鳥海は右手の人差し指で眼鏡の縁を少し浮かせるような仕草をすると、落ち着いた口調で言い放った。

ウソを見破られた碧輝は、動揺しながら鳥海の顔を見つめた。鳥海は微笑んでいるが、眼鏡の向こうにある瞳は、笑っていない。

碧輝は、鳥海が艦娘たちの中でもかなり頭が良い存在なのだ、ということをおぼろしく思った。

「司令官さん、もう一度、お尋ねいたします。カノジヨ、の本当の意味は何でしょうか？」

鳥海に問ひ詰められた碧輝は、観念した。鳥海にウソは通用しない。

「本当の意味は、カノジョの意味は。」

「意味は？」

「恋人です」

碧輝が白状した次の瞬間、鳥海が運転席に向かって両腕を伸ばした。殴られる、と思った碧輝は、強く目を閉じた。

その直後、鳥海は碧輝の背中に手を回すようにして抱きしめた。

「司令官さん、私、とても嬉しいです！」

鳥海から意外な言葉を耳にした碧輝は、驚いて目を見開いた。

「え？」

「私、ずっとずっと司令官さんに憧れていたんです！ だから、私のことを恋人だと

言ってくれたこと、すごく嬉しいのです！」

鳥海は、さらに強く碧輝を抱きしめた。思ったより、鳥海も摩耶と同じくらい力が強い。

そのとき、碧輝の脳裏に、摩耶とのキスシーン、が甦った。

「摩耶」

思わず摩耶の名前を口にする碧輝。すると、すぐに鳥海が碧輝から身体を離して

車外を見渡した。

「摩耶がいたんですか？」

「いや、そろそろ摩耶を探しに行こうか、と思つて」

碧輝が慌てて答えた。そんな碧輝を、じつと見つめる鳥海。

しばらく、碧輝を真顔で見つめていた鳥海だったが、突然、微笑んだ。

「そうですね！　摩耶を探しましょう！」

鳥海は、明るい笑顔で頷くと、目を閉じた。碧輝は、またウソを見破られて鳥海に問い詰められる、と覚悟していたので安堵した。

「よし、じゃあ、クルマを発進させるよ」

「司令官さん、少々お待ちを！」

碧輝がエンジンスタートボタンを押した直後、鳥海がクルマの発進を制した。

「どうかしたの？」

碧輝が助手席の鳥海に目をやると、彼女は首にぶら下げているペンダントを右手で握っていた。

「いま、私の水上電探で探しています」

「そっか、その手があつたか！」

鳥海は水上電探のペンダントを胸の前で握りしめながら目を閉じている。きつ

と集中しているのだろう、碧輝は鳥海の邪魔をしないように、期待しながら結果を待った。

1分ほど過ぎてから、鳥海が目を開いた。

「鳥海、どうだった？」

「司令官さん、申し訳ありません。周辺に障害物がたくさんありすぎて、うまく探せませんでした」

鳥海は碧輝を見つめながら、残念そうに頭を振った。

「仕方ないよ。ここは住宅街だし、周辺にはマンションが多いからね。電探がうまく働かなくても仕方ないよ」

「司令官さんは、やっぱり、お優しいのですね」

鳥海は、碧輝に向かって微笑んだ。碧輝は、鳥海に向かって笑みを浮かべた。しかし、心の中では、摩耶のことが心配でならなかった。

摩耶、心配かけんなよ。

碧輝は、心の中でそう呟きながら、ゆっくりとアクセルを踏んだのだった。

(つづく)

第30話 摩耶さま、警察に捕まる

深夜の街をあてもなく走り回る黒いプリウス。碧輝が運転する黒いプリウスは、助手席に鳥海を乗せながら行方不明の摩耶を探していた。

「鳥海、摩耶から無線が入っていない？」

碧輝は運転しながら鳥海に尋ねた。

「入っていますよ」

鳥海の返答を耳にした碧輝は、ブレーキをかけてクルマを停止させた。

「摩耶は、どこにいるって？」

碧輝は、助手席に身を乗り出すような勢いで鳥海に尋ねた。すると、一瞬、間があつてから鳥海が微笑んだ。

「それが、いま、交番にいるそうです」

「交番だつて？ 摩耶、警察に捕まったの？」

鳥海が黙り込んだ。どうやら、摩耶と無線通信で会話しているらしい。まるでテレパシーだ、と碧輝は感心した。

「司令官さん、事情が分かりました。摩耶は、歩いていたら警察に捕まったそうです」

「深夜に、あんな露出度が高い服装して独りで歩いていれば、警察だって保護するだろな」

碧輝は呆れてため息をついた。一方で、摩耶が無事だったことに安堵した。

「鳥海、摩耶に伝えてほしい。今から迎えに行くから、交番で待っているように、と」

「そ、それが」

「どうしたの？」

「摩耶、たった今、交番から脱走したみたいです」

「あいつ、何をやってるんだよ！ そんなことしたら、警察に疑われるじゃないか

！」

碧輝は、疲労混じりのため息をついた。

「司令官さん」

「今度は何？」

「摩耶、警察に捕まったみたいです」

「そっか、良かった。もう逃げるんじゃないぞ」

碧輝はクルマを発進させると、最寄りの交番へ向かった。

交番まで500メートルの距離まで近づいたときだった。道路の反対車線を誰かが走ってくることに気がついた。さらに、その後方から赤い回転灯を煌めかせたパト

カーが走ってくる。

碧輝は嫌な予感がすると同時に、それはすぐの中した。

碧輝が運転する黒いプリウスが、反対車線を走っている摩耶とすれ違った。摩耶は、ミニスカートを履いていることなどおかまいなしで、全力で疾走している。

碧輝はブレーキをかけると、道路沿いの駐車場を利用して反転した。そして、摩耶を追いかけるパトカーに追いつこうとアクセルを踏み込んだ。

「もう、摩耶は何やってんだよー！」

摩耶に呆れ果てた碧輝は、運転しながら悲鳴のような声をあげた。

「司令官さん。摩耶が、ご迷惑をおかけしまして申し訳ございません」

助手席の鳥海が、運転席の碧輝に向かって深々と頭を下げた。

「まあ、あれが摩耶の性格なんだから仕方ないか。」

碧輝は独り言のように呟くと、微かな笑みを浮かべた。

10分後、碧輝と鳥海、そして、摩耶は交番のテーブル席に座っていた。テーブル席には、2人の警官も座り、摩耶をたしなめている。しかし、摩耶は冷たいお茶を飲んでばかりで、まったく警官の話聞いていないようだった。

「では、あなたが身元引受人ということで、よろしいですね？」

「はい。妹がお騒がせしまして、申し訳ないです」

警官の言葉に対して、碧輝は頭を下げた。

「また碧輝の妹役かよ」

摩耶が呆れたように呟いた。

「摩耶！」

碧輝が摩耶に顔を近づけながら叱りつけた。

「じゃあ、摩耶さまは帰るとするか！」

摩耶はイスから立ち上がると、交番を出て行った。すぐに鳥海が摩耶を追うように交番から出ていく。最後に碧輝が2人の警官に頭を下げながら交番を離れた。

黒いプリウスに乗り込んだ碧輝と摩耶、鳥海の3人。

碧輝は運転席に乗り込むなり大きなあくびをした。助手席の摩耶は自分でシートベルトを着けると、運転席であくびをしている碧輝の左肩をポンと叩いた。

「碧輝、どこに行ってたんだよ」

「それは、こっちのセリフだよ」

「まあ、鳥海も見つかつたし、碧輝も無事だし、あたしは満足さー！」

助手席で機嫌よく声をあげる摩耶に対して、碧輝は横目で苦々しそうに見つめ

た。

「もう、摩耶ったら、ちゃんと司令官さんに謝りなさい」

後部座席の鳥海が、摩耶を諭した。しかし、摩耶は、馴れ馴れしく碧輝の左肩を軽く叩きながら笑みを浮かべるだけだった。

こうして、3人が乗る黒いプリウスは、交番を離れて帰途についた。3人が碧輝の部屋に到着した頃、はるか東の空では白み始めていた。

(つづく)

第31話 摩耶と鳥海の怪しい会話

東の空が微かに白み始めた頃、碧輝は、摩耶と鳥海を連れて帰宅した。鳥海にとっては、初めての碧輝の部屋だ。

「なんて、狭い部屋。」

「そうだろ？　あたしたちの提督は、こんな狭い部屋で暮らしていたんだぜ！」

鳥海はワンルームの部屋に入るなり、思わず呟いた。それを摩耶が笑いながら応じた。

碧輝は黙っていた。もう眠気が限界だった。それなのに、あと3時間も眠れるほどの時間がない。朝7時には起きて、バイトへ行かなければいけないからだ。

碧輝はスマホを手にとると、アラームを設定した。そして、鳥海に顔を向けた。

「鳥海、頼みがあるんだけど」

「はい、司令官さん！　何でしょうか？」

「7時にアラームが鳴っても俺が目覚まさないければ、起こしてほしい」

「はい、かしこまりました！」

鳥海は元気な声で答えると、碧輝に向かって敬礼をした。碧輝は、スマホをロー

テーブルの上に置くとベッドに倒れ込んだ。

ベッドで眠りに落ちていく碧輝。その耳に、摩耶と鳥海の会話がうつすらと届いてくる。

「摩耶、舞台から消えたと思ったたら、こんなところにいたのね。私、探したんだから」「あー、そうなんだよ。あたしが、こっちに来たのは提督、碧輝のせいなんだよな」

「司令官さんが原因って、どういうことなの？」

「碧輝が、あたしを解体して舞台から降ろしちまったんだよ。そうしたらさ、変なトンネルが現れて、こっちの世界に來ちまったんだよ。そういう鳥海も解体されたのか？」

「うん。突然、解体の指令を受けて舞台を降りたら、急に目の前が真っ暗になってしまったの。でも、すぐに出口を見つけたわ。だけど、気がついたら、私たちの世界とは違う世界にいたの」

「そっかー。なあ、鳥海。その暗闇の中に深海棲艦は、いたか？」

「見てないわ。でも、どうして私は解体されたのかしら？ 司令官さんの命令にはしっかり従って頑張ってきたのに。」

眠りに落ちていく碧輝の耳に届く摩耶と鳥海の会話が、途切れ途切れになっ

ていく。「司令官さん、ずいぶん、たくさん寝るのね。そんなに」

「見ろよ、鳥海。これ、スマホって言うんだぜ。」

「あ、摩耶。司令官さんのスマホをそんなにいじったらダメよ。あ、スマホが。」

「真っ暗になっちゃった。高性能な無線通信機のわりには、すぐにダメになるんだな。」

「もう、摩耶ったら！　いつもすぐそうやって壊しちゃうんだから。」

「あー、つまんねえ！　鳥海、あたし、もう寝る。」

すると、ベッドで深い眠りに落ちつつある碧輝は、自分の身体を誰かが押したのを感じた。そのとき、何か尖ったものが碧輝の頭に当たった。碧輝は、それに気づいたものの、完全に目を覚ますことはなかった。

引き続き、碧輝の浅く眠る意識の中に、摩耶と鳥海の断片的な会話が耳に入ってくる。しかし、碧輝が2人の会話に反応することはない。

「摩耶、アンテナのカチューシャを外さないよ。」

「あれ？　鳥海も眠るのか？　碧輝を起こす命令を受けてたんだろ？」

「夜7時よ。それまで、まだまだ時間があるから、私も寝るわ。」

「じゃあ、鳥海も一緒に寝ようぜ！　あたしたちで碧輝を挟むようにして寝てやろ。」

「う。」

「うふふ、いいわね。それじゃあ、私は司令官さんをまたいで、摩耶の反対側へ行くわね。」

「あっ！」

そのときだった。碧輝は顔面を強く踏まれて、そのまま気を失った。

どれだけ眠っただろう、突然、碧輝は上半身を勢いよく起こした。室内が明るく、蒸し暑い。ふと、ベッドを見ると、碧輝の左右には摩耶と鳥海が寝息をたてて横たわっている。

碧輝は慌ててベッドから離れると、ローテーブルに置いてあるスマホを手にとった。スマホの画面は、真っ暗だった。

碧輝が飛び起きた振動で、摩耶が目を覚ました。

「おはよ、碧輝。」

摩耶は、アンテナ型のカチューシャを外しながら低い声で呟いた。

「うわ！　なんでスマホの電源が落ちてるんだ！　いま、何時だよ！」

ひとりパニックに陥っている碧輝。

「壁の時計は3時になってるぜ。」

摩耶は、白い壁に掛けられている丸いデジタル時計を指さすと、大きなあくびをした。

「3時だって?！」

碧輝は叫びながら白い壁時計に顔を向けた。碧輝の全身が硬直した。

「おはようございます。司令官さん。」

眼鏡をかけていない鳥海が、挨拶をしながらゆつくりと上半身を起こした。鳥海が目覚めたことに気づいた碧輝は、ゆつくりと彼女に顔を向けた。

「鳥海、なんで、起こしてくれなかったの？」

鳥海は寝ぼけ眼で碧輝を見つめたが、眼鏡をかけていないため目の焦点が合わず、目をぱちぱちとさせている。

「俺、7時に起こしてくれって言ったじゃん！」

碧輝の言葉に、鳥海は慌ててベッド脇の小さな台に置いてあった眼鏡を手にした。

「司令官さん、まだ3時ですよ？」

鳥海は眼鏡をかけると、壁時計を見ながら答えた。

「いや、俺、朝の7時に起こしてほしかったんだけど。」

碧輝の言葉を耳にした鳥海は、血の気が引いたような真つ青な顔になった。

「司令官さん！ 申し訳ございません！」

鳥海はベッドの上で土下座して謝罪した。その隣りでは、摩耶が再び寝息をたてていた。

(
つ
つ
く
)

第32話 笑う摩耶と泣く鳥海

碧輝は、バイト先のバーガーショップを無断欠勤したことになってしまった。しかも、日曜日の忙しい日のレジ担当としての業務を放棄した、とみなされてしまったのだ。

摩耶が壊したとされていたスマホは、単に、電源がオフになっていただけだった。碧輝は、スマホの電源が入るとすぐにバイト先であるバーガーショップへ電話を入れた。もちろん、無断欠勤の理由を「艦娘のせいです」なんてことは言えない。

いつもは優しい女性店長である湯本からは、厳しく叱られた。さらに、ペナルティとして、しばらくシフトから外されてしまったのだった。

「おい、提督のくせに怒られてるぜ」

碧輝が冷や汗をかきながら電話で話している様子を見ていた摩耶は、笑みを浮かべながら鳥海を横目で見つめた。碧輝が寝坊した責任を感じていた鳥海は、ただ黙ってうつむいている。

碧輝は、スマホの画面をタップして通話を終了すると、頭を垂れながらため息をついた。

「明日から、どうすればいいんだ。」

碧輝は弱々しく呟いた。そんな碧輝を見ていた鳥海は、再び、土下座した。

「司令官さん、本当に申し訳ございません！ この過ちは、戦果をあげることで償います！」

鳥海からの謝罪の言葉を耳にした碧輝は、戦果よりお金だよ、と思いながら頭を振った。

「なあ、碧輝。鳥海もこれだけ謝ってんだからさー、許してあげなよ」

「今回の件は摩耶にも責任あるんだぞ！ 俺が寝ているときにスマホの電源を落と

しやがって！ そのせいで、アラームも店からの電話も俺に届かなかったじゃないか！」

摩耶の言葉に対して、碧輝は食ってかかった。

「そうなのかい。それは悪かったな」

「他人事みたいに謝るんじゃないよ！」

「何だと？ さつきから聞いてりや、言いたいこと喚きやがって！」

今度は、摩耶が碧輝に食ってかかる。摩耶と碧輝は、お互いの鼻先が触れ合うほど顔を近づけながら睨み合った。そんな2人を見ていた鳥海は涙をこぼした。

「もう争うのはやめてください。いま必要なのは、私たちが団結することなんですよ」

鳥海の涙ながらの言葉に、碧輝と摩耶は首を傾げた。

「鳥海、あたしたちは団結してるぜ！」

「そ、そうだよ。摩耶とは喧嘩はするけど、何とか上手くやってる」

碧輝と摩耶は、鳥海を慰めるように優しく声をかけた。

「とてもじゃないけど、団結しているようには見えないわ」

鳥海が右手の甲で涙を拭った。

「そんなことないさ！ 碧輝とはキスもしてるし、あたしたち、仲が良いいんだぜ！」

「キス!？」

摩耶の言葉を耳にした鳥海が驚きながら叫んで目を丸くした。鳥海は、目を見開きながら、摩耶と碧輝を交互に見つめている。

「司令官さん、摩耶とキスしたって本当なんですか？」

鳥海が碧輝に顔を近づけながら問い詰めた。

「あ、それは、その、違うんだ。どうやって説明すればいいのか。摩耶、説明してやってくれよ」

碧輝はピンとはねた寝癖に手をやりながら摩耶に視線を送った。摩耶は笑顔で頷いた。

「あたしと碧輝は、強く抱き合ってキスをしたんだぜ！」

星が綺麗な夜だったな—

！ 2人きりの湖でさー！」

摩耶に説明を求めた碧輝は、期待を裏切られて唾然となった。

「ち、違うだろ、摩耶！ 誰がロマンティックにキスしたようなことを説明しろ、と言ったかよ！ どうして、作戦のため。」

「うえーん！」

碧輝が摩耶に抗議していると、鳥海が声をあげて泣き出した。

「ああ？ 碧輝、あたしとキスをしていない、と言いつ張るのか？」

摩耶の表情が険しくなった。摩耶を怒らせるとまた面倒なことになる。

「まあ、確かに、摩耶とはキスをしたんだけど。」

碧輝がそう答えると、鳥海はさらに大きな声で泣いた。

「碧輝は、自分の髪を両手でくしゃくしゃにすると、ローテーブルに顔を突っ伏し

た。

なんかもう、めっちゃくちゃ。」

碧輝はそう思い、途方に暮れたのだった。

(つづく)

第33話 提督の決意!

日曜日の夜、碧輝は、摩耶と鳥海を連れて近所のファミレス『エフエスエス』で食事をした。

摩耶は、昨日、シヨップピングモールで購入した蒼い薄手の長袖の服とベージューのシヨートパンツを身につけている。

一方の鳥海は、ノースリーブの制服にミニスカート、といったゲーム世界の艦娘そのままの服装では目立つので、碧輝から借りた蒼いジーンズと白いTシャツを身につけていた。当然、それらは鳥海の身体と比べるとサイズが大きい。

摩耶、鳥海の2人の姉妹は、艀装品さえ外していれば、外見的にはどこにでもいる普通の女の子と何ら変わりはなかった。

3人はテーブルを囲んで黙々と食事をしている。

ファミレスは、ドリンクバーやサラダバーのシステムになっているため、それを良いことに、摩耶と鳥海は何度もドリンクやサラダをテーブルに運んできた。

最初は機嫌が悪そうに黙り込んでいた鳥海だったけれど、お腹が満たされると笑顔を見せるようになった。

「こつちの世界の食べ物美味しいですね」

数時間ぶりに見せた鳥海の笑顔を見て、碧輝は安堵した。

「だろー？　ハンバーガーって食い物も美味いんだぜー！」

「はんばーがー？　何それ？」

摩耶が上機嫌で鳥海にハンバーガーについて説明している。

そんな2人を黙って見つめていた碧輝は、突然、力強く頷いた。

「よし！　俺は決めたぞ！」

突然、右手で拳をつくって力強く頷いた碧輝。そんな碧輝に気づいた2人の会話が止まった。

「碧輝、何を決めたんだ？」

摩耶が尋ねると、碧輝は2人を交互に見つめた。

「俺は、こつちの世界に流出してきた深海棲艦を掃討しようと思う！　もし、あいつ

らを放っておけば、無関係な人たちが犠牲になるかもしれない。だから、こちらから深海棲艦を探し出して撃滅したい！　摩耶、鳥海、俺に力を貸してほしい！」

碧輝による突然の決意表明に、摩耶と鳥海は顔を見合わせた。碧輝は、2人から大きな賛同が得られると期待していたが、予想外の言葉が返ってきた。

「そんなの、当たり前じゃないか」

「私たち艦娘は、戦うために存在しているのですよ」

摩耶と鳥海は表情を変えることなく答えた。

「じゃあ、2人は俺と一緒に戦ってくれるんだな?」

すると、摩耶は不思議そうな表情を浮かべながら首を傾げた。

「碧輝、今さら何を言ってるんだ? あたしたち艦娘は、ずっと前からお前と一緒に

戦ってきただろ?」

「ずっと前って、ゲームの中での話か?」

「ゲームかどうかは知らない。だけど、あたしたちの世界では、碧輝という提督の指揮でずっと動いていたんだ。それは、今でも変わらないぜ」

摩耶は、そこまで話すと、碧輝にウインクしてみせた。

「摩耶の言う通りです。私たち艦娘は、司令官さんの指揮のもと、一致団結して深海棲艦と戦ってきたんです! これからも、どんな世界であっても、私たちは司令官さんと共に戦い続ける運命なのです!」

鳥海が真剣な眼差しを碧輝に向けながら言った。

摩耶と鳥海の想いを受け取った碧輝は、感動して思わず胸が震えた。

「摩耶、鳥海、ありがとう!」

碧輝は、向かい合って座っている摩耶と鳥海に頭を下げた。

「司令官さんが、こちらの世界に私を呼んだのは、そのためだったのですね！」

鳥海の言葉に、碧輝は頷いた。

「摩耶が鳥海を必要としていたからね」

「それだけの理由ですか？」

鳥海が寂しげに尋ねた。

「も、もちろん、俺も必要としていたからだよ。鳥海には優秀な頭脳がある。だから、参謀役になってほしかったんだ」

碧輝の返答を耳にした鳥海は、満面の笑みを浮かべた。

「わあ、司令官さん、ありがとうございます！　鳥海、嬉しいですよ！」

鳥海が満面の笑みを浮かべている一方で、摩耶は不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「チツ！　鳥海だけ特別扱いか！　まあ、でも、確かに鳥海は頭が良いから

な。それはあたしも認めるけどさー」

摩耶はテーブルに頬杖をつけて碧輝から視線を逸らしながら言った。

「摩耶には、俺の直属護衛艦として、いつも傍にいてほしい」

碧輝が真顔で摩耶にそう伝えた。摩耶は、一瞬、驚いたような表情を浮かべたあと、ニヤけた笑みを浮かべながら目を伏せた。

「まあ、碧輝がそこまで言うんなら、この摩耶さまが直属護衛艦としていつも傍にいてあげてもいいぞ。」

「ああ、摩耶、よろしく頼む！」

「おう！　重巡摩耶さまの力、見せてやるぜー！」

摩耶が明るく威勢の良い声をあげると同時に、彼女の腕がテーブル上のグラスに当たって倒れた。倒れたグラスからコーラが海のようにテーブルに広がっていく。そんなコーラの海を、鳥海は寂しげな面持ちで見つめていたのだった。

(つづく)

第34話 作戦会議からの深夜の偵察

ファミレスから帰宅した碧輝と摩耶、鳥海の3人は、碧輝の部屋に置かれたローテーブルを囲んで作戦会議を始めた。

冷房が適度に効いた室内、ローテーブルの上には3つのコップが置いてあり、そのうちの1つにはストローがささっている。コップの中で氷がひとつ、カランと小さな音をたてた。

「摩耶、どれだけの深海棲艦が、こちらの世界に流出してきたか見当つかないか？」

碧輝が真剣な顔つきで尋ねた。

「んー、真っ暗だったし、あたしも深海棲艦たちの追撃をかわすので必死だったからなー。少なくとも航空母艦は、いたはずだ。艦載機の攻撃を受けたからなー」

摩耶が答えると、鳥海がローテーブルに置かれた手のひらサイズのメモ帳に『空母？ 1』とボールペンで書き記した。

碧輝は、鳥海が書き記したメモ帳を一瞥すると考え込んだ。

「あたしが、ダム湖で軽巡を2体始末したから少しは減ってるんだろうけど、そもそも、どれだけの深海棲艦が流出してるか分からないからなー」

摩耶は、そう言いながら両手を頭の後ろで組むと、鳥海に発言を促すように顔を向けた。ウーロン茶をストローで飲んでいる鳥海が摩耶の視線に気づく。

「私が、こちらの世界に抜けるとき、深海棲艦の姿はなかったわ」

鳥海が答えると、碧輝は唸った。

「とりあえずさー、またダム湖に行ってみないかー?」

「私もそう思います。司令官さんたちが深海棲艦に遭遇したダム湖を偵察してみたほうが良いと思います」

摩耶が提案すると、鳥海が賛成した。2人の提案を受けた碧輝は、頷いた。

「よし、夜が明けたらダム湖に行こう!」

「夜が明けたら? 碧輝、お前、ダム湖が心霊スポットだから恐いんだろ?」

「そ、そんなわけないだろ。夕食を終えたばかりだから、ちよつとくつろぎたいだけだ」

摩耶がニヤニヤしながら指摘すると、碧輝は反論した。

「摩耶、食後にくつろぐことは悪いことじゃないわ。司令官さんのために30分だけ待つてあげましょう」

鳥海が摩耶を論じた。碧輝は、目を丸くしながら鳥海を見つめた。

「え、30分だけ?」

「嫌ならいいぜ。あたしと鳥海でダム湖に行くからさー。もちろん、摩耶さまの運転で

な！」

「摩耶なんかプリウスを運転させたら、それこそ大破させられるよ！」

「何だと？　じゃあ、碧輝、自分で運転しなよー！」

摩耶の言葉に、碧輝は黙り込んだ。

1時間後、碧輝が運転する黒いプリウスはダム湖を目指して夜道を走っていた。助手席には摩耶、後部座席には鳥海が座っている。艦娘の2人は戦闘用の艤装に身を包んでいた。

助手席の摩耶は車外を常に見つめて警戒している。一方の鳥海は、首からぶら下げた小さな水上電探のペンダントを握りしめながら目を閉じていた。

碧輝は、そんな2人の様子を見ながら「さすが、実戦経験のある艦娘だな」と感心せざるを得なかった。

1時間後、黒いプリウスはダム湖の駐車場に到着した。昨夜、摩耶が破壊した自販機は大破したままになっているが、周囲に散乱していた缶は回収されたのか1本も見当たらなかった。

摩耶は、駐車場のアスファルトに足を着けるなり、2連装砲を構えながら周囲を

警戒した。同時に、摩耶の両腕に装着されている高角砲が上空に砲口を向ける。

運転席の碧輝は、後部座席の鳥海に顔を向けた。鳥海は、水上電探のペンダントを握りしめながら目を閉じている。

「鳥海、電探に何か反応はある？」

「まだ何も。湖面に行けば、より遠くを探ることができはるはずだ」

碧輝と鳥海は黒いプリウスから離れると、昨夜、深海棲艦と遭遇した湖岸の遊歩道へ向かった。摩耶もそれに続く。

碧輝は歩きながら摩耶に顔を向けた。

「どうして摩耶は対空電探を持ってきていないんだ？」

確か、改二になったときか

ら、ずっと装備していたよな？」

「ああ？ お前があたしを解体する前に対空電探を外したからだろ」

「あ、そっか、そっか。それは、ごめん」

「つたく、何だよ」

「2人とも静かに！」

突然、碧輝と摩耶の会話に鳥海が割って入った。

「水上電探によると、湖面に動きがあります。私たちに向かって急速に接近中！」

鳥海が小声ながらも語気を強めて報告した。碧輝は、墨のような湖面を見つめ

た。しかし、暗闇で何も見えない。

「こんな深夜にボートを漕いでいる人なんていないはず。まさか、幽霊？」

「碧輝、幽霊なんかじゃない。あれは深海棲艦だ。2体、こちらに向かつてくる！」

艦娘は、ある程度の闇を見通せるらしい。摩耶は、こちらに接近してくる深海棲艦を注視した。鳥海も摩耶が注視している方向に顔を向ける。

「1時の方向に敵艦を確認！ 駆逐イ級2隻！」

鳥海が叫ぶと、碧輝の全身に緊張が走った。

「鳥海は、ここで待つてな。あんな雑魚、この摩耶さまが蹴散らしてくれる！」

摩耶が鳥海に向かって自信に満ちた笑みを浮かべた。鳥海は、黙って頷いた。

湖面への階段を駆け下りた摩耶は、大きく飛び跳ねると、闇夜の湖面に着水した。着水するとすぐに2連装砲を構えながら闇の中に消えていく。

碧輝には、摩耶の姿が見えなかった。しかし、鳥海は、湖面を走る摩耶の姿を目で追いつけるのだった。

(つづく)

第35話 駆逐イ級への尋問

摩耶がダム湖の闇に消えてからしばらくすると、砲撃音が夜の空気を震わせた。数発の砲撃音が聞こえたあと、ダム湖は再び静寂さを取り戻した。

碧輝は、墨のような湖面を凝視した。

「鳥海、摩耶が見える?」

「はい、司令官さん。摩耶がこちらに向かっています」

鳥海は笑みを浮かべながら碧輝に答えた。碧輝は安堵のため息をついた。

やがて、摩耶が闇の中から姿を現した。1メートル近い長さの黒い物体を右腕で抱えている。よく見ると、それは魚雷のような先端に目と剥き出しの歯が付いた深海棲艦、駆逐イ級だった。

「摩耶が駆逐イ級を拿捕したようです」

碧輝は、鳥海からの報告を耳にすると微かな笑みを浮かべた。

「摩耶にとつて、駆逐イ級2隻なんて余裕だろう」

碧輝が独り言のように呟いていると、摩耶が湖面を離れて上陸してきた。

摩耶は、碧輝に近づくと、右腕で抱えていた駆逐イ級をアスファルトの路面に放

り投げた。

「ほらよ！」

駆逐ちゃんだぜ！

大破してるとはいえ、まだ死んではないか

ら気をつけろよ」

摩耶は威勢よく声をあげると、2連装砲の砲口を駆逐イ級の顔面に突きつけた。

碧輝は、大破して顔面がひどく歪んだ駆逐イ級を興味深げに見つめた。

「これが、あのザコキャラの駆逐イ級か。」

そう呟く碧輝に対して、鳥海が近づいた。

「司令官さん、尋問を」

鳥海に促された碧輝が頷いた。

「お前の仲間は、どこにいる？」

碧輝が駆逐イ級に尋問を始めた。すると、駆逐イ級は、歯をガチガチと鳴らし始

めた。

「タスケ、テ、クレ。」

「質問に全て答えたら助けてやるよ」

「ナカ、ナカマ、タクサン、イル」

「どれだけ、いるんだ？」

「ワ、ワカラ、カラナイ。タクサン、イッパイ」

駆逐イ級の言葉を耳にした摩耶と鳥海が顔を見合わせた。

尋問は続く。

「お前たち深海棲艦の出口は、どこだ？」

「デ、デグチ？」

「ゲームの世界からの出口だ」

そのとき、鳥海が碧輝の耳元に顔を寄せた。

「司令官さん、ゲームという言葉は理解できないと思います」

碧輝は、小さく頷いた。

「こちらの世界の、どこに出てきたんだ？」

「アア、ア。」

「どんな場所か言うんだ。」

「ウ、ウエ、オオキ、ダ。」

そのときだった。突然、砲撃音と炸裂音が響くと同時に、碧輝、摩耶、鳥海の3人は吹き飛ばされた。3人はアスファルトの路面に倒れ込む。

摩耶は素早く立ち上がって2連装砲を構えながら周辺を警戒した。

鳥海は上半身を起こすと、眼鏡を外してレンズを確認している。

碧輝は、ヨロヨロと立ち上がると、ジーンズの腰にさしていたエアガンであるバ

レッタを引き抜いて構えた。

「あー！」

そのとき、摩耶が驚いて叫び声をあげた。

「ちつくしよう！」

駆逐イ級を口封じしやがった！

碧輝と鳥海が駆逐イ級に顔を向けた。顔面を真っ二つに裂かれた駆逐イ級は、絶命していた。

ドンツ、ドンツ！

再び、砲撃音が空気を震わせる。

「散開しろっー！」

摩耶が叫ぶ。鳥海は、素早く眼鏡をかけると立ち上がった。そこへ碧輝が鳥海の腕を引っ張って、その場から退避させた。

碧輝の背後で砲弾が着弾すると炸裂音がダム湖に響き渡る。

「司令官さん、2人一緒にいるほうが狙われやすくなります！」

「分かった！」

鳥海の助言を受けて、碧輝は鳥海から離れると、ガードレールの陰に身を隠した。

「電探に反応あり！」

摩耶、3時の方向の森の中よー！」

鳥海が叫ぶと、摩耶はすぐに反応して森に2連装砲を向けた。

「これでも食らえーっ！」

摩耶の2連装砲が火を吹く。鳥海も森に向かって砲撃を始めた。闇夜に響く砲撃音と地響き、その後、樹木が引き裂かれる音が余韻のようにダム湖に響いた。

「摩耶、まだ電探に反応が、きやあつ！」

突然、炸裂音がすると同時に、鳥海が吹き飛ばされた。倒れ込んだ鳥海の周辺に白煙があがる。

「鳥海！」

摩耶が驚きの声をあげて、アスファルトに横たわる鳥海に顔を向けた。

「私は大丈夫。戦闘に集中して！」

鳥海が弱々しい声で答えた。

「森の中から攻撃するなんて、卑怯な奴らめ！」

そう叫ぶ摩耶の至近距離の路面に砲弾が着弾した。よろめく摩耶。

「くっそー！ この摩耶さまを舐めやがって！ ぶっ殺してやる！」

摩耶が2連装砲を構えながら森に向かって駆け出した。

「あ、あの馬鹿！ 姿が見えてない敵に向かって突撃するなんて！」

碧輝は眩くと、ガードレールの陰から立ち上がった。次の瞬間、碧輝もまた森に向かって駆け出したのだった。

(〽 〽 〽)

第36話 湖畔の森での砲撃戦

深海棲艦が潜む森に向かつて2連装砲を発射しながら突撃する摩耶。ガードレールの先に広がる森から砲火が見えるたびに、摩耶の至近距離に砲弾が着弾する。しかし、摩耶は怯まずに突撃していく。

「深海棲艦！ 俺が提督だ！ 狙うなら俺を狙え！」

同じく、深海棲艦が潜む森へ向かつて駆け出した碧輝が叫んだ。すると、摩耶への砲撃が止んだ。

ドンツ、ドンツ！

深海棲艦が潜む森から砲撃が再開された。しかし、標的は摩耶ではなく碧輝に変わった。碧輝は摩耶に顔を向けると、深海棲艦が潜む森に向かつて指を差した。

「わ、分かった！ 碧輝、絶対に当たるんじゃないぞー！」

摩耶は碧輝に向かつて叫ぶと立ち止まった。そして、深海棲艦が潜む森に2連装砲と高角砲の照準を定めた。

「探照灯があれば、森の中がもつとよく見えるのに。」

眩きながら森に意識を集中する摩耶。そのとき、碧輝の悲鳴が摩耶の耳に届い

た。摩耶が驚いて碧輝の方へ顔を向けた。碧輝は左肩に手をあてながら路面に倒れている。摩耶が、慌てて碧輝のもとへ駆け寄ろうとしたときだった。

「俺に構うな！」

碧輝が摩耶に向かって叫んだ。

「くっそー！　よくも、碧輝を！」

摩耶は再び、深海棲艦が潜む森に狙いを定めると、2連装砲と高角砲で速射を始めた。さらに、そのまま森に向かって突撃していく。

摩耶からの激しい砲撃によつて、深海棲艦が潜む森は樹木が引き裂かれて飛び散った。やがて、摩耶の弾薬が尽きて、ダム湖周辺は静かになった。森に潜んでいた深海棲艦からも砲撃はない。

「や、やったか？」

摩耶は樹木が粉碎されている辺りを凝視した。

「電探からの反応がなくなつたわ。」

鳥海の声が聞こえてきた。摩耶は鳥海のもとへ駆け寄つた。

「鳥海！　大丈夫か？」

「私は大丈夫。それより、司令官さんを。」

鳥海はアスファルトの路面に横たわつたまま答えると、碧輝が倒れている場所に

顔を向けた。すぐに、摩耶が碧輝に向かって駆け出した。

「碧輝！　　大丈夫か？」

「何とかな。」

そう答えた碧輝だったが、紺色のTシャツの左肩部分が焦げて破れていた。

「ば、馬鹿野郎！　お前がやられたら、あたしたち艦娘の存在意義がなくなるだろ

！」

突然、摩耶が碧輝に怒鳴りつけた。碧輝は驚いて摩耶を見つめた。しかし、すぐに碧輝は摩耶に向かって優しく微笑んだ。

「摩耶、お前が無事で良かった」

摩耶は、一瞬、目を見開いたあと、くるりと碧輝に背中を向けた。

「ふん！　　カッコつけやがって！　　今度またおとりになったら、本当に

ぶっ殺してやるからな！」

摩耶はそう叫ぶと、深海棲艦の残骸を確認すべく、砲撃で黒焦げになった森へ向かった。

そんな摩耶が指先で涙を拭っているのを、鳥海は複雑な表情で見つめていたのだった。

深海棲艦が潜んでいた森から、2体の残骸が見つかった。その2体の残骸は、軽巡へ級と軽巡ホ級だった。しばらくすると、2体の深海棲艦の残骸は消え去った。

碧輝は左肩に直撃弾を受けたが、軽巡クラスからの砲撃だったことが幸いして、火傷と打撲だけで済んだ。

摩耶は、かすり傷程度で済んだけれど、鳥海は他の2人と比べたら被害が大きかった。

こめかみあたりに直撃弾を受けた鳥海の眼鏡は割れて吹き飛ばされており、さらに、脳震盪（のうしんとう）を起こしていた。幸いにも、こめかみあたりの軽い火傷で済んだものの、めまいが酷く、誰かに支えられていないと独りで歩けない状態だった。

鳥海は、碧輝と摩耶に支えられながら駐車場の黒いプリウスへ戻った。

「今夜は撤退しよう」

「そうだな。あたしも弾薬が尽きたし、鳥海もしばらく立てそうにないし」

運転席に座っている碧輝が撤退を決めると、摩耶も同意した。後部座席の鳥海は横たわった状態で頷いた。

碧輝は、クルマを発進させると、ダム湖の駐車場を後にした。

「碧輝、左肩の傷、痛むだろ？」

碧輝が運転をしていると、助手席の摩耶が碧輝の左肩を見つめながら声をかけた。

「これくらいは傷、1週間もあればすぐ治るよ。それより、この世界には艦娘用に入渠できる場所がない。どうしたら傷を癒せるんだ？」

「どうなんだろうな。とりあえず風呂にでも入っておけば良いんじゃないか？」

摩耶は、正面を向きながら軽い口調で答えた。

「とにかく、鳥海が回復するまではダム湖に近づくのはよそう」

「そうだな。思っていたより、あのダム湖には深海棲艦がたくさん巢食っているみたいだからな」

碧輝が呟くと、摩耶は同意した。

クルマが赤信号の交差点で停車したとき、碧輝は後部座席で横たわる鳥海の様子をうかがった。鳥海は眠っていた。

(つづく)

第37話 摩耶さまの実戦的要望

湖畔の森での砲撃戦で傷を負った碧輝、摩耶、鳥海は、碧輝の部屋に戻ってきた。令和の日本には艦娘を入渠させる場所がない。そのため、摩耶の提案で、とりあえず鳥海を碧輝の部屋のユニットバスに入れてみよう、ということになった。

摩耶は、ユニットバスの浴槽にお湯をためると、鳥海を全裸にして入浴させた。

鳥海が入浴している間に、摩耶は碧輝の火傷の応急処置を施した。

「冷たっ！　　摩耶！　　いきなり火傷に氷を押しつけるなよ！」

「火傷は冷やすほうが良いんだぜー！」

上半身裸の碧輝の傍らで、摩耶は碧輝の左肩の火傷に軟膏を塗ったり、包帯を巻いたり、と不器用ながらも応急処置を終えた。

「あたしは、こういうこと苦手なんだよなー」

「でも、摩耶。包帯の巻き方が上手いじゃないかよ」

碧輝が摩耶を褒めた。すると、摩耶は照れ笑いを浮かべた。

「まあな。やればできるってのが、摩耶さまの良いところだからな！」

摩耶は得意げな顔で明るい声をあげた。

「ところで、碧輝。相談があるんだ」

突然、摩耶が真顔になった。摩耶は、碧輝の正面にあぐらをかいて座ると、碧輝の目をじっと見つめた。

「なんだよ、相談って」

「あたしたち艦娘は、艀装品のブーツのおかげで水上を滑るように移動できるんだ」

「ああ、そうだよな。それは分かってるよ」

「だけど、陸上となると、水上みたいに滑るような動きができないんだ」

「なるほどな」

「だから、ダム湖の道路で深海棲艦と戦ったときは、動きづらくて仕方なかった」

「だろな」

「それで、あたしたち艦娘が陸上でも滑るように動けるブーツが欲しいんだ」

摩耶の要望を聞いた碧輝は、納得した。

本来、艦娘は艀装品である専用のブーツを履けば水上を滑るように移動できる。しかし、陸上となると、ただの重いブーツになってしまい、動きが鈍重になる。確かに、これでは戦いにくい。

「確かに、摩耶の言う通りだ。陸上でも滑るように動けるブーツがないか、インターネットですべて調べてみよう」

「いったーねっど？」

「ちよつとした情報網みたいなものさ」

碧輝は、そう答えると、ローテーブルに置かれたノートパソコンを開いた。そして、インターネットで検索を始めた。

「ランニングシューズではないな。ミリタリーブーツも、ちよつと違う」

碧輝はノートパソコンの画面を見つめながら、摩耶が求める条件を満たすブーツを探し続けた。

「あー！ これなんか良くないか？」

一緒にノートパソコンの画面を見ていた摩耶が声をあげた。摩耶が指さす画面上のブーツに碧輝は視線を向けた。

「なるほど！ ローラースケートか！」

碧輝は納得した。ローラースケートなら路面でも滑るように移動できる。しかし、草原や凸凹の斜面では、ローラースケートでは満足に動けない。それに、水上では役に立たない。

ローラースケートの欠点に気づいた碧輝は、その短所について、摩耶に説明した。碧輝の説明を理解した摩耶は、残念そうな表情を浮かべた。

「水上を滑走できるブーツを履いたまま、陸上でもブーツを履き替えることなく滑走で

きるブーツ」

碧輝はブーツと声に出しながら考えた。

「じゃあ、水上を滑走できる艤装品のブーツに、ローラースケートの車輪を出し入れできるブーツならどうだ？」

摩耶が提案すると、碧輝は、なるほど、と感心しながら彼女に笑顔を向けた。

「それ、良いじゃないか！」

「じゃあ、碧輝。その水陸両用ブーツを買ってくれよ」

「それはさすがに売ってない、というか、この世界に存在してないな、たぶん」

「売ってないのなら、あたしと鳥海のブーツを水陸両用仕様に改造してくれよ」

「ごめん、俺に、そんな特技は無いんだ」

「んだよ、期待して損したぜ」

碧輝は、改造が得意な知人がいないか、頭の中で探してみた。しかし、すぐに止めた。

艦娘や深海棲艦が令和の日本に居ることを極秘にしないといけないからだ。

結局、この選択肢は諦めざるを得なかった。

「ちよつと、鳥海の様子を見てくる」

摩耶が、鳥海が入浴しているユニットバスへ向かった。

碧輝はノートパソコンを見つめながら思考を巡らせる。

艦娘の機装品を開発、改造するには、どうしたら？

でも、そんな異世界の

パーツを改造できるような人物なんていない。それに、艦娘の存在は誰にも話せない。深海棲艦との戦いは、あくまでも『秘密作戦』なのだから。じゃあ、新たに艦娘を呼び出すか？

呼び出すとしたら、ゲームの中で解体するとしたら、誰がいい？

そこまで考えた碧輝は、ある艦娘の存在を思い出して、思わず満足気な笑みを浮かべた。

「そう、いるじゃないか！

技術屋気質の艦娘が！」

碧輝は、ひとり、大きく頷くと、ゲーム『艦隊これくしょん』にアクセスしたのだった。

(つづく)

第38話 『艦これ』からの手紙

碧輝は、ノートパソコンからゲーム『艦隊これくしょん』にログインした。さつそく、艦娘のリストをスクロールしていく。

碧輝が動かす画面上のカーソルが、ある艦娘の名前で止まった。その名前は『明石』だった。

しかし、すぐにまたカーソルを動かすと、今度は『夕張』の名前で止めた。碧輝は、考えた。

明石と夕張のどちらかを呼ぶとしたら、どっちが良いかな？

兵器の修理や

改造だけなら間違いなく明石だけど、戦力としては物足りない。

一方の夕張は、明石ほど修理や改造はできないけれど、新型兵器の開発や技術試験においては明石以上だ。それに、なんといつても、夕張は新型兵装や自分の体格を上回る兵器でも使いこなせる。そういう意味では、夕張は戦力としても頼りになる存在だ。

明石は工作艦でレア艦。貴重な明石を解体して、こちらの世界に呼ぶのは気が引ける。それに、解体すれば必ずこちらの世界に来てくれる、という保証はない。

碧輝がノートパソコンの画面を見つめながら考え込んでみると、ユニットバスから摩耶と鳥海が出てきた。

鳥海は頭と身体に白いバスタオルを巻いている。ダム湖畔での戦いで眼鏡を失っているため、裸眼のままだ。そんな鳥海を、摩耶が支えている。

碧輝は、湯あがり頬を赤らめている鳥海に顔を向けた。

「鳥海、気分は、どう？」

「はい、司令官さん。幾らか身体が軽くなった気がします」

鳥海は頬を赤らめて微笑みながら答えた。碧輝は微笑みながら頷くと、鳥海に自分のルームウェアを手渡した。

「俺のサイズだから鳥海には大きいかもしれないけど、とりあえず、今夜はそれを着てほしい」

「ありがとうございます、司令官さん」

鳥海はルームウェアを受け取ると、摩耶に支えられながら、再びユニットバスへ入っていった。

碧輝は、再び考え込む。

いつそのこと、明石と夕張を解体するか！

日本へのトンネルを見つけて出てきてくれるだろう。

そうすれば、どちらかは、令和

だけど、仮に明石と夕張の2人が令和日本に現れたら、この狭いワンルームで5人で過ごすことになる。

さらに、艦娘4人を養うとなれば、食費も高くなるに違いない。それでは、すぐに俺の貯金がなくなってしまう。

深海棲艦討伐には、お金がかかる。艦娘たちの傷を癒す医療施設、武器の修理施設、弾薬や機装品などの物資の補充や備蓄するための倉庫も必要。

そこまで考えた碧輝は、あまりにも大きな金銭的、物理的な負担を感じて気が遠くなりかけた。

「俺ひとりでは、鎮守府さえ設置できないよ」

碧輝は、そう呟くと絶望的なため息をついた。

もう、深海棲艦の討伐なんてやめようかな。討伐なんて自衛隊に任せて、摩耶と鳥海とで楽しく暮らせばいい。

碧輝は、考えれば考えるほど弱気になっていき、ついにローテーブルに突っ伏してしまった。そこへ、摩耶と鳥海がユニットバスから現れた。鳥海は、碧輝のルームウェアを着ていた。

「ん？ どうしたんだ、碧輝。もう寝ちゃったのか？」

摩耶が碧輝に声をかけた。碧輝は、ゆっくりと顔を上げると、摩耶を虚ろな目で

見つめた。

「どうしたんだよ、碧輝！ お前の目、死んだ魚のようになってるぞ？」

「摩耶、もしも俺が、深海棲艦との戦いをやめる、と言ったらどうする？」

その碧輝の言葉に、摩耶と鳥海は驚いて顔を見合せた。

「どうしたんだよ、急に！ もしかして、ビビってしまったのか？」

「司令官さんが急に弱気になるなんて、何かあったのですか？」

摩耶と鳥海が尋ねた。

「違うんだ。今の俺の経済力では、深海棲艦と戦うお前たちへの支援が十分にできない、と気づいたんだ」

碧輝は、そう答えると自分の髪をかきむしった。摩耶と鳥海は、また顔を見合わせた。

そのとき、ノートパソコンの画面に映し出されている『艦隊これくしょん』のゲーム画面に異変が起きた。すぐに摩耶が気づく。

「碧輝、あたしたちの『舞台』から何か贈り物が届いたぜ？」

碧輝は、すぐにノートパソコンの画面を確認した。いつのまにか『艦隊これくしょん』の画面に、『プレゼント箱GET』の表示が出ている。碧輝は首を傾げた。

「何だこれ？ 何も任務を達成していないのに、どうしてプレゼント箱が出てきた

「んだろ？」

「司令官さん、イベントでもないのに、このプレゼント箱は変です。もしかしたら、何かのメッセージではないでしょうか？」

碧輝の疑問に鳥海が答えた。碧輝は頷くと、プレゼント箱を開けてみた。

すると、プレゼントの中には手紙が入っており、そこには短い文章が記されていた。碧輝たちは、短い文章を読んだ。

『提督。明日の正午、艦首島の廃工場でお待ちしています』

画面に表示されている短い文章を読んだ碧輝は、怪訝そうな表情を浮かべた。

「なんだこれ？ 何かのイベントでも始まったのかな？」

碧輝は、念のため、任務一覧に目を通してみた。しかし、イベント発生時に見られる期間限定任務は、どこにも存在していない。

「なあ、碧輝。艦首島って本当にある島なのか？」

摩耶が碧輝に尋ねた。碧輝は頷いた。

「この街を流れる川に大きな中洲があって、艦首島と呼ばれているんだ」

「その艦首島には、本当に廃工場があるのですか？」

今度は、鳥海が碧輝に尋ねた。

「うん。大きな廃工場がたくさんあるけど、そこは、誰も入りたがらない心霊スポット

なんだ。そんな場所で待っている、だなんて、もしかしたら深海棲艦の罠かな？」

碧輝がそう答えた直後、新たなプレゼント箱がゲーム画面に表示された。すぐにクリックして開けてみる。すると、また短い文章が記された手紙が入っていた。

『艦首島にお越しになる際は、必ず摩耶と鳥海を同行させるようお願い致します。管理人・李紅陽』

手紙を読み終えた碧輝は絶句した。手紙には、令和日本に現れている2人の艦娘の名前と管理人らしき名前が記載されていたからだ。

「摩耶、鳥海。管理人の李紅陽って知ってるか？」

「李紅陽か。名前だけは知ってるけど、会ったことはないな」

「私も、名前は知っています。たぶん、私たちの世界の艦娘は誰も会ったことがないと思います」

碧輝からの質問に、摩耶と鳥海が答えた。碧輝は、何度も手紙を読み返してみる。「司令官さん、これは罠ではありません。なぜなら、深海棲艦が手紙を出すなんて、私たち艦娘にもできないことをできるはずがないからです」

鳥海からの助言を受けた碧輝は、小さく頷いた。

「そうだな。よし、明日、艦首島へ行ってみることにしよう」

碧輝は、決断した。

（
じ
じ
く
）

第39話 艦首島の廃工場群

翌日の正午近く。碧輝、摩耶、鳥海の3人は、艦首島の廃工場に到着した。

市内を流れる大河に中洲があり、その中洲の南端の形状が軍艦の舳先（へさき）に似ていることから『艦首島』と呼ばれている。

艦首島には軍事関連の工場が集中していたが、数十年前に突如として閉鎖されて立入禁止になった。

その頃から、艦首島は極めて危険な心霊スポット、と噂されるようになり、誰も近づかなくなっていたのだった。

碧輝たち3人は、黒いプリウスから降りると、周辺を見渡した。

広大な廃工場群を有刺鉄線付きのフェンスが囲んでいる。廃工場群のゲートには古びた小さな守衛室があるが、当然、守衛はいない。入口である両開きの金属製扉には、幾つもの南京錠がぶら下がっている。さらに、ゲートの横には監視カメラ付きの電柱が立っている。

「廃工場にしては、ずいぶんと警備が嚴重だな」

碧輝は、エアガンのベレッタを手にしながら呟いた。

戦闘用の艀装に身を包んだ摩耶と鳥海も、2連装砲を構えながら周囲を警戒をしている。

「万が一、これが深海棲艦の罠だったら、すぐにクルマで逃げるぞ」

「まあ、逃げるしかないよな。弾薬も少ないし、鳥海は眼鏡がないから砲撃させるわけにもいかないしな」

碧輝の言葉に、摩耶は同意した。

「司令官さん、正午になりました」

鳥海が、碧輝から借りている腕時計を鼻先まで近付けて見ながら報告した。

3人は周辺を見渡した。何も変化はない。ただ、夏の青空の下で沈黙した廃工場群が広がっているだけだ。

約束の正午から10分が過ぎた。誰も現れる気配もない。

「誰も来ないじゃねーか。騙されたんじゃねーのか？」

摩耶が警戒を解いて真つ青な空を見上げた。

「そうだよな。そもそも、ゲーム世界の管理人が、リアルに現れるはずなんて」

「司令官さん、何かが接近してきます！」

突然、碧輝の言葉を鳥海がさえぎった。鳥海は目を閉じて、水上電探のペンダントを握りしめている。

「廃工場とは反対方向、私たちがやって来た方向に、非常に小さな反応があります」

鳥海からの報告を受けた碧輝と摩耶は、廃工場群とは反対の方角に顔を向けた。碧輝はベレッタを、摩耶は2連装砲や高角砲を人氣（ひとけ）がない道路に向けている。「弾薬が少ないんだ。深海棲艦なんて現れてくれるなよ」

摩耶が呟いた。そのとき、艦首島の北辺に向かって延びる道路の彼方から何か近づいてきた。

「何か来る！」

何かの接近に気がついた摩耶が叫んだ。碧輝と鳥海も直線道路の彼方に視線を向けた。

「え？　何だ、あれ」

「ん？　誰かが何かに乗ってるぜ？」

「あれは何でしょう？　初めて見る乗り物ですね」

碧輝、摩耶、鳥海が呟いた。

「どうやら、お婆さんが変な乗り物でこっちに向かってくるようだな」

摩耶は呟きながら2連装砲を構えるのをやめると、その砲口を地面に向けた。

「あの婆さん、凄いな。キックボードに乗ってるよ」

碧輝は笑みを浮かべながら、ベレッタをジーンズの腰にはさんだ。

黄色のキックボードに乗ったお婆さんが、地面を蹴りながら3人に近づいてきた。

「遅くなってごめんなさい！」

甲高いお婆さんの声が3人の耳に届く。やがて、キックボードに乗ったお婆さんは、3人が立っている場所を突き抜けると、ゲートに激突して止まった。その衝撃で、お婆さんは地面に転がった。

「だ、大丈夫ですか！」

地面に横たわるお婆さんに駆け寄る碧輝。すると、お婆さんは横たわったまま、碧輝に笑顔を向けた。

「あなたが司令官ですね？」

「はい。近衛碧輝と言います」

摩耶と鳥海が駆け寄ってくると、3人でお婆さんを支え起こした。

お婆さんは、深紅の長袖のチャイナ服を着ている。その顔は、皺こそ刻まれてはいるが、若い頃は美女だったと誰もが予想できるくらい顔立ちが整っている。そして、大きな瞳だけは年齢を感じさせない程の輝きを備えていた。

「初めまして、司令官！ 私の名前は、李紅陽でえす！」

李紅陽は自己紹介をした。その声は年齢の割には高い声で、明るく、特徴的だっ

た。碧輝は、李紅陽の声を、どこかで聞いたことがあるような錯覚を覚えた。

「初めまして、李さん。中国の方なのに日本語が上手なんですネ」

「うーん。中国といつても、今は台湾に住んでいます！」

李紅陽は碧輝に答えると、明るい笑顔を摩耶や鳥海にも向けた。

「摩耶さんに、鳥海さん、お久しぶりの初めましてですね！」

摩耶と鳥海は、李紅陽の挨拶の意味が分からず、顔を見合わせた。

「んと、挨拶がよく分からないけど、あたしは摩耶だ」

「鳥海です。お名前だけはお聞きしていましたが、会えて光栄でございます」

摩耶と鳥海は、李紅陽に挨拶をした。李紅陽は、2人の顔を笑顔で見つめたあと、

碧輝に顔を向けた。

「初めてキックボードに乗ってみましたら、なかなか慣れなくて、時間がかかってしまいました

たね！」

「は、はあ。」

「じゃあ、本題に入りますね！」

李紅陽は明るい声をあげると、その大きな瞳で碧輝を見つめたのだった。

(つづく)

第40話 謎の老婆・李紅陽

「司令官、この艦首島の廃工場を自由に使ってください！」

李紅陽は、明るい声をあげた。突然の李紅陽からの意外な言葉に、碧輝だけでなく、摩耶と鳥海も啞然とした。

「李さん、意味が分からないんですけど……」

碧輝が廃工場群を呆然と見つめながら答えた。

「ここの廃工場群には、深海棲艦との戦いに必要な施設や装備、物資がそろっているんです！」

「え！ まさか！」

「お！ やったな！」

「嬉しいですね！」

李紅陽の言葉に碧輝は驚いたが、摩耶と鳥海は素直に喜んだ。

「李さん、この廃工場群で『艦これ』と同じように、入渠したり補給したり開発や建造ができるんですか？」

「そうなのです！ ただ、建造はできないですねえ。新たな艦娘は、ゲームの世界か

ら召喚するしかないのです」

碧輝は、李紅陽からの返答を耳にしながら、嬉しく思いながらも半信半疑だった。「司令官は、まだ私を信じていないみたいなので、鎮守府をお見せしますね！」

李紅陽は笑みを浮かべながらそう言うと、地面に横たわったキックボードから赤いポーチを拾いあげた。そして、赤いポーチから鍵を何本か取り出すと、ゲートにぶら下がるいくつもの南京錠を解錠した。

「司令官、そして、摩耶さん、鳥海さんも一緒に中へ」

李紅陽に促された3人は、ゲートから廃工場群の敷地に足を踏み入れた。李紅陽は、ゲートを施錠すると、3人の先頭に立って案内を始めた。

廃工場群の敷地内は、最恐の心霊スポットと噂されているわりには整然としており、稼働中の工場と何ら変わらない印象を受けた。

しばらく歩くと、廃工場群の中でも、ひと際大きな建物までやって来た。それは、まさに現代のオフィスビルといった感じで、3階建てになっている。

「この建物が司令部になります。ここには、提督執務室や作戦会議室、通信室、食堂、キッチン、リビングなどがあります」

李紅陽の説明を聞きながら、碧輝、摩耶、鳥海は3階建て司令部を見上げた。

「では、次に行きますね！」

再び、李紅陽が歩き始めると、3人もそのあとに付き従った。すると、李紅陽は1分も歩かないうちに足を止めた。

「この施設が工廠になりますね！　ここで入渠や兵器の修理、改造、開発などが行えます」

碧輝は、李紅陽が指し示した工廠を見上げた。司令部ほどの高さはないが、サッカーコートほどの広さがありそうだった。

「やったな、鳥海！　ここで入渠して傷を癒せるぜ？」

「そうね！　助かるわ！」

摩耶と鳥海が顔を見合わせながら喜びの声をあげた。しかし、碧輝はまだ半信半疑だった。

「では、次に行きますね！」

李紅陽は、さらに3人を案内していく。数分ほど歩くと、李紅陽は足を止めた。「これが艦娘のための宿舎です」

李紅陽が宿舎だと説明した建物は、3階建てのビジネスホテルのような洗練された外観になっている。

「普通に、ビジネスホテルじゃないか」

宿舎を見渡した碧輝は半笑いした。

「そうです！　全室が冷暖房、ユニットバス、トイレ、冷蔵庫完備の個室になっています！　ただし。」

「ただし？」

碧輝は、李紅陽に顔を向けた。

「16部屋しかありません！」

李紅陽は、なぜか、明るく大きな声で強調した。

「なぜ16部屋？」

艦娘は16人までしか滞在できないの？」

「そうです！　艦娘は最大16人までなのです！」

李紅陽の返答に、碧輝は首を傾げた。

「李さん、なぜ最大16人なの？」

深海棲艦と戦うなら、たくさん艦娘がいるほう

が良いと思うけど。」

すると、碧輝の質問に対して、李紅陽は急に真顔になった。

「令和日本における、深海棲艦との戦いは、あくまでも極秘作戦なのです！」

そのた

め、艦娘が令和日本に現れすぎると良くないのです！」

「そ、そうなんですな。」

李紅陽の突然の気迫に、たじろぐ碧輝。そこへ、鳥海が近づいてきた。

「ご支援に感謝致します。でも、どうして急に、このようなご支援を？」

鳥海が李紅陽に尋ねた。すると、李紅陽はニコリと笑顔を見せた。

「それは、言えないのです！」

今度は、摩耶が李紅陽に近づいてきた。

「とうにかさ、李紅陽さんは何者なんだ？」

「それも、言えないのです！」

「あたしが思うに、李紅陽さんは雪風だろ？」

「はい、雪風です！」

摩耶と李紅陽の会話を黙って聞いていた碧輝は、驚いて李紅陽の姿をまじまじと見つめた。

「え！　雪風なの？　　なんで、お婆さんになってるの？」

「それは、言えないのです！　　ただ、今の私の名前は李紅陽なのです！」

李紅陽の言葉に、碧輝は、意味が分からない、とばかりに唸った。

「そのようなわけで、令和日本における深海棲艦との戦いを、私、丹陽、
李紅陽が全力で艦隊をお守りします！」

「雪風だとか丹陽だとか、登場早々に身バレしてんじゃないかよ」

李紅陽の支援表明を耳にした碧輝が呟きながらクスリと笑った。しかし、すぐに

真顔に戻ると、李紅陽を真つ直ぐに見据えた。

「李紅陽さん」

「何でしょう？」 司令官

「今後、ゲームの世界から令和日本に艦娘を召喚するには、やっぱり解体しかないのかな？」

「はい、そうですね！　すでに艦娘全員には通達してあります。もし、司令官からお呼び出しがあつたら素直に解体指示を受けて、井戸に飛び込んでください、と！」

「いい、井戸？」

「はい、解体された艦娘が令和日本に移動するための出口を改造したのです！」

「もし艦娘が井戸に飛び込んだら、令和日本のどこに現われるの？」

碧輝の質問を受けた李紅陽は、皺の入った顔でニコリとした。

「それはもちろん、この艦首島の鎮守府です！　井戸の出口は、司令部の建物の中に

あるのです！」

「そいつは、すげえや！　碧輝の狭い部屋なんかに見れたら、艦娘たちが可哀想だからな」

李紅陽の話の聞いていた摩耶が、そう言いながら笑った。

李紅陽からの説明に対して、大いに感心した碧輝は、周辺の廃工場群を笑みを浮

かべながら見渡した。

艦首島の廃工場群が取り壊されなかったのも、艦首島が心霊スポットだという噂が流れたのも、すべてこの鎮守府を隠すためだったんだな。

納得した碧輝は、何度も頷いたのだった。

(つづく)

第41話 鎮守府

「司令官、以上で私からの鎮守府の案内は終了です！　ちなみに、必要な物資は、毎月1度だけ潜水艦で鎮守府に届けますので大切に使うてくださいね！」

「せ、潜水艦だつて？」

李紅陽の説明に、碧輝は驚きの声をあげた。

「潜水艦つて、艦娘じゃなくて本物の潜水艦？」

「そうなのです！　大日本帝国海軍の伊号潜水艦です！　この鎮守府に秘密の

潜水艦ドックを地下に建造したのです！」

「そんな大げさな。物資の補給なら、トラックで良かったんじゃない？」

「トラックだと鎮守府の場所がバレてしまいます！」

「それもそうだけど、川を潜水艦で移動するほうが、散歩中の爺さんにさえ見つかると思
うけど。」

「大丈夫なのです！　この川は深さが25メートルあるので、潜航すれば、まず見
かりません！」

「でも、だからといって潜水艦に運ばせるなんて。ちなみに、潜水艦用の地下ドックは

どこにあるの?」

「司令部の地下にありますよ」

「うーん」

突然、碧輝はうつむいて唸った。摩耶が碧輝の肩に手を置いた。

「碧輝、気分でも悪いのか?」

碧輝は顔を上げると、摩耶を見つめた。

「摩耶、俺の頬をつねってくれないか?」

「つねる? まあ、いいけど」

摩耶は、碧輝の頬を思いっきりつねり回した。

「痛いじゃないか! 少しは手加減しろよ!」

「碧輝が、つねろ、と言ったからじゃねえか。おかしな奴だな」

「でも、これは夢じゃなく現実だ、と分かったよ」

碧輝は、赤くなつた頬をさすりながら言った。そんな碧輝と摩耶を見ていた李紅

陽がクスクスと笑った。

「そうだ、李紅陽さんに聞いておきたいことが」

「何でしょう? 司令官」

「もしも、雪風をゲームの世界から召喚したらどうなるの?」

「なんにも問題ありませんよ」

「でも、雪風は過去の自分でしょ？」

「うーん。自分であつて自分じゃないですね！」

「意味が分からない」

「そこらへんは、気にすることはありませんよ」

李紅陽は笑みを浮かべたまま答えた。

「ただ、雪風を大切にしてあげてほしいです！」

李紅陽は、碧輝に向かって頭を下げた。そんな李紅陽に対して碧輝、摩耶、鳥海も、李紅陽につられるようにして頭を下げたのだった。

その後、李紅陽は黄色のキックボードに乗って艦首島の鎮守府から去つていった。

李紅陽は、去り際、碧輝だけにこんな言葉を残していった。

「司令官、艦娘の死は、本当の消滅です。それだけは肝に銘じてくださいね！」

李紅陽からのそんな重みのある言葉を思いだした碧輝は、鳥海と笑いあっている摩耶を遠くから見つめた。

「絶対に死なせやしない！」

摩耶だけでなく、艦娘の誰ひとりも！」

碧輝は、心に誓った。

その後、碧輝たち3人は真新しい司令部へ入った。

司令部の表玄関は両開きのガラスドアになっていた。まるで分譲マンションのようなエントランスを抜けると、正面には高級木材でつくられた艶のある大きな扉があった。

「ここが提督の執務室かな？」

碧輝は、扉を開けた。次の瞬間、碧輝は愕然とした。

「な、なにこれ？　　ここ、提督の執務室だよな。」

碧輝や摩耶、鳥海が見つめる提督の執務室内部は、立派な造りで広々としているものの、ただ、それだけだった。備品が全くない。執務に必要な机さえなかった。ただ、紫色の座布団が1枚だけ執務室の中央に置かれているだけだった。

碧輝たちは執務室に入ると、部屋の中央まで移動した。ふと、夏の光が差し込む窓に目をやった。カーテンさえ取り付けられていない殺風景な窓だった。

「備品だけは自分で調達しろ、ということか。まるでゲームと同じだな」

碧輝が微かな笑みを浮かべながら言うと、摩耶が碧輝の肩に触れた。

「まあ、いいじゃないか！　早く、工場や宿舍も見に行こうぜ！」

碧輝は摩耶に促されるように、何も無い執務室を後にした。

その後、碧輝たち3人は工廠や宿舎をゆつくりと見て回った。どの施設も、鎮守府にふさわしい機能を備えていた。

夕方、碧輝たち3人は司令部の屋上に立っていた。西の山々に沈みつつある太陽が、夏の空にオレンジの色彩を放っている。碧輝は、そんな夕焼けをじつと見つめた。

まるで夢のような展開のおかげで、俺は鎮守府の司令官になった。ここから、新たな戦いが始まるんだな。

碧輝の心は希望に溢れていたけれど、不安も大きかった。これは、ゲームじゃない、本物の「戦争」になるのだから。

夕焼けを見つめる碧輝の両側に、摩耶と鳥海が立った。彼女たちも夕焼けを黙って見つめている。

「摩耶、鳥海、頑張ろうな」

碧輝は夕焼けを見つめたまま、落ちついた口調で言った。

「ああ。碧輝、あたしは、お前についていくぜ」

「はい、司令官さん。私も全力でお支えますよ！」

摩耶と鳥海が、夕焼けを見つめながら答えた。

「ところで、碧輝。せっかく新しい鎮守府ができたんだから、名前をつけたらどうだ？」
「そうですね！」 摩耶の言う通り、鎮守府には名前が必要だと思えます」

摩耶の提案に鳥海が笑顔で賛成した。

「鎮守府の名前か。」

碧輝はそう答えながら、摩耶と鳥海を交互に見つめた。彼女たちの笑顔が夕陽に染まっている。

「明日までに考えておくよ。それより、今日は3人で新しい鎮守府の門出を祝うことにしよう！」

「そうだな！ じゃあ、今夜は美味しいものをたくさん食べようぜ！」

碧輝の言葉に、摩耶が真っ先に反応した。

「もう、摩耶ったら。」

鳥海は、摩耶と碧輝を交互に見ながら満面の笑みを浮かべた。

碧輝は、夜の帳が下りつつある東の空を見つめながら、覚悟を決めたように大きく頷いたのだった。

(第1章・おわり)

【第2章】第42話 新しい鎮守府は資源不足？

艦首島に新しい鎮守府が設置されてから1ヶ月が過ぎた。

艦首島の広大な廃工場群のなかで、ひと際、真新しい3階建ての司令部。外観は、まるでオフィスビルそのものだ。その1階には、提督の執務室があった。

「なあ、碧輝。いつになったら出撃するんだよ？」

執務室の両袖机に座る提督・近衛碧輝（このえ・あおき）に向かって、摩耶が訊ねた。

碧輝は、ノートパソコンから顔を上げると、訝しげに摩耶を見つめた。

「準備が整い次第って言ってるだろ？ 何度もそう言ってるじゃないか」

「それは分かっているさ。だけど、あたしや鳥海以外にも、新たに召喚した艦娘が何人かいるじゃないか。そろそろ、良いんじゃないか？」

「まだ十分じゃない」

碧輝は事務的な口調で答えると、再びノートパソコンに視線を戻した。すると、碧輝の正面に立っている摩耶が机に両手を置いて身を乗り出した。

「艦娘が16人そろって待つというのか？ 最低6人いれば攻勢をかけることは

できなくても、威力偵察くらいならできるだろう？」

「その最低6人が、まだそろっていないじゃないかよ」

碧輝はノートパソコンで作業しながら答えた。

「碧輝、何を言ってるんだ？ 威力偵察できる艦娘なら、すでに6人そろってるじゃ

ないか？」

碧輝はノートパソコンから摩耶の顔に視線を移した。

「摩耶と鳥海以外に、誰だよ？」

「あたしと鳥海だろ。他には夕張、陽炎、朧、祥鳳で十分戦えるじゃないか！」

「夕張は無理だな」

「無理？ 夕張は軽巡クラスだから戦力になるじゃないか！」

「夕張には、明石と一緒に、艦娘たちの兵装の製造をお願いしてるんだ。だから、しばらくは出撃できない」

碧輝の返答を受けた摩耶は、碧輝を見つめたまま黙り込んだ。しかし、すぐに口を開く。

「じゃあ、5人で出撃を」

「摩耶、出撃メンバーは最低6人だと、俺と参謀の鳥海と摩耶の3人で決めただろ？」

もう、その方針を忘れたのか？」

碧輝は、摩耶の言葉を遮るように言った。

「い、いや、忘れちゃいけないけどさ。じゃあ、夕張の代わりに誰を艦隊に入れるのさ？」

伊良湖か？」

「伊良湖？　冗談言うなよ。伊良湖は李紅陽が特別に派遣してくれた給糧艦だぞ。

食堂で艦娘たちのために調理するのが仕事なんだよ」

「冗談だよ。じゃあ、あと一人は誰を召喚するんだ？」

摩耶の質問を受けた碧輝は、ニヤリとした。

「資源不足だから、しばらくは召喚しない。だから、俺が出撃する」

「はあ？　碧輝が出撃って、お前、提督だろ？」

「仕方ないだろ。李紅陽から届く補給物資を積んだ潜水艦は月1度しか来ないし、鎮守

府もスタートしたばかりで物資や資金が豊富じゃない。だから、今はたくさんの艦娘を

養つていく余裕がないんだよ」

「だからと言つて、提督のお前が出撃して、もし何かあつたら」

碧輝は椅子から立ち上がると、微笑みながら摩耶を見つめた。

「そのために、摩耶を俺の特別護衛艦に任命したんだろ？」

「ま、まあ。碧輝は、あたしが守つてやるけどさ。ただ」

「ただ？」

「碧輝の兵装は、あのベレッタとかいう拳銃のエアガンだけだろ？」

あんな貧弱な

武器じゃ、戦力にならないじゃないか」

すると、碧輝は愉快そうに笑った。

「なんだ、そんなことか」

「そんなことか、じゃないだろ。兵装は戦闘に最も重要なんだぞ！」

「分かってるよ。本物の戦闘にエアガンで立ち向かうはずがないだろ。ちゃんと、俺専用の武器を夕張に開発させているんだよ」

「そ、そうなのか！　じゃあ、その武器が完成したら出撃できるんだな？」

「まあ、そんなところだな」

そのとき、執務室の木製ドアから軽いノック音が2度響いたあと、鳥海が入ってきた。鳥海は碧輝に近づくと、摩耶を一瞥してから、提督に敬礼した。

「司令官さん、報告に来ました」

「レーダーの件だよね？」

「レーダー？　あ、電探のことですね！」

はい、鎮守府の大型電探の調整が終わ

りました。これで、鎮守府に接近するあらゆるものを感知することができますようにになりました！」

「そっか！　ありがとう、鳥海。これで司令部の屋上にある大型電探も稼働したら、鎮守府の防衛力が上がったな」

碧輝が満足したように鳥海に微笑むと、彼女も笑顔で頷いた。そこへ摩耶が割り込む。

「少ない資源と資金を、いきなり大型電探の製造に使うなんて意味があるのか？」

摩耶の質問に碧輝が答えようとすると、鳥海が手のひらを碧輝に向けて、それを制した。

「摩耶は防空巡洋艦として対空電探を重宝してるでしょ？　それと同じで、鎮守府

を守るためには電探が必要な。私たちが装備する電探よりもはるかに大きな電探が必要なのよ」

「んー、まあ、そうだけどさ。」

鳥海からの説明に、摩耶はあまり納得できなかった。摩耶には、早く艦娘を多くそろえたい、という考えがあったからだった。

「さすが、鳥海。俺が言いたかったことを、しっかりと説明してくれた」

「ありがとうございます！」

碧輝に褒められた鳥海表情からは嬉しさが滲み出ていた。そんな鳥海表情に気づいた摩耶は、面白くなさそうに2人から顔を逸らしたのだった。

第43話 陽炎のお願い

「よし、昼食前に巡回でもするか！」

碧輝は机の上のノートパソコンをパタンと閉じると笑顔を見せた。

「司令官さん、私は通信室に戻ります。通信士官に電探の操作方法を教えなければいけませんので」

「了解、鳥海。それにしても、李紅陽が派遣してくれたマネキンに電探を扱えるのか？」
「大丈夫です。彼らは、ほとんど人間と同じ知能を備えているようですからね」

鳥海は、碧輝を安心させるように微笑んだ。

李紅陽は、碧輝に艦首島の鎮守府を与えるとともに、数十名の人造人間を派遣していた。

人造人間たちは人間と同じように働くことができるため、工廠要員や警備スタッフ、潜水艦の乗組員として稼働している。彼らの肌は人間よりも艶があるため、碧輝は彼らを「マネキン」と名付けていた。

「鎮守府を与えてくれただけでなく、マネキンたちをも派遣してくれた李紅陽には感謝しないとな」

碧輝は、鳥海と摩耶を交互に見ながら笑みを浮かべた。

「では、司令官さん、私は通信室へ戻ります」

鳥海は碧輝に敬礼すると、執務室から出て行った。パタンと扉が閉まると、碧輝は摩耶に顔を向けた。

「摩耶、一緒に巡回でもするか！」

「ああ、そうだな」

摩耶は笑顔で頷いた。

そのとき、執務室のドアから軽くノック音が聞こえた。碧輝と摩耶がドアに顔を向ける。すると、ドアが開いて、オレンジ色でツインテールの髪型をした艦娘が現れた。それは、陽炎だった。

「陽炎、入りまーす」

明るく元気な声を出しながら執務室に入ってきた陽炎は、碧輝を見るなり軽やかに敬礼した。すぐに碧輝も敬礼を返す。

「陽炎じゃないか。こちらの世界に少しは慣れたか？」

「んー、慣れたんじゃない？　それよりさ、司令。お願いがあるんだけど聞いてくれ

ない?」

「お願いとは?」

碧輝と摩耶が陽炎を見つめる。陽炎は、碧輝に近づきながら摩耶を一瞥した。

「あのね、私は陽炎型の一番艦でしょ。司令も知っているとおり、私には妹がたくさんいるの」

「うん、それは知ってるよ」

「じゃあ、なんで、召喚された陽炎型は私だけなの?」

もつと妹たちを召喚してほし

いのに」

陽炎からの質問を受けた碧輝は、思わず摩耶を一瞥した。先ほどの摩耶への説明をもう一度しなくてはならないようだ、と思ったからだ。そんな碧輝の心の内を読めたのか、摩耶が苦笑いした。

「碧輝、あたしが代わりに説明してやろうか?」

「大丈夫だ、摩耶。俺の口から説明する」

陽炎は不思議そうな顔を摩耶に向けたあと、再び碧輝に顔を戻した。

「陽炎、俺だつてまだまだ艦娘を増やしたいと思ってるんだよ」

「そうなの?」
じゃあ、話が早いわね。今日にでも召喚してちょうだい」

「それが、今はまだ無理なんだ」

陽炎の表情が曇った。

「無理って、どういふこと?」

碧輝は返事に困った。

多くの艦娘を召喚できないのは、彼女たちを養うための資源や資金、食料に余裕がないからだ。副官である摩耶や鳥海には鎮守府の内情を話しても問題ないが、召喚されたばかりの艦娘たちにそれを知らせるわけにはいかない。余計な不安や心配を与えかねないからだ。召喚されたばかりの艦娘たちが不安を抱くようなことになれば、士気にも影響を与えかねない。そんな理由から、陽炎や新たに召喚した艦娘たちには黙っておきたいのだ。

碧輝は、どう説明したら良いのか分からずに黙り込んでしまった。そんな碧輝を見た陽炎は首を傾げた。

「ねえ、司令。どうして黙ってるの?」

「えっと、その…」

陽炎が碧輝の顔を覗き込むように見つめた。碧輝は陽炎と目が合うと、動揺して両目を左右に泳がせた。

「もう、何よ! ハッキリと言いなさいよ!」

陽炎の口調が強くなった。そのとき、摩耶が碧輝と陽炎の間に割って入った。

「陽炎、それについては、あたしから説明する」

「摩耶が？　司令に答えられないことをあなたが説明できるの？」

「あたしは、提督の副官だぜ。説明くらいはできるさ」

「ふーん。じゃあ、説明してよ」

「えつと、そうだな。今は召喚できないことになっているんだ」

「召喚できない？　意味が分かんないわ」

「要するに、そうだな。陽炎を召喚したあと、召喚できなくなったってわけさ」

摩耶からの説明を耳にした陽炎は、怪訝そうな表情をしながら摩耶をじっと見つめた。

「ねえ、摩耶。私が、そんなウソを信じると思ってるの？」

「ウソなんかじゃないさ」

「じゃあ、なんで、私のあとに祥鳳が召喚されてきたの？」

「あ、しまった！」

陽炎にウソを見破られた摩耶は、気まずそうな顔をしながら碧輝に顔を向けた。碧輝は摩耶を一瞥すると、やれやれ、と言わんばかりにため息をついた。

「もう！　二人して何を隠しているのよ！」

陽炎が碧輝と摩耶に鋭い視線を投げる。碧輝と摩耶は困惑した表情で顔を見合

わせた。

「もう、いいわよ。そんなに話したくないなら無理に訊かないわ」

陽炎は、ため息をつくど、執務室から出ようと碧輝たちに背中を向けた。

「陽炎、待ってくれ」

碧輝が陽炎を引き止めた。陽炎は「何よ」と言いたそうな顔つきで振り返った。

「まだ十分な資源が無いんだ」

碧輝は少しうつむきながら、ポツリと話した。そこへ、摩耶も口を開く。

「そうなんだ。まだ鎮守府が立ち上がったばかりで資源や資金が少ないんだ。だから、艦娘を増やす余裕が無いんだよ」

「なーんだ、そんなことなの。じゃあ、仕方ないわね。でも、そんなこと、二人して隠すようなことじゃないのに」

碧輝と摩耶は、思わぬ陽炎の反応に少し驚きつつも安堵した。

「陽炎、気にしないのか？」

「別に、気にしないわ。もしかして、司令は、私がそんなことを気にする、と思っって言わなかったの？」

碧輝は黙ったまま頷いた。すると、陽炎は明るい声で笑った。

「資源が少ないことくらい、何よ。だったら、みんなで節約しながらやっていけばいい

じゃない？ 私だって、無理言って妹たちを召喚しろ、なんて言わないわ」

「そうだな、陽炎の言うとおりだ」

陽炎の前向きな言葉に、摩耶も同調した。

「ねえ、司令。私を選んで召喚してくれた以上、この陽炎は、司令についていくわよ！」
陽炎は明るい笑顔で碧輝を見つめた。碧輝もまた笑みを浮かべながら何度も頷いたのだった。

(つづく)